
IS 勤勉パラメータ極振りで

貴仁辺人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 勤勉パラメータ極振りで

【Nコード】

N5357Z

【作者名】

貴仁辺人

【あらすじ】

織斑一夏。女性のみが扱えるはずのパワードスーツ、インフィニット・ストラトス——通称『IS』を操縦できてしまった、世界でただ一人の男性。しかし彼の興味対象は——？ 違う性格の一夏を目指す方向こそ違えど、信念は変わらない。これは、そんな彼の物語。ある程度の3人称の練習も兼ねているので、気軽に指摘や評価いただけると嬉しいです。自分で見ててもわかりにくかったんで、タイトルに「IS」を追加しました。

e - 1 戸鉄海月は一時的世界のウイルス（前書き）

注

この物語は、本編と一切関係がありません。

本編と関係はないのに本編ネタバレを含みかねない（しかも、僕の扱ってるIS二次創作両方の）番外編内容となっています。

e - 1 戸鉄海月は一時的世界のウイルス

それほど狭くはない一室で、カチャカチャとタイピングの音が響く。

2つのタイピング音は共鳴し、リズムの悪い打楽器のようにも聞こえた。

不規則な間隔で音は鳴り響くが、ふと、画面とにらめっこしていたうち片方の手が止まった。

「ん、つああー……」

欠伸を漏らし背伸びをした彼——織斑一夏につられて、もう片方も一旦タイピングする手を休める。

「ああ、悪い、集中力途切れさせちゃったか？」

「違う」

もう片方の彼女——更識簪が、PCの横に置いてある紙コップの中身を一気に飲み干す。

少し顔をしかめてべえと舌を出した簪はそれから、追加のコーヒーを買いに行くべく席を立ち上がった。

「あ、待った」座ったまま、一夏が簪に声をかける。「扉出たこの自販機って、コーラとか売ってたっけ？」

「うーん、わかんない」

「んー……そんじゃまあ、いいや。俺も一緒に買いに行くよ」

ポケットの小銭を確認する一夏。偽造防止用のギザギザが入った500円硬貨2枚が、ポケットに突っ込んだてのひらとぶつかった。

「買うやつ言ってくれば、一緒に買ってくるのに……」

「なんか、少し席を立ちたい気分なんだよ」

一夏は立ち上がると、自身の右肩をポケットに入れていない左手で揉んだ。「分かんない？」

「うつん、分かるよ」

「そりゃー僥倖」

「無性に立ち上がりた時なんて、大体は疲れたときだから、幸せでもなんでもないんだけどね……」

「……違うない」

扉を開くと、大きく鐘の音が聞こえた。

これが何度目の音なのかは、彼らは分かっていない。けれど、静けさの中で鳴り響く鐘の音が除夜の鐘であるということぐらいは、日付と時間を考慮して理解していた。

「……後少して年越して日に、俺らは何やってんだろーな」

自販機のボタンを押しながら、一夏が呟く。

「あれ？ コーラあったのに、結局コーヒーにしたの？」

「うんにゃ、奢り」

「ええ！ ちょっと待って、コーヒー買うお金ぐらい持ってるよ！？」

「いいのいいの、世論で言えばこういう時は男性が女性に奢るもん
だ」

「いつもは女尊男卑論には反対してるくせに……」

「あーヤベー間違えてコーヒー買ったー、どうしようかなー」

「棒読みすぎ……」

文句を言いながらも、別に受け取ること自体が苦になるというわけでもないのに、簪は一夏が伸ばした腕からありがたくコーヒーを頂戴した。

彼自身も目的のコーラを買った、再び鐘の音が響く。しかしその余韻も、扉を閉めれば完璧にシャットアウトされた。

部屋は、完全防音である。中で響く音は中で発生した音だけだ。そして今この部屋で発生しうる音と言えば、2人の声とタイピング音ぐらいのものだ。

「何で企業っていうのは、こう他人を過労死させたいものなんかねえ。正月までに仕上げなきゃならんもんを大晦日に連絡するとか、頭おかしいんじゃないか」

「確か……去年のゴールデンウィークも、そうじゃなかったっけ……」

……」

「あーそうそう、5連休のはずがただの土日休みと一緒になったんだったか？ いやでも、これは流石にまずいだろ。就職する予定の俺はともかく、簪さんなんてIS学園の受験を控えてる時期だぜ？」

「それは別に……今更勉強しなくても、受かる」

「俺も女だったらそのぐらい行けそうな気がするけどな、って、そういうことじゃなくて！」

IS学園は、非常に——というより異常に——高い倍率を誇る。国立で設備がいろいろにIS関連の仕事は将来が約束されており、更にはIS知識に特化した学園は世界中でIS学園ただ一つだけだからだ。

それでも、入学に必要なのはどちらかと言えば基礎知識とISへの高い適性。このうち前者において、一夏と簪は中学3年生の中ではトップクラスの知識量を持っていた。

つい先日彼らが受けたある塾の難関高校プレの模試で、2人が1位と3位だったという事実が、これを裏付けていた——最も、一夏は高校受験をする予定がなかったためのただの暇潰しみたいなものだったのだが——。

ただし問題は『一夏は男性であり、そもそも入試を受ける最低条件が満たされていない』ということだ。この点だけが、織斑一夏と更識簪を隔てていた。

「織斑くんは、解く側より作る側でいけちゃうでしょ……」

「いや、流石に無理。変に捻りすぎて入学できるのが簪さん含め5人ぐらいになっちゃうかもしれない。問題を作る方々は本当にすごいと思うぜ」

真顔で話す一夏だが、それほど彼らの能力は他と比べて特出していたのだ。

簪が渴いた笑い声を出す。画面に集中しているために、目が笑っていないかった。

「……お、そろそろ年明けか。蕎麦とかないのが残念だけど、一応、

カウントダウンぐらいしとくか？」

「えっ？ …… こっちのPCだと、もう年越しちゃってる、よ？」

「待った待った嘘だろ！ まだ58分って表示されてるぞこっち！」

「でも、ほら…… 携帯も、もう過ぎてる」

「げえっ ……ズレてんのか、俺のヤツ。んじゃ、少し遅れたけど。

明けましておめでとうございます」

「うん、明けましておめでとうございます」

続けて「本年もよろしくお願いします」までは2人で交わしたが、その後が続く会話はなかった。

カチャカチャと、タイピングの音が、室内に響くのみだった。

「…… あー…… またこれか」

目の前の机に広がった数学のテキストを眺めつつ、俺は溜息を吐いた。

溜息と同時に、部屋の扉が開いた。

「ん、どーしたんだい兄貴。受験勉強のしすぎで頭がおかしくなったかい？」

「あ、水母か。…… ん、今って大晦日？」

「いやいや、時間確認ぐらいしっかりしとこうよ？ もう年明けだよ」

やっぱり、だ。

目の前のテキストは、たしか12月末から1月始めごろに解いていたもの。筆跡も自分のものだし、このテキストは俺が解いていたものと見て間違いないだろう。

…… ああ？

ちよつと待て。

もしかして、異世界に飛ばされたんじゃない、これは別世界の俺

なんじゃないか？

「なあ妹」

「おにーちゃんがいきなり変な呼び方をしてくて、妹は凄く引いた」
「おせち作らんぞ」「やめて！」

間違いない。大晦日と正月の境目に、俺は外に出てはいなかった。慌てて足首を確認すると、フィタはそこにはなかった。『ヴェレ』、心で叫んでも自分の体は光に包まれない。

「つーことは、俺がこの世界から消えても、行動によってはこっちの俺がやばいことになるってことか？」

「おにーちゃんがいきなり意味不明なつぶやめて下さいおせち美味しく作って！」

「俺の心はそこまで狭くないと自負してるんだけど」

ふう、と胸を撫で下ろす水母。しかしそれから、すぐにぽんと手を叩いた。

「あれだ、兄貴^{おにー}さん、こないだの模試で1位を取れなかったことを不服に思ってるんじゃないかい？」

「そんなこと……あ？」

いや待てよ、確か12月初頭に受けた模試だよな？ 全国1位しつかり取ってた記憶があるんだが、んー……？ こっちでは、そういう差があるってことか。

「詰まったってことはやっぱり、多少は気にしてるんだ」

「別に。予定のところに奨学金貰いながら入れる水準には達してるんだし、その程度のことは気にならないさ」

「へー、それならいいけど。んまっ、私はおいしいおせちが食べれば、文句は何にもないさ」

水母が部屋を出ていくと同時に、プリントを整理してある筆筒をガサゴソと漁る。模試結果は一箇所に纏めておいたはずだから——あった。

……確かに、総合2位になってる。一応研究者さん達にこれでも

かと知識を詰め込まれたはずなんだが、それでも1位を俺から奪う
って。誰だろ？

「ホラやつぱり、気になってるじゃん」

後ろからいきなり声が掛かった。水母だ。こいつ、忍び足で来や
がった。

「お前が言うから気になったんだろーが」

「はいはい、そういうことにしておくよ。まあ、どうせもうすぐ本
番なわけだし、その1位の織斑一夏を見返すチャンスは当分先だろ
うけどねえ」

「だから見返す気は……ん？ 今お前、織斑一夏って言ったか？」

言った。聞き返すまでもなく言ったよコイツは。1位が、織斑一
夏？

水母の「お前も名前確認したじゃん」という顔が非常に癪に障る
が、今はそれほど重要でもない。

「アイツ、そんなに頭良かったっけな……」

「なんだ、知り合いだったの？」

「うんにゃ、ここにいる俺としては知り合いだが、俺の知り合いじ
ゃない」

「兄さん、救急車呼ぼうか」

「わかんなくていいよ。それよりお前は俺の呼び方を統一しろ」

「馬鹿兄貴」

やつぱり、おせちを作るのはやめることにした。

さて、問題となるのは「なぜ俺はこんな所にいる」だよな。

前回はたしか、理由すら分からず仕舞いで元の世界に戻ることに
なった。今回こそ、原因の一部を突き止めるぐらいはしたい。

ということは……俺の世界との誤差に、何かしら関係がありそう
なんだよ、なあ。

すなわち、「一夏か……」ってことになる。

……あいつの家が分かれば楽なんだが、分からのだよな。とい

うよりそもそも、俺が消えた後にこっちの俺に迷惑が掛かるような行動はタブーだ。アウトだ。

一方的に監視？ 頭がおかしい。通報される可能性がある上に、だから一夏の現在地が分からねーって言ってるだろーが！

そこらの公衆電話から一夏の携帯に連絡を入れる……この先の俺がIS学園に入学するのかもしれないのか、それが一番の問題だ。

もしこの世界の一夏が瞬間記憶能力でも持っていて、俺がこの世界でもIS学園に入るのだとしたら。その場合、こっちの俺は確実に疑われるだろう。

全てが分からない以上、なにもかもが手探りだ。

……いや？

「手探りじゃねえじゃん！」
そうだ。

1つだけ、今からでも知れることがある——時間だ。

確か、この間、俺の首筋に数字が入っていたはず。それが制限時間であると、夜這いまがいの行為をして判断した男がいた。

なら、今回も首筋だろうか？ 勝手知ったる我が家、今すぐ洗面所へゴーだ。

「……あつた」

首筋に、02の数字がある。水色の、擦っても取れない数字というのは違和感があるが——気にしないでおこう、タトゥーの一種だ。それより、今回は2日。00の日もカウントするのなら3日。そうと決まれば寝るか。おせちは作ってやらないわけだし、下準備をする必要もない。

部屋に戻ろう——そうして扉へと振り返った時、再び首筋が鏡に映った。

01。

「……はい？」

59。

58。

「2日じゃなくて、2分かよおおおお!？」

一体何のために飛んだんだ! これ、一体どういう理由があんだ!？」

なんて考えている間にもどんどん時間は進んでいくわけ——

「そうそう簪さん。覚えてる? 今年の正月」

「うん……書いてた文書データがいきなり吹っ飛んじやった、アレでしょ?」

「それ。書いてたデータをメールで送ろうとしたら、意味不明な誤動作でPCのデータを全部消されたアレ。すぐ調べてもどうしても原因がわからなかった奴」

「なんで、あんなことが起きたんだろうね……」

世界のねじれの清算は、こんな所で起きていた。

1-1 クラスメイトは全員反論者

——これは、どうしたものか。

目の前で光る、名も知らぬISを見つめながら、織斑一夏はそう思った。

分かっている。これは仕掛けられたことなのだろう。でなければ、自分がISに触ったところで、反応するわけがない。仕掛人は恐らく、自分のよく知っている女性だ。それ以外に、この状況を作り出せる人間なんて思いつかない。

IS。インフィニット・ストラトス。宇宙進出を目的として作られた、いや造られた、女性のみが装着できるパワードスーツ。彼が今触って、そして起動させている物体は、そういうシロモノだ。そして、「女性のみが装着できる」という部分がミソである。

何を隠そう、彼こそ織斑一夏は、男なのだ。過去に性転換手術を受けたわけでもない、完璧な染色体XYなのである。

——男である自分が触ったときに反応するだなんて、ありえないのだ。

第一、前は反応しなかったのだから。

だったら、仕掛けなんてそれごと潰してしまえばいい。少なくとも、今の彼にはそれが可能だ。それも、容易に。

さあ——と、一夏がISと向かい合いなやら意気込んだところで、残念ながら自身への気合いの注入は無駄骨と化す。

それがなぜかと言えば、「その君！　ここは部外者以外立入——」といったように、背後から女性の声が聞こえたためだ。

——よく考えれば、さっさとISから手を離していればよかったのではないか。

織斑一夏は自分の失念に今更後悔するも、背後で慌てて関係者と

連絡を取っている女性の声がいかに大きかったせいで、溜息は誰にも聞こえなかった。

とりあえず、今から事情聴取があるんだろうなあ。それならいっそ、このISに乗り込んで逃げ出してしまおうか。ぼんやりと彼が考えていた内容は、余りにも物騒で、しかもはた迷惑なものだった。

それから、IS学園の入学式直後までの間に、一夏が脳に記憶した情報はあまりなかった。

急遽入学が決定したIS学園で、勉強に最低限ついていくために必要な資料。殺人現場で鈍器になりえる分厚さのそのの中身と、後はIS学園で遭遇する可能性が低くはない人々の名前。彼が覚えたのは、大体それだけだ。第一に、ISの基礎知識など彼はほとんど知っていたため、ここ最近新たに開発された武装や理論の大雑把な内容程度しか、彼の頭の肥やしにはならなかったが。

強いて他に覚えたものがあるとすれば、今——教室、初のホームルーム——、周りの生徒から向けられる強烈な視線からの不快感くらいであろう。とにかく、覚えたのベクトルが違う方向であることは、どうやら間違いない。

とはいえ、たかだかこの程度の不快感なら、彼はとくに慣れていた。

たとえ、周囲の生徒が自分に集中しすぎているせいで、壇上に立つ緑の髪の小柄な教師が涙目になっていようと、彼は気にするそぶりも見せない。

そうして、やけに殺気立った空気の中、入学祝いの言葉は流れて行く。

その後で、自己紹介なるものが始まった。

早くクラス唯一の男子の番に回したのであるう、早い、早い、「織斑」より若い出席番号（名字が「あ、から、おりむよ、まで」で始まる生徒）達の自己紹介は、1人20秒取っているかすら怪し

いスピードで終わってしまう。

2分もしない間に、自己紹介のローテーションは一夏の番へと変わる。

全方位からの期待の眼差しを受けながら、副担任に呼ばれる前に、一夏は立ち上がった。

「織斑一夏です。2年からの志望は整備科、趣味は機械いじりと議論。得意なことは知り合い曰く勉強、苦手なことは球体型キーボードの操作です。あ、それと、机に突っ伏して寝てたりしたら大体は徹夜後なんで、授業中でも起こさないでいただけると助かります」

予定通りにスラスラと、一夏は自己紹介を終わらせた。カンニングペーパーでも用意していたのではないかとさえ思わせるほど、その説明は流暢で無感動。思わず、場の空気は一瞬静まり返った。だからだろう。

可能な限り自身のことを丁寧に教えたはずの彼は、突如飛来した出席簿による強烈な一撃を、全く予想することができなかったのだ。教室中に、パァンッ！と大きく音が響く。続けて一夏の頭と机のぶつかるゴツという音が響き、女子達から多少の悲鳴があがった。しかしけろりと一夏は起き上がり、まるで起き上がることを知っていたかのように、攻撃主——織斑千冬は、そのまま言葉を続けた。

「授業中に居眠りする予定を今から作っておくだ？ いいご身分だな」

一夏が振り向くと、そこには自身の姉——織斑千冬が、いた。

「やだなあ織斑先生、言葉のあやですよ。第一、授業中に寝るぐらいなら、PCの中身を整理でもしますって」

「授業を受けろ、授業を」

瞳を閉じて、首を左右に振る千冬。だがしかし、生徒一同の興味は別の部分へ注がれた。

「ちよっと待って、2人とも、名字は織斑？」

「つてことはまさか、2人は家族か、それとも親戚！？」

「真相はどうなの、織斑君！」

当の一夏は目を見開いていた。

自分の名前は既に何度もニュースで流れていたし、姉も世界的な有名人。名字の一致など、とっくの昔に判明していたもの、と、彼はそう考えていたのだ。

「いかにも、織斑先生は俺の姉だよ」と、当たり前のように彼は返事をした。

そうして、彼を二回目の不意打ちが襲う。こちらは一夏には予想外であったが——大歓声が、否応なしに彼の耳を覆ったのだ。

慌てて耳を塞ぐも、どうやら被ダメージを防ぐことはできなかったらしい。頭に、金属音のような余韻が響く。

「五月蠅いぞ、静かにしろ！」

こういった状況には慣れていたのでだろう、千冬は特別身構えるでもなく、教室中に響く声でそう言った。

威圧感を感じたのか、歓声は一瞬でやむ。

「別に興味を持つなどは言わん。だが今はホームルームだ。そういう話は休憩時間にやれ！」

そりゃないよ。自分の身が売られたということに即座に気付いた一夏だったが、残念ながら声に出して反論することはできなかった。千冬の言葉で納得したのか黙った生徒達を前に、千冬はようやく仕事——担任としての——を始めた。

1 番最初の休憩時間。

当然のように、クラスメイトの女子達のほとんどが、一夏の元へ寄ってくる。

勿論浴びせられようとしたのは飽和しきれない量の質問だったのだろう。しかし彼は、それを「ちよつと待って」とジェスチャーで牽制した。

「実は、知り合いがうちのクラスにいるらしいんだ。出来れば、そ

つちと挨拶してからでいいかな？　大丈夫、逃げ出したりはしないから」

そう言つて、極めて紳士的に質問を止める。それから席を立ち上がつて、クラス中を見回す。

目的の生徒は、すぐに見つかった。何せ目が合つたのだ。

ということは、あちらも自分を認識しているはず。半分の確信ともう半分の不安をもつて、一夏はその知り合いに声をかけた。

「――箒、久しぶり」

「ああ、久しぶりだな、一夏」

不意に、辺りの空気が静まる。それで一夏は、周囲がこちらを見つめていることに気付いた。

「ここじゃなんだし、ちよつと廊下で話そうか」

箒の側も居心地はそこまで良くなかつたのだらう。二つ返事で了解を得て、2人は廊下へ出ていった。

廊下に、人の姿は見当たらない。

ふつう、学校の廊下といえは休憩時間は行き交う生徒で騒然としているものだ。少なくとも、一夏の頭の中ではそういうものだと思つていた。その「ふつう」の考えからしてみれば、今の廊下は非常に静かだった。

――ま、初日ならまだ友人も少ないだらうし、他のクラスは今頃中で親睦を深めているんだらう。そう考えると、今の自分達は妙に浮いている。

とはいえ、別に苦になるといつたわけでもない。というか、一夏からしてみれば、男子である時点で自分は浮いているのだ。既に振り切つて浮いているのであれば、これ以上「普段なら浮いて見られるような行動」をしようと、大気を突き抜けるような浮上はしないだらう。

一通り周囲に気を配ると、一夏は知り合い――幼馴染の、篠ノ之箒――の方に向き直つた。

「いや、あの人繋がりがあるからここに入学してとは思つたけど、

同じクラスになるとは思ってたよ」

「まあ、な。それより、自己紹介も途中で切れたというのに、よく私だと分かったな？」

「当たり前じゃないか、そもそも篤、昔の姿をそのまんま大きくしたように見えるよ」

——特に、髪型とか。

長いポニーテールは彼女のトレードマーク、それが一夏の認識だった。

人が他人を見分けるとき、3割ほどの部分は髪型を重視するらしい。そこがそっくりで、更に纏う雰囲気も似ている。最後に会ったのは小学校の頃だが、一夏としては間違えようもなかった。

「あ、そうそう。剣道、全国優勝おめでとう」

「何故知っている！？」

「いや、どうしても何も……何せ全国、しかも優勝者は見目麗しい少女とくれば、いろんなメディアで取り上げられる」

「み、見目麗しい？」

あくまで一夏はあたりさわりのない世間的な評価を言っただけ、勿論篤はそんなことを知れるはずもない。

そして、一夏もそれを説明はしない。彼らの間に一つ、勘違いが生まれた瞬間だ。

最も、今のところは些細な勘違いである。

「さて、そろそろチャイムも鳴っちゃうから、教室に戻ろうか」

「う、うむ！ そうだな、そうするとしよう！」

——少なくとも、一夏にとっては、だが。

やけに上機嫌な篤に首を傾げつつ、一夏は教室へと戻っていった。学校中にチャイムが鳴り響いたのは、2人がちょうど自身の席に着席した直後だった。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した場合は、刑法によって罰せられ——」

教科書の内容を、真耶はすらすらと読み上げていく。

——確かこれは、5冊ほど支給された教科書のうち2番目に分厚い教科書の8ページ目に掲載されている内容だったはず。

一夏はと言えば、副担任の言葉を右から左に流しつつ、頬杖をついて欠伸を噛み殺していた。

法律に関与する部分は、ISの授業であろうとふつ々の公民の授業内容とそこまで変わりはない。そして内容も基礎の基礎だったので、ノートに文字を書き込む気すら、彼にはなかった。

「……織斑君、授業のノート取らなくて、大丈夫なの？」
不安げに、傍の席に座っている女子が一夏に尋ねる。

「ああ、うん。ここの内容は俺が初めてこれを勉強した3年前と一緒だからね。大まかな内容は覚えてるし、ノートを提出しろって言われたら昔書いたやつをそのまま提出する」

遠回しだが、一夏はこの授業を受けている必要はないと宣言したのだ。自然、彼に話しかけた女子からは苦笑いが漏れる。

「あ、でも、山田先生の授業はかなり分かりやすいと思うな。教えるのがうまいっていうか、そんな感じ」

そして、再び一夏は欠伸を噛み殺す。

せめてノートを取っているポーズだけでも見せればいいのに、一夏はそれすらもしない。

どうも、その姿は真耶には、「お手上げ状態」であると映ったらしい。

「織斑君、ここまでで分からない所はありますか？」

とは言え、真耶も一夏を攻める気はなかった。

そもそも入学はかなり唐突に決定したことだし、彼は今までにISに関して触れることはなかった、と、そう思い込んでいたのだから、仕方のないことだ。

最も、彼の姉である織斑千冬に、一夏のことをちゃんと聞いていたのならば——

「いえ、大丈夫です。この教科書だったら、一応全部覚えています」

「は、はい…… そうですね、それならよかったです」

——というような会話と、その後の気まずい沈黙は発生しえなかっただろうが。

「それならノートをとらんか、馬鹿者」

沈黙を破ったのは、教室の隅で待機していた千冬だった。

再び頬杖をついた一夏の背後に忍び寄り、強烈な出席簿アタックが炸裂する。

衝撃で、一夏の掛けていた眼鏡がずり落ちる。

「痛いです、織斑先生」

「お前が授業をサボタージュするからだ、馬鹿者。一度覚えた内容というのは分かっているが、お前はもう少し教師に敬意を払え」

眼鏡をかけ直しながら、渋々一夏はノートを取り出す。

別に、彼は持つてきていなかったわけではないのだ。ただ単純に、そのノートが授業用ではないだけで。

「織斑、眼鏡を外せ」

「え、織斑先生！？ それでは黒板が見えないのでは？」

真耶が不思議そうに尋ねる。千冬は、それに即答した。

「いや、この眼鏡橋は視力を矯正するものではないんだ。むしろ――

――外の現象を無視するための装置、だな」

「？ ええっと、それはどういう――」

「とにかく、眼鏡がなくても授業には何の問題もない」

「は、はあ……」

自身が眼鏡を掛けているせいだろうか、それでも真耶は納得が行かないようだ。

「織斑先生、本当に外さなきゃ駄目ですか？」

「当たり前だ、授業とは関係ないだろう」

「間接的には、関係ないってこともないですけど……」

すぱーん。小気味いい音が、またしても教室の静まった空気を支配する。

そう何度も何度も頭を楽器にされていてはたまらず、一夏はよう

やつと眼鏡を外した。

「それは預かっておこう、帰る前に渡す」

「精密機械なんだから壊さないでくださいね、『千冬姉さん』」
「分かつている」

『千冬姉さん』。呼び方を変えたということは、即ち教師生徒としてではなく姉弟として、学園での初めての会話だった。

言い換えれば、教師ではなく身内という、重要な願いだったということだ。

千冬は、現在ケースを持っていなかったで、仕方なくその眼鏡を自分で掛けた。

途端、少々のうめき声が千冬から洩れる。

「織斑先生、大丈夫ですか!？」

「問題ない。山田君、授業を続けてくれ」

うめき声が聞こえたには聞こえたが、千冬は特によろけるでもなく、再び教室の隅へ戻っていった。

「ええっと、どこまで話しましたっけ、確か――」

そうして、再び真耶の声が教室に響くようになった。

2度目の休憩時間。今度こそ、一夏は女子達による膨大な質問攻めを捌くこととなった。

質問の内容は多種多様。「ISに乗れるのは、もしかして千冬の弟だからか」「ここに入学する前は、どこの高校を受ける予定だったのか」「千冬のプライベートはどういったものか」「男性IS操縦者として、立場をどう感じているか」「メールアドレスください」。質問内容は真面目なものが半分、ふざけているとみて間違いないものが半分といった具合だ。

その1つ1つに、一夏は丁寧に戻答してゆく。「いや、有名操縦者の親族が乗れるというなら自分以外も乗れるはずだ」「そもそも

入学はせず、倉持技研という研究所で働く予定だった」「言ったら殺されるので、ずばらすぎて部屋は魔窟と成り果てているだなんて絶対に言えない」「元々の予定よりお金が入る点ありがたい」「アドレスは4つ持つてくけどどれがいい」。返答が的確なゆえにひとつの質問に裂かれる時間が多くなる。

これは、次の休憩も質問攻めかな。一夏がそう思った、ちょうどその時だった。

「ちよつと、よろしくて？」

背後から声がかかる。質問の1つと受け取るには、多少不安なもので、一夏は数瞬だけ振り返ることを躊躇う。

しかし、ここでケンカ沙汰ということもないだろう。そう判断し、結局振り向くことにした。

彼の振り向いた先にいたのは、金髪の髪を持つ少女だった。

一夏はその姿に、多少心当たりがあった。

「ああ、ええつと……セシリアさん、だから……あ、もしかして、イギリス代表候補生のオルコットさん、かな？」

「あら、自己紹介はきちんと聞いてらしたのね？」

「調べれば、すぐに情報が出てきたからね。一応、同い年の代表候補生ぐらいは全員調べておいた。まさか、本当に同じクラスになるとは思わなかったけれど。専用機ブルー・ティアーズ、イグニッション・プランのティアーズモデルの一種、だったかな」

イグニッション・プラン。欧米連合の統合防衛計画。イギリスは参加国の1つであり、ティアーズモデルはまさきに実用化の目処が立ったモデルだ。少しばかり調べれば、情報は簡単に出てきた。

「やはり……男性だというのに、何故そこまでISに詳しいのですか？ 確か、先程の授業でも、既に内容を理解しているとおっしゃってましたわよね？」

しかし、「少しばかり調べれば」は、あくまで一夏の感覚に過ぎない。一般人の思考からすれば、5冊分の教科書をいきなり渡されれば、他のことを調べている時間などないというのが常識なのだ。

「いやほら、渡された教科書のうちいくつかは、既に知ってる内容だったからさ。本来そこに使ってた時間を予習に使ったんだ」

「なるほど、そういうことでしたか……しかし、男性である貴方が、何故ISの知識を元から蓄えていたのですか？」

「男だから女だからって差別する必要、ないんじゃないかな？ ISに乗れるのが女性ってだけで、別にIS関係者を女性固めする必要はないし」

一夏としてはごく自然に出た言葉だったが、しかし、周囲の生徒はおかしく感じたようだ。

「しかし、乗れるのが女性である以上、中心人物は女性であってしかなるべきなのではないですか？」

内心一夏は少しだけ面倒臭さを感じる。

ISに女性しか乗れないことが発覚してから、急激に広まった女尊男卑。ともすれば街中で男性が女性に小間使いのように扱われるこの社会では、あくまで女性主義という考え方をする人間がかなり多い。

そして、世界最強のIS搭乗者でありながら別に男女差別を行わない姉を持つ一夏は、その女尊男卑の社会的な流れとは相いれぬようなきらいがあった。

「乗るのは確かに女性さ。けれど、それには優秀な技術者と研究員がいてこそだ。詰まるところ、ISに乗れる以外に男性と女性が差別されるべき部分は、何一つない。少し言葉が悪くなるけれど、セシリアさんは極端に考えすぎだよ」

確かに、それは正論だった。

ISに乗れる女性がいて、それだから女性が優遇されている。しかし、それに便乗して針小棒大に自分の権利を語る女性も多々いる。だが、男性には不可能な国家貢献をする可能性がある女性とそうでない女性をより分けることは不可能であり、セシリアの女性優遇主義もまた真理のひとつだ。

自身の持つ正論をチャンバラさせてもお互いの争いを加速するだ

けである——が、しかし、今この場において主流なのは、明らかに女性優遇主義だった。

「織斑君って、変わった考え方するんだね」

「あ、でも、私、自分なりの考え方を持つて人って好きだなあ」
そんな声が周りから聞こえる。

セシリアからしてみれば、予想外な展開であつた。

そもそも、彼女は「ISを操縦できる唯一の男性」がどのような人物であるか、それを確かめようと声をかけたに過ぎない。

自分の求めていた知性のかけらは見る事ができたとはいえ、周囲は自分と同じ考え方を持った人間ばかり。

自分の考えが間違っているのではない、という後押しを受けているが、逆に自分からは引き下がれない。彼女を襲っているのはそういう状況だった。

「まあ、自分の考えかたというより、かなりの男性の代弁でもあると思うけどね。そもそもこの意見は去年小論文コンクールに出したものだし、一応自信はあつたけど賞与はなかったから、やっぱり女性性は優遇されて然るべきっていうのが社会の考え方と見て間違いない、かな」

自分に味方はいないことを察したのだろう、一夏はすぐに引き下がった。

退くことができなかったセシリアにとって、相手の退陣は願ったり叶ったりだ。

だった、のだが。

「逃げるのですか？」

腑に落ちない様子で、セシリアは着席しようとする一夏に言葉を投げかけた。

ぴくりと一夏が反応したことを確認し、セシリアは更に続ける。

「まだ、わたくしは貴方の意見を聞き終わっていないのに」

一夏は、初めてむっとした表情になった。

「逃げるんじゃない——今から話すのは、時間が足りなさすぎる」

時間？ セシリアは時計を確認してみるが、まだ休憩時間は4分ほど残っている。

2人とも、既に次の授業の準備は終わらせてあるようだった。多少引き伸ばす時間ぐらいは、あるのではないか。

しかし一夏は、小さく首を横に振る。

「予め話す相手が誰だか分かってるなら、一番適切な言葉を吟味した上で話すこともできたんだろうけど。生憎俺は、言葉選びは苦手なんだよね、昔から。それに——こっちは、織斑先生が出席簿で止めてくれるだろうけど——昔から、俺は言い争いだと熱くなりすぎるんだ」

言うだけ言って、今度こそ一夏は着席した。

なにやら不完全燃焼な感情を残しながらも、少なくとも彼に対して失望するのはまだ早い、ということだけは理解できたため、仕方なく自分の席へと戻、

「言い忘れてた！」

ろうとした時、急に一夏が起立した。

「セシリアさん、お願いがあるんだけど！」

その、先程までとはあまりにも違うテンションに、思わずセシリアもたじろぐ。

「な、なんでしょう……？」

自然、狼狽した言い方で返事をするセシリア。

そして次の一夏が放った言葉はといえば、彼女を更に混乱させるには十分すぎるものだった。

「——ちよっと、付き合っただけなんだ」

1 - 2 信念通しは優柔不断

「いきなり何を言っているんだ、お前はあっ!？」

咄然とするセシリアを置いてきぼりにして、そう大声の反論をしたのは箒だ。

「へ？ 俺なんか、まずいこと言ったか？」

「まずい以前のっ！ 問題だろうがっ！ 何、白昼堂々告白してるんだ、お前は！」

「——告白？」

きよとん、と首を傾げる一夏。嘘偽りなく、真剣に何のことかわかり兼ねているらしい。

箒は怒鳴り声で続ける。

「さっきの発言のどこが告白じゃないと言っただ!？」

「……？」

あまりにも、一夏と箒の温度差は違った。

正確に言えば、一夏及びセシリアと、周囲の女子全ての温度差が違っ。

（一夏は箒の言っていることに、セシリアは突然の告白に、という違いこそあるけれども）状況が飲み込めない2人に対し、箒は怒鳴りそのほかの女子達はわいのわいのと盛り上がっている。

そして、このあまりの落差に裏があることに気付いたのは、今の所最も冷静な一夏だった。

箒からセシリアに向き直り、一夏は尋ねる。

「なあ、セシリアさん」

機械じみた動きでセシリアはどうにか動きだし、それから数秒時間置き、ようやく「なんですの？」と、出来るだけ平静を保った声で答えた。

「さっき俺が言ったこと、セシリアさんはどう受け取った？」

微弱な電気に打たれたように、セシリアの身体が跳ねた。

あまりにも直球過ぎる。いや確かに、自分の容姿に自信がないというわけではない。不健康そうであったり、見た目が醜かったりしては家の名が落ちると、ISに関しての実力のみでなく姿に関して努力はしてきたつもりだ。一応、ナンパだとかの類ではなく、正式にお付き合いをと告白されたことも何度かはある。それでも、ここまで単刀直入に言われたのは初めてではないか。このような内容を頭の中で5秒に10回ほどは反芻し、それで彼女はようやく、当たり障りのない答えへとたどり着いた。

「ええと、その、お気持ちは嬉しいのですが、ほら、あー、わたくしと貴方は、今日初めて出会ったわけですし、ですから——」

セシリアのその返事を聞いて、一夏はようやくと確信を持った。

「分かった。うん、ごめん、確かに付き合うつて言葉は、そのまま言えば告白の意味になったかもしれないや。謝る、決してそういう意味で付き合うつて言ったわけじゃない。ただ単純に、『本の知識程度でなら理解してるつもりだけど、機動に関しては素人だから、練習に付き合ってくれ』っていう意味で言っただけで——」

「だったら、省略せず最初からそう言わんかあ——っ！」

箒が、一夏に後ろから思いきり突っ込む。サンドバッグよろしく箒の攻撃を受け流すことなく喰らい、一夏は危うく意識を刈り取られかけた。

「いや待て箒！ 付き合うの意味といえば『行動を共にする』だろ！？ そもそも俺はさっきまでセシリアさんと何の関係もなかったんだぞ！ 人の内面も見ないで好きになってたまるか！」

「今度国語辞典を調べてみる！ 第一項目に『交際』と出てくるわ！ 確か小学校の時も主語を省くなど何度も言っただよな！？ 私は確かに言っただぞ！」

「いや、家にいる時千冬姉さん相手には大体通じたから、つい癖で———というか、意味が2つある単語でどちらか分からないなら聞けばいいだろ！」

「ならば試してみようではないか、ちょっと付き合え！」

「何に？ 買い物か？」

「このっ…… お前も聞いていないではないかっ！」

「ええ、だって箒が恋愛という意味で付き合ってくれなんてこんな場所でグハッ——！」

再び箒の一撃を喰らい、一夏はその場に崩れ落ちる。

周囲の生徒が「なーんだ、つまらないの」「あーあ、折角本のネタになると思ったのに」などと口々に言いながら退散して行く中、セシリアは理解した。

—— 織斑一夏は、あらゆる意味で今まで見てきた男性とは別人である、と——

「それではこの時間は——ん、織斑はどうした？」

千冬が初めて教鞭を振るうことになったその時間の、彼女の第一声はそれであった。

おずおずと箒が手を挙げる。

「篠ノ之か、あいつはどこにいる？」

「…… その床で、のびてます」

あまりにも予想外の返事が来て、思わず一瞬呆れ顔になる千冬。

ここで先程一夏から没収した眼鏡を掛けていれば更に貴重なシーンとなり得たが、どうやらその眼鏡は現在、真耶が所持しているようだった。

「誰がやったんだ？」

「…… 私が、さっきの休憩時間に。ちょっと、いざこざで……」

一夏の起こすいざこざとあって、千冬はある程度その内容は予測できた。

どうせ、言葉足らずと朴念仁が原因だろう。細かい内容まで言い当てることは不可能だったが、原因はぴたりの中だ。

千冬はセシリアの机と一夏の机の中間点辺りで寝そべっている一夏に近付き、そして彼を軽く持ち上げた。

そして、本人の席まで楽々と運び、すっと不着席させる。

「ん……あれ？ 織斑先生」

「相手の身体能力が高いとは言え、女子の急所狙いでもない攻撃で気絶してどうするんだ、お前は」

着席時の衝撃で、一夏は目を覚ました。

「そこは第の身体能力の高さを褒めるべきところであって、決して被害者を叱責する場面じゃないと俺は思っんですちよつと待ってください出席簿を振り上げてどうするつもりですか織斑先生！」

「それ以上屁理屈を言うようなら、これをこのまま振り下ろす」

自身の姉の攻撃力を知っているが故に、そして更に自身の防御力の低さも知っているがために、一夏は黙らざるをえなかった。

分かりやすい実力格差を振り撒きつつ、千冬は教卓へと戻る。

「さて、今度こそ授業を始めるが——その前に、ひとつ決めなければならぬことがある。織斑、何だその手は」

「俺以外、全員推薦します」

クラスのほとんどが、一夏の提案が何のことか理解しかねて首を傾げる。

「名前すら言えないのであれば却下だ。さて、決めなければならぬことだが、織斑、たとえ名前が言えたからといって、理由もなしの推薦は却下だ」

再び挙手した一夏を、千冬は呆れ顔で眺める。

一夏は急にきりつとした顔付きになると、同時に反論を開始した。

「理由ならあります」

「何？」

「俺が受けたくないからです先生すぐ肉体と会話しようとするのはやめるべきだと思っんですがっ!？」

今回は、一夏の制止も効かず、というか聞かずに千冬の出席簿は振り下ろされた。

角部分と頭が勢いよく激突する、痛烈な音がクラス内に響く。

「で、まともな理由で推薦できる人間はいるのか？」

「つつ……まあ、2人ぐらいは」

なら言ってみろ、と言いかけ、千冬は視界に慌てている真耶を捉えた。

どうやら姉弟で話しすぎていた、ということに気付き、弟の話の続きを無視して自身のすべき話を開始する。

「さて、それではだが。今から、クラス代表を決めてもらう」

一夏が手を挙げる。千冬は無視した。

「その名の通り、クラスの代表となり様々な行事で先頭に立つてもらうことになる。聞こえはいいが、総括して言えば雑用だな」

クラス女子達の間で、空気が冷え込んだ。一夏以外は全員女子なので、平たく言えばクラス全体の空気が冷え込んだ。

一夏の右手は天井と垂直になるまで綺麗に伸ばされたが、これも千冬は無視することにした。

「さて、それではこの時間の間に決定してもらうぞ。自薦他薦は問わない、意見がある奴は手を挙げる。織斑」

「はい、それじゃあ箒とセシリアさんを推薦で」

千冬があからさまに目を細めた。

「理由を言ってみろ」

「セシリアさんに関しては、言わずもがな代表候補生でリーダーシップを執るのに相応しいと思うためですね。箒に関しては、まあ武術のたしなみがあるので、雑用や威圧に向いているかと……」

今回は正当な理由がついているため、千冬には反論することができない。

さて、それではどうするか——彼女が考え始めようとした時、箒が思いきり立ち上がり反論した。

「ちよつと待て！ それは暗に私を体力馬鹿と言っているのではないか！？」

「馬鹿とは言っていない。ただ体力がほかに比べて特出していると

いうだけだぞ」

被害妄想とは悲しいね、と一夏が首を横に振る。

「それなら、織斑先生！ 私は、私は一夏を推薦します！ 広告塔としての役目は十分ですし、こいつはデスクワーク関係の雑用なら非常に優れています！」

箒に続け、周囲の女子も次々と「わたしも織斑君かな」「じゃあ、あたしも同じく」一夏を推薦してゆく。

しばらくして、2度ほど千冬が手を叩く。教室はそれで静かになった。

「さて、他はいないか？ いないのであれば織斑、篠ノ之、オルコットの3人で決めてもらうことになるが」

誰も声は出さなかった。

元より、クラスのほとんどの女子は一夏を他薦する方向で確定している。

一夏も、最初から自分が選ばれることは（クラスメイトの女子の嗜好きを見て）確信していたので、とりあえず他人を候補に挙げることでできて満足だった。この男は、適当な理由をつけて他の立候補に役目をなすりつけようという、実に極悪非道で後ろ向きな考えをしていた。

唯一最初から自薦する予定だったセシリアとしても、実力としては最も高いはずの自身がクラスメイトの大多数に選ばれなかったことに僅かばかりの不満は持っていたとはいえ、一夏について多少（少なくとも、頭の回転の早さ程度）は認めないわけにはいかなかった。とりあえず声を荒げて推薦の内容に反対はしていない。

唯一不満を持っているのは、多分捨て駒として扱われたということとを理解している、箒程度だった。その箒も、受理されてしまったからでは反論のしようもない。

「さて、ではこの3人の中から選ぶこととしよう。決定方法は——そうだな、多数決では結果が目に見えているので——IS学園らしく、模擬戦、という形を採るぞ」

模擬戦、という言葉聞き、一夏は内心思い切りにやけた。

この決定方法であれば、自分は問題なく「自然な辞退」をすることが可能である。

うまい具合に転がってくれたものだ——しかし、その一夏の考えは、千冬の次ぐ言葉であつさり打ち砕かれることとなる。

「ちなみに、当然のことだが、辞退したいがために手を抜くなよ。私を手加減していると判断した場合、クラス代表の数倍の仕事を与えてやるから、そう思え」

威勢よく返事をしたのはセシリアのみである。箒は諦めたような雰囲気を出し、一夏は冷蔵庫のプリンがなくなつたかのようなシヨツクの表情をあらわにしていた。

してやつたり。千冬的心情を表すと、おおよそそんな具合であつたろう。一夏の考えは見事に看破されていたのだ。

「織斑先生」

負けじと一夏が挙手する。

「何だ、織斑」

「他薦された人間より自薦する気概のある人間のほうが円滑にことが進むと思うのですが！」

「黙れ。そもそも全員他薦だ」

「いえ、ですけど！ セシリアさんは、最初から自薦する気はあつたかと思えます！」

「残念ながら、今からそれを確認する方法はないな」

一夏からさつと血の気が退いた。

墓穴を掘っていたのだ。セシリアを自分が推薦しなければ、少なくとももう少し食い下がることは可能だった、その結論に至つてしまったのである。

「では、試合は一週間後とする。各自準備を整えておくように。さて、授業を開始するぞ——」

IS武装の基本的な知識を話し始める千冬だったが、既に知っている内容の上に放心状態である今の一夏には、それを聞くだけの気

力は残っていなかった。

そして、時は昼食時間となる。

女子達のコミュニケーション能力は非常に高いもので、既にクラス内ではいくつかのグループが出来ていた。

片手で数えられるような回数の休憩時間の数、しかもそのうち1度は自分のところに来ていたはずなのに、どうしてももうグループが出来上がってるんだ？——そんなことを考えつつ、一夏は他のほとんどのグループの誘いを蹴り、学食でひとり食事をしていた。

最も、食堂であるために1組（一夏の在籍するクラスである）以外の生徒が大量に押しかけて来る、半パニック状態を気にしなければ、という前提の「ひとり」ではあるが。

このようなことがないように筈に同席を頼んだのだが、彼女にはにべもなく断られてしまったのだ。

初日から悪印象を持たれるわけにもいかず、ある程度話を聞き取りながら、一夏は口の中が空になったときに質問のいくつかに回答する。「ながら食い」という言葉があるが、この場合答えながら食い、である。

最も、おおまかな質問の傾向は大体一致していたので、一夏としては特別心労の溜まるものではなかったのだが——ちょうど味噌汁の半分を啜り終わったところで、空気が変わった。

「同席してもよろしくて？」

聞き覚えのある声がした方向を、一夏の視線が捉える。そこには、お盆を持ったセシリアがいた。視線の高さの関係で、料理が何かまではわからない。

「ん、別に大丈夫。特にセシリアさんには相談したいこともあるし、反対側の席へと座るよう促すと、他の女子を掻き分けるようにセシリアは机に近づき、着席した。

自然、それまで同席を断られていた他の生徒たちは面白くなさそうな顔になるが、一夏はとりあえず「知り合いなので、すいません」

という理由で突き通すことにした。

そして、一夏の視線が真剣見を帯びたものに変わりながらセシリアの方向を向いたので、ようやく女子達も各々散らばって行った。

周囲の女子がいなくなったと同時に、一夏が軽く吹き出す。

「？　どうなさったのですか？」

「いや、ぞつとしないなあつて。噂好きな女子のことだから、どうせオルコットさんと俺が今日初めて知り合っただってことも知ってるんだろうな、と思ってたからさ。この後どういう言葉で追い払おうって考えてたら、予想外に皆あっさり引いちゃっただろ？」

「……まさか、わたくしをダシにした、ということでは」「バレた？」

間髪入れずに返されて、セシリアは多少へそを曲げた。体よく利用されたというのは、あまり気分のいいものではない。

見れば一夏の真剣見を帯びていたように見えた視線、そして雰囲気は、既に跡形もなく消え去っていた。

切り替えが早いのか、単純に悪戯が好きただけか。悩んでいると一夏が問い掛けてくる。

「それで、用事って何だ？　日替わりパスタのタリアテッレなんて持ってるんだから、昼食を相談したいわけじゃないだろ？」

小さくひとつ咳ばらいをして、セシリアは無駄な思考を省いた。

「ええっと、2つの用事がありますが、時間がないのでとりあえず片方だけでよろしいでしょうか？」

「うん——女尊男卑の話題を聞かせる、かな？　それとも、付き合う話への正式なお断り？」

「……断ると、もう分かっていたのですね」

珍しく、セシリアが申し訳なさそうに縮こまった。

「そりゃあ、仕方ないでしょ。まさか俺も、一週間後にいきなり、教えを乞うた相手と対戦することになるとは思ってなかったよ。セシリアとしてもここで代表候補生としてアピールしておかなきゃいけないわけだから、結論は『無理』になるよな」

既に全てが見透かされていたことに、セシリアは啞然とする。初めて会話をした時に要領のいい人間だとは理解したが、まさかここまでとは考えていなかったらしい。

「それじゃあ——模擬戦が終わった後で、もう一回お願いしてもいいかな」

「ええ、それであれば多分！」

その答えで納得したらしく、一夏は一度頷いた。

「それじゃあ、とりあえず1人でどこまでできるか試してみるよ」

それで話はついた、と一夏は判断し席を立ったが、しかしセシリアは1つ納得がいけないことがあり、一夏を呼び止めた。

「何？」

「いえ、確かクラス代表になることには乗り気ではなかったのに、やけに張り切っているように見えたので……」

一夏は振り返る。そして、当然のようにこう言った。

「セシリアさんが自分の実力にあぐらをかいているようであれば、手抜きでもいいかなとは思ったけどね——本気の相手に本気で答えがないなんて、恥ずかしいだろ？」

今度こそ、一夏は去ってゆく。

その後ろ姿に見とれていたことをセシリアが認識したのは、一夏の姿が完全に見えなくなってからだった。

「……不思議な、方ですわね」

悪い意味だけでなく、良い意味でも。

セシリアが一夏の評価を書き換えていた頃。

篠ノ之箒は、クラスで頭を抱えていた。

（せっかく一夏が昼食に誘ってくれたのに、なぜ蹴った!? またとない機会であったというのに!）

抱えた頭の中で彼女が考えていたことといえば、このようなこと

の際限ないループである。

広げてある弁当には一切口が付けられておらず、ともすれば何か病に罹っているのではないか、と周囲が心配してしまうほどであった。

ある意味、箸の意思と反した行動というのは、長年治らない病のひとつと言えなくもない。

「どうしたんだ、箸？ 弁当があまりにまずかったとかか？」

ふと声がした方向を見ると、そこには一夏がいた。時計を見れば、既に休憩時間に入ってから20分以上は経過している。とつくのとうに、昼食は食べ終わっているのだろう。

「ちよつと失礼——ん、別にまずくないじゃないか」

そのぐらいいは、箸も分かっていた。味見ぐらいしたのだ、まずいわけがない。一夏が食べようと味覚が変でなければ——あれ？

彼女は、気付いた。

「一夏」

「ん、何だ？」

「その……私の弁当、食べたのか？」

「ああ、ちよつとその肉団子を。肉団子って言っても、半分ぐらいが野菜で作られてんのかな、これ？ 結構美味いぞ？」

先ほどまで落ち込みの台詞がループしていた頭に、今度は「美味しい」という台詞がループする。

「本当か？」

「嘘なら、今頃歪んだ顔してるよ」

箸が顔をあげる。

一夏は苦々しい顔をしていた。

「まずいのではないか！」

「いや、冗談冗談」

顔を戻して、それからからからと、愉快そうに一夏は笑った。

「そうそう、用事があるんだった。なんか、放課後に俺が眼鏡返してもらった時、箸も一緒に来いだってさ」

「眼鏡を返してもらった時に？　なぜ私が呼び出されるんだ」
「さあ、知らない。うちの姉上様々は、お人遣いが荒いからな」

1 - 3 あの方は幼馴染の位置

そして、数時間後。

箒は、立ち尽くしていた。

場所は教室ではなく、職員室の前。不審に感じた数名の教師が話しかけるも一切反応を見せず、既に匙を投げられた状態である。

発端は、数十分前に遡る。

入学初日の授業——IS学園は国立高校、そのうえ講義内容も非常に濃密であり、時間が惜しいと初日から授業が詰め込まれている——がすべて終了し、一夏は自身の眼鏡を返してもらったために、箒はなぜだか一緒に呼ばれたために、2人は職員室へと来ていた。

「失礼しまーす、1年1組の織斑一夏ですが、織斑先生はいますかー？」

コン、コン、コン、コン、と、4回ノックをしながら、一夏は目的の人物を呼び出す。

10秒ほどで、千冬は現れた。

「来たな。篠ノ之も——よし、ちゃんというな」

「織斑先生、俺は分かりますが、なんで箒も一緒なんですか？」

「いや、2人ともに、ついでの用事があるからな。……おっと、その前に眼鏡を返しておくか」

千冬のスーツの胸ポケットから、一夏が数時間前まで掛けていた眼鏡が取り出される。

一夏はそれを受け取ると、レンズに傷がいていないかを細かく確認し、自身の眼鏡ケースに入れた。

「掛けなくていいのか？」

箒が尋ねると、一夏は「ああ、箒は知らないんだっけ」と返し、それから眼鏡を再び取り出して、レンズの内側を箒に見せた。

「……む？ 何だ、これは……？」

レンズの裏側には、大量の数字とアルファベットが映っている。
アルファベットは、AからFまで。

「見ての通り、これは小型のディスプレイ。ほら、目を近づけると
もう少し沢山字が見えてくると思うぜ」

一夏に促され、箒はレンズギリギリまで目を近づける。

すると、レンズは瞳に、膨大な量の文字列を焼き付けてきた。あ
まりの情報量に、思わずよろけそうになる箒を、一夏が支える。

「ごめん、慣れてないとそうなるよな。ともかく——こいつは一種
の演算補助装置みたいなもんなんだよ。ちなみにくれた人は、まあ、
箒の好いてない相手だけど……」

語尾が尻すぼみになる一夏の言葉で、箒は、この眼鏡を一夏にプ
レゼントした人物が誰であるかを理解した。

しかし、箒がその人物との回想に入る前に、千冬が声を挟む。

「ともかく、授業で私が一夏からこれを取り上げた理由も、とどの
つまり一夏が完璧に授業を無視するポーズを取っていたため、とい
うわけだ。さて、では織斑、篠ノ之。今から呼んだ理由を説明する
ぞ」

千冬が、今度はシャツのポケットから何かを2つ取り出し、一夏
と箒の両方に渡す。

2人とも受け取ってそれが何であるかを確認すると、どうやら鍵
のようだった。

「ああ、そういうえば、私は寮の鍵を貰っていませんでしたね。だか
ら呼ばれた、と」

自分が呼ばれた理由を箒はやつと理解するが、織斑の名字を持つ
2人は何やら渋い顔をしていた。

「それだけではないのだが……まあ、いいだろう。織斑、何か不都
合でも？」

「織斑先生。俺は寮に入るのは一週間後と聞いていたので、貴重品
の準備が一切できていません」

「生活必需品の類であれば、私が適当に漁って持ってきてある。着

替えと携帯の充電器ぐらいだが」

千冬が言い終わると、間髪入れずに一夏が「足りません」と言い返す。

「部屋のPCはまた今度の大型連休にでも持ってくるとして、少なくともノートPCがないと。ちよつと、今から取りに行つていいですか？」

「駄目だ」溜息をついて、首を横に振る千冬。横の箒を差し置いて、一夏は更に言い返す。

「駄目なら、入れてある棚の鍵を渡すんで、織斑先生が取りに行つて下さい。人に渡さなきゃいけないデータが多少入ってるんです」

そして、ズボンのポケットに入れてあつた小さな鍵を、千冬に差し出す。

「急ぎ……ということとは、あいつ関係か」

「そうです。多分専用機が届くまで自衛手段がないからこそ、計画の前倒しですよ？ 本当なら、このぐらい予想して自分で持ってくるべきでした、ごめんなさい」

小さく、千冬が溜息を吐いた。これで2度目である。

「仕方がない、元はと言えば大人の事情に無理矢理付き合わせた結果だ。全く、この年になって高校生の使いっ走りになれるとは、な」再び一夏が頭を下げ「ごめんなさい、よろしくお願いします」と言う。

差し出された鍵を先ほどまで寮の鍵が入っていた方のポケットに入れつつ、「さて、ではもう一つだな」と千冬は続ける。

ようやく自分の介入できた話になったと感づき、一夏ではなく箒がそれに返事をした。

「部屋の番号——ですよ？」

「その通りだ。防犯の目的上、鍵番号は鍵と一緒に付けないことになつているからな」

言いながら、最初から左てのひらに握っていたのであろう小さな紙を、一夏と箒のそれぞれに渡す。

箒、一夏の順番で紙は受け渡された。広げた箒が、一夏に「お前は何号室だ？」と尋ねる。

「ええと、5201号室かな？」

箒が一夏の手元を覗き込むと、確かにその紙にはデジタル数字で「5201」と書かれていた。

しかし、千冬が指摘する。

「逆さ向きだ。第一5201号室なぞうちの寮にはない」

「あ、そうなのか。よっと」

くるり、と180度、一夏は紙を回転させる。

「ふむ——1025号室、だつてさ。ちなみに、箒は何号室だ？」

今度は一夏が箒に尋ねる。しかし、箒はなぜか硬直して動かない。

「ん？ どうしたんだよ、箒？」

箒の手元で広げられた番号の書かれている紙を見ようと、一夏は箒の肩に手を掛け覗き込む。

「ひゃ、ひゃわあっ!？」

「おい、箒!？ あぶ、うわ、どうした!」

一夏が覗き込んだその瞬間、箒は過剰反応したかと思うと、思い切り一夏を吹き飛ばした。

どうにか転ばないようにバランスを取った一夏が再び箒を見ると、彼女は紙を今一度広げ、また完全に動きを止めていた。停めていた。

「……うーん、なあ千冬姉さん、箒、これどうなってんだ？」

「それは——後で、分かるだろう。それより、私はもうノートPCを取りに行くぞ。棚は上から2段目だな？」

「ああ。一応1段目3段目もその鍵で開くけど。開けてもいいけど、中の紙を汚したりしないでね」

「分かっている」

最後に箒に何やら耳打ちすると——悪戯っぽい笑みを、微かに浮かべていた——、再び千冬は職員室へと入っていった。

「箒？ 箒ちゃん、箒さん、篠ノ之さーん! ……駄目だな、反応しない」

言葉には反応しなくせ、紙を見ようとしたら握り潰される。どうしたもののか……。千冬がいなくなった後も一夏は悩んでいたが、数分経つと諦めたようで、どうせ後少しすれば復活するだろう、という不確定な考えと共にその場を去った。

それから、数十分。箒が微動だにしなかったというのは、既に何人も教師が知る事実である。

箒が千冬に耳打ちされた言葉は「遅くても夏休み前には変わる、精々楽しむことだ」であり、箒の手元の紙に書かれた番号は『1025』——即ち一夏と同室であったが、その事実を現時点で知っている生徒は、もちろん箒のみであった。

さて、箒を置き去りにした一夏であるが、彼は今現在、指定された寮の自室にはいない。それどころか、1年生の教室に来ていた。

但し、1年生の教室と言っても、自身が籍を置いている1組ではない。彼が今来ているのは、1年4組であった。

当然、何の用もなしにこの教室に来たのではなく……目的を果たすため、一夏は現在、4組生徒のうち1人と会話していた。

「……本当に、この番号で間違いはない？」

「うん！ それにしても、どうしてあの人の部屋番号なんて？」

「知り合いなんだよ、確か初めて会ったのは6年前……だったかな？ とにかく、結構前ってことは確かだ。それじゃ、ありがとな！」

一夏の目的は、人捜しであった。

昔から様々な論文講演会やコンクールに参加している一夏は、その分交遊関係が広い。捜しているのは、その関係で知り合った人物である。

教室にまだ残っているのであれば好都合だったが、その相手は既に教室を後にしていた。故に、クラスに残っていた他の生徒を捕まえ、情報を聞き出していたわけである。

生憎、最初に捕まえた生徒は自身の番号しか覚えていなかったが、一夏とのコネを持ちたい（と言うより、単純に男子生徒に興味があ

る）その生徒は本日知り合った他の女子に又聞きで質問。何人かそれを繰り返して、結果として一夏が捜していた人物の部屋番号の特定に、いまさつき至ったのだ。

部屋番号を特定できた一夏は、その数分後には寮の、教えられた部屋の前まで来ていた。

最初にノックをするが、部屋の中から反応はない。

もう一度、今度は「おい」と呼び掛けながらノックする。やはり、反応はない。

もしかして、今は食堂にいるのか？ そんなことを考えつつ、一夏は部屋を離れようとする。

しかし、部屋の扉が開いたのは、一夏が食堂にむけて歩きだしたちょうどその瞬間だった。

「誰……？」

声が聞こえて、一夏はすぐに振り返る。

今聞こえたのは、そっくりさんじゃなければ、確かに自分のよく知る人物なはず——果たして、扉のノブを握っていたのは、一夏の捜していた相手そのものだった。

髪は水色で内向き、そこまで長くない。一夏と似たような眼鏡を掛けており、瞳はどちらかと言えば垂れ目の部類に入るだろう。

「や。簪さん、久しぶり！」

「え……織斑くん？ あ、そっか……入学したんだから、そりゃあ、いるよね……」

名を、更識簪なりしきかんざし。小学校の頃には作文コンクールで、中学の時点では各地の大学の研究会や論文発表会で一夏と何度も顔を合わせている、彼の昔馴染みである。

「いることは知ってたから、初日のうちに挨拶しておきたくてさ」

「織斑くん……そういう所、本当にマメだね……」

「後になって忘れるよりはいいだろ？ 日本のことわざでも、善は急げって言うじゃないか」

同じ学園にいる以上、会うことはいつでも出来るのだから、それ

ほど善というわけでもないのではないだろうか……？ 多少無理があるように思える一夏の考え方に、簪は少し微笑む。

「つつても、本当に挨拶だけなんだけどな。後2日入学式が遅ければ、香川にでも行っただけだ」

「別に私、うどんしか食べないわけじゃないよ……？」

「じゃあ、秋葉原にでも行けたんだけど——」

「それは、土産物として、どうなのかな……？」

むむむ……と唸る一夏。最初は冗談を言うだけの予定であったのが、いつの間にやら真剣なおみやげ議論に変化していた。

「あれ……そういえば織斑くん、今日は眼鏡掛けてないんだね」

「ん？ あ、ああ。授業中には掛けてただけだけど、千冬姉さんに取りあげ喰らって、さっき返してもらったばっかなんだ。それから簪さんのこと捜してて、掛けるの忘れてた」

簪からの質問に返答しながら、一夏は眼鏡を掛けなおす。掛け終われば、そこにいたのは簪のよく知る風貌の一夏だった。

「うん……やっぱり、それ、掛けてないと不自然……」

「そうかな？ 用事がない限り、基本は外してるんだが……」IS関係の研究会で会うことが多いから、そういう印象が強いのかな。むしろ、プライベートなのに簪さんが眼鏡を掛けてるってことの方が、俺としては驚きかな」

何気ない一夏の言葉だったが、急激に簪の顔が暗くなる。何か、地雷を踏んで閉まったのだろうか、一夏は大いに焦った。

「ごめん！ 触れちゃいけない所とか、だったか！？」

「違う……」首を振り、簪は即座に否定する。しかし、何やら事情があることは、例え他人の恋愛感情に疎い一夏だったとしてもすぐに察することが可能だった。いやむしろ、一夏は恋慕の感情にこそ疎いが、それ以外の心の機微には聡い。

「じゃあどうしたんだよ？」

「それが、実はね……これ、見てくれる？」

ノートPCの画面を向けられ、内容を一夏が確認する。一通のメ

ールだった。

「倉持技研……？」

その名前は、一夏もよく知っている。

一夏——正確には、千冬も含めてだが——には、両親がいない。この歳まで一夏を育てたのは、紛れもなく千冬ただ一人の手によって、である。

その姉に負担を掛けるまいと、IS学園に入ることが確定するまでの一夏は、就職をする予定だった。その就職先こそ、今このメールアドレス欄に書かれている技術研究所、『倉持技研』なのだ。

最も、数年前から才能の片鱗を見せていた一夏は、就職する前から仕事の手伝いやバイト紛いのことをしており、一夏が初めてISを起動させたのも仕事の一環（受験に使われるISの整備中）で起きたことなのだが——とにかく、一夏にとって倉持技研とは、それほど馴染みの深い所であった。

メール内容は長文でこそあるが、その内容は簡潔に1行で表すことができる。

即ち、

「『ちよつと急な事情が生まれたから、君の専用機ほっぽり出すことになっちゃった』……って、言われたってことか」

「うん……」

ようやく、一夏にも簪が眼鏡を掛けている理由が分かった。

簪は——本来、そんなことをする必要がないはずの彼女は、自分の手で未完成のISを作り上げるつもりなのだ。

しかし、次に一夏には、別の疑問が湧いた。

「事情つてのは何なんだ？」

「詳しいことは、まだ教えて貰ってない……」

おかしい話である。

まだ終わりにきっていないバイトの関係で、一夏と倉持技研は未だメールのやり取りを繰り返している。

しかも、一夏が受け持つことが多いのは、ほとんどIS関係の仕事

事。それだというのに、一夏の元にIS絡みの新たな話は一切聞か
えてきていない。

「分かった、とりあえず、俺の方からも聞いてみる。何か、俺に手
伝えることがあったら、何でも言ってくれよ」

「うん……ありがとう、ね」

1 - 4 言葉選びはすれ違いレベル

簷に自身が宛がわれた部屋の番号を伝えた一夏は、一応、初日のうちに済ませておきたかったことを全て終わらせたため、まだ見ぬ自室でゆっくり羽を伸ばすことにした。

本当であれば、今頃は帰路に就いていた……を通り越して、既に自宅に到着していたはずなのだ。自身のノートPCが使えないのは多少予定外でこそあるが、それ以外で時間配分が間違っているということもない。本来ゆっくり時間を取って行っていたはずの仕事を、多少急ピッチで進める。ただ、そのみである。

自室、1025号室は、いくらクラスが違うといえど同じ一年生の簷の部屋と、そこまでは離れていなかった。

とりあえず、相部屋である可能性を確認——常識を考えれば男子は一人部屋が妥当なのだが、自分の入学経緯は複雑であるので、一夏は安心していなかった——するため、中に誰か人がいれば聞こえるであろうボリウムの声で呼びかけつつドアをノックした。

それから20秒ほど待ってみるも、室内からの返事はない。どうやら、男である自分に振り分けられたのはちゃんと一人部屋だったらしい、と判断し、一夏は鍵穴に鍵を差し込み、入室した。

「へえ……流石は国立」

思わず口笛を吹いてしまうほど、内装は素晴らしいものだった。多分弾力性に富んでいるであろう、2つの羽毛ベッド。カーテンにはシミのひとつもなく、多分宿題をするために備え付けられているのである。机はかなり横幅が広い。しかも、天然木材であるようだ。

移動してクローゼットを開けてみると、『流石は女子校の設備』と言わんばかりの収納量を誇っている。一般男性であれば、3人ぐ

らいが共用で使用しても問題なさそうである。

PCも備え付けてあり、学園側に監視されている可能性が非常に高いため仕事には使えないだろうが、それなりのスペックを誇る機種であることは間違いない。

シャワーが備え付けてあるのはもちろんのこと（浴槽が備え付けられていないことに、彼は多少がっかりはした。一夏は、かなりの風呂好きである）、洗面所のほうもしっかり水と湯を使い分けることができる。どのぐらいの時間で温度が変化するのか調べてみると15秒程度で水は湯に変化するらしい。

総じて、家賃の安いアパートメントの一室ぐらいは簡単に越す程度の質はあるだろう。と、ここまでが一夏の大体の判断である。

他にもポットで湯を沸かしたり、それで出来た緑茶を飲んだり、早速PCをつけたり、とにかく室内で様々なことを試していると――コンコンと、2度、部屋の扉が叩かれた。

「はい、どなたさまー？」

さくつとPCの電源を落とし――現時点、このPCは遊びで使っているだけで電源を落とす必要は一切ないのだが、平時においては機密情報を扱っている一夏の癖である――、一夏は部屋のドアを開く。

ドアのむこうに立っていたのは、箒だった。

「箒、ドアの2回ノックはトイレに入る時の……んーと、その顔は、冗談は後にしろ、っていうことか？」

箒の2度ノックに補足して更に2度ノックを繰り返す動作をした一夏だが、箒がじろりと睨んできたために、追加ノックは1回で終わった。

道を開けて、中に箒を招く。

「そんで、さつきはどうして急に固まったんだよ？　っと、それより、箒の部屋番号を聞いとくか」

一夏が話しかけるも、箒は返答をしない。あれだけやかましい自分の幼馴染はまさか、頭でも打ったのか？　失礼極まりないことを

一夏が考えていると、箒が窓側のベッドに腰掛けた。

「……。……ここ」

やっとこさ箒が声を出したため、とりあえず一夏は、彼女が頭を打っていないことを確認した。やはり失礼極まりない。

「ここ？ ああ、うん、ここのベッドの寝心地は良さそうだな」

「そういうことじゃ、ない」

ん？ と、一夏が首を傾げる。箒の言わんとしていることが一体全体何なのか、どうやら分かりかねているらしい。

「ここ、なんだ」

「いや、ここなんでも何も、箒にはさつき部屋番号を伝えて——」
ぶんぶんと、ポニーテールを大仰に揺らしながら箒は首を振る。

「じゃあ、何なんだよ？ 口を閉ざしたまんまなんて、箒らしくないぞ」

なおもしつこく尋ねる一夏を相手に、ようやく箒も決心がついたらしい。

小さな深呼吸をして、やっと言いたかった言葉を口に出した。

「私の部屋も、ここだ」

ほんの一瞬だけ、一夏は固まった。それから、「はあああああっ！？」マジかよ！」と、本日一番の大声を出して驚いた。

「ちよっと、その紙見せてみ！ もしかしたら逆さ読みしてるだけで、実際のところは5201号室かもしれないから！」

「そんな号室ないと、千冬さんがさつき言っていただろうが！ 紛れもなく1025号室なんだ！」

「けど、俺と違って女子は、既に荷物が各自の部屋に届いてるはずなんだよな！？ 箒の荷物なんて、どこにも見当たらないぞ！？」

「——少し手違いがあったらしく、宅配が遅れたそうだ。あと数分ほどで届くと、さつき聞いた」

こういう時に限ってタイミングは非常にいいもので、部屋のドア

が再びノックされる。

箒の話を一旦止めて一夏が扉を開くと、そこに立っていたのはクラス副担任の山田真耶だった。

「あ、織斑君ですか。篠ノ之さんはいますか？　いないのでしたら、荷物が届いたらしいので、事務のほうに取りに来てくれとのことだと伝えておいて下さい」

真耶は、『たとえ今いなかったとしても、後では必ず箒がこの部屋に来ること』を前提で話している。これはもう、一夏としては、確定宣告に近いものだ。

もちろん、ただ『知り合いらしい自分に言っておけば伝わるだろう』という算段で真耶が来た可能性も多少はあるが、そんな現実逃避がうまく行くとはい、流石の一夏も考えてはいなかった。

「話はそれだけです。それでは、失礼しますね」

結果、箒が嘘を吐いていないということが、大体証明されてしまったわけである。

箒の目の前まで戻って来ると一夏は出口側のベッドにぼふりと音を立てて座り込む。

「箒、荷物が事務所に——」

「そのぐらい、聞こえている！」

「あー、うん。そうだよな……本当に、箒はこの部屋だったのか」

「だから、さっきそう言っただろう！」

「いや、だってさ！　恥ずかしいだろ！　ついさっきまで俺『こんな高級な部屋が1人で使えるのかこりやすげえやヒヤッフー』みたいなこと言ってたんだぜ！　恥ずかしいだろ！　恥ずかしいだろ！」

第一感想で「やっぱり、男なんだから1人部屋だよな」という勘違いから入り、そして「一人ヒヤッフー」である。現在の一夏は、顔にヤカンを乗せれば湯を沸かせるほどに赤面していた。

しかし、やはり言葉足らずの烙印を大勢の人間に——少なくとも、今日だけでクラスメイトの全員に——押される一夏。

箒は、一夏の言葉を勘違いして受け取ったらしい。

「……そうか。……そんなに、私と同室が嫌か」

「嫌っていうよりさ、予想外だろ、どう考えても。箒だつ、てまさか俺と同室とは、今日になるまで考えてはいなかっただろ？」

「……そういう建前は聞いていない。本音を言うのなら、1人と、私と同室、どっちの方がよかったんだと聞いている」

「そりゃまあ、やっぱり1人の方が楽か——」

急な殺気に気付き、一夏は身構える。そして、非常に後悔した。

嘘でも、同室のほう嬉しいと言っておけばよかったかもしれない。今更ながら、一夏はそう考えたのだ。しかし、言ってしまったからには、もちろんもう遅い。

目の前の少女が憤慨していることを、一夏は察知した。

「そうか……せっかく、私は決心して来た、というのに……一夏は、私と同室は嫌だ、と」

「あ、あのですね、箒さん？ 別に、嫌とはまだ……」

「折角、髪も分かりやすいようにしたし、……千冬さん、だって、ああ言ってくれた、のに……」

「もしもし、箒——」

瞬間。

一夏の額に、思い切り掌底が叩き込まれた。

護身術の一環で箒が覚えたそれは、しかし剣道の全国大会優勝という実力を持つ彼女の身体能力の高さが原因で、一瞬にして一夏の意識を刈り取ることとなる。

ベッドに仰向けになって倒れ込む一夏、しかし、箒は彼に目もくれずに部屋を飛び出した。

彼女の瞳に溢れんばかりの涙が溜まっていたことを、一夏は見落としていた。

「……というわけで、幼馴染は俺を気絶させた上で、部屋を飛び出してしまったわけですよ」

「……………」

簾の攻撃から3分ほどして起き上がった一夏は、女子のことは女子に聞くべきであろうと考え、助けを乞うため簾の部屋へ来訪していた。

自分はどのあたりでミスをして簾を怒らせたか、解決するにはどうすればいいか。簾は多少融通の効かない性格だとはいえ、一夏としてはこの学園で千冬に次いで付き合いの長い親友である。

多分、最も客観的に、そして的確に自分の欠点を見抜いてくれるだろう、と一夏は考え、彼女の部屋に来たわけだ。

一夏から聞いた話を頭の中で纏めあげて、簾は一夏に説教を開始した。

「そりゃあ……織斑くんの言葉選びが悪いと、思うな」

「うっ」

「私だって、友人からいらなんて言われたら、怒るよ」

「ぐっ」

「前からそうだけど……織斑くん、相手を勘違いさせる言葉遣い、多すぎだよ……？」

「むう……返す言葉もありません……」

にべもない。そして容赦もない。簾の放つ一言一言が、全で一夏の身に染みた。

「というわけで、早くその……簾さん、だったっけ？ に、謝りに行きましょう」

「はい……ん？」

一夏が立ち上がった所で、その携帯に着信が入る。

簾に軽く会釈し、一夏は着信ボタンを押した。

「えーっと、もしもし？」

『私だ』

声の主は、この学園で一夏と付き合いの長い人物、第一位であっ

た。

「あ、千冬姉さんか。ノートPCは見つかった？」

『とつくの昔にな。それでお前、今どこにいるんだ？ 部屋にないらしいが……』

「ああ、知り合いの——簪さんの部屋。分かる？」

『ああ、私は寮長だからな。分かった、今からそちらへ行く。その部屋から動くなよ』

これから簪を探しに行こうとした所で、なんとタイミングの悪いものである。しかし、一方的とはいえ、切られてしまったものは仕方がない。

簪に事情を説明すると、それから10秒も経たず、ドアが開いた。
「千冬姉さん、ソックぐらいした方がいいんじゃない？」

「お前が、ノートPCを待つなら他になにもしないことぐらい、私は理解している」

「……さようで。ありがとうございます」

千冬からPCを受け取ると、早速一夏は電源を付ける。

「では、私はもう行くぞ。この後も仕事が溜まっているんだ」

「うん、本当にありがとう」

千冬がいなくなると、早速簪が一夏を叱咤した。

「織斑くん、早く簪さんを探しに行かないと……」

「分かっている。けど、本当なら1時間前には始めなきゃいけなかった予定が1つあるんだ。簪は俺が嫌われるだけだが、こっちは俺以外にまで迷惑がかかる」

簪は、それでも一夏の仕事を止めようとする。一夏が勘違いしていることを、簪自身が傷付く可能性を一夏が考慮できていないということを、伝えようと考えたのだ。

しかし、圧倒的な集中力を発揮している今の一夏に、簪の制止の声は届かなかった。額に脂汗を浮かべてタイピングを続ける一夏を見て、簪も止めることをやめた。

「……ああ、馬鹿。ここをそんなに密接させたら動きが鈍るだろ！

ええつと、どこが不要なんだ？ あれ、ここのパーツは絶縁体にしないと漏れるって、こないだ書いたはずなんだが……だあ、くそ！ 本当は1時間使つてのんびり仕上げる予定だったのに！」

文句を垂れながらも、一夏の作業は非常に精密だった。

しかも、企業秘密を無意識に守っているのか、独り言からでは画面のむこうで何が起きているかも分からない。

15分ほどで、一夏の動きは緩やかなものとなった。

「……後は、これを添付して、と。ふうー」

たったの15分で、一体何を作ったのだろうか？ 気になってしまった簪は、やはり筭のことを忘れて一夏に聞く。

「んーつと、とある武装の改良案——と、詳細は伏せなきゃダメだから、言えないかな。……ん？ 倉持技研からメール来てるじゃん」
今度は、簪は、『倉持技研』の単語に反応した。

つい先ほど、2人の間で話題にしたばかりの話である。

「何が……書いてある？」

「ちよつと待ってくれよ、極秘とかは教えられないから——えーつと、何々……」

一夏がメール内容を確認し、そして、
絶句した。

「織斑……くん？」

簪が声を掛けると、ぎこちない動きで一夏は、顔を画面から簪へとシフトさせる。

「簪さん、……ゴメン」

「いきなり、どうしたの？」

「簪さんの専用機の開発が止まった理由……俺かも、しれない」

2 - 1 馬の尻尾は臨戦体制

入学してから、2日目の朝。一夏は、日課通りの7時半ほどに、寮の自室、廊下側のベッドで起床した。

昨日までと環境が全く違うというのに問題なく起床できるというのは、日頃から体調管理を怠らない一夏であるがゆえ、だろう。

だがしかし、自分が夢を見ていたのでなければ、昨日1日だけでも厄介ごとがいくつも起きてしまった、と彼はげんがりしていた。

まずは、一夏自身と簪の専用機についてである。

「織斑くんが原因で、私の専用機が、作られない？ …… それって、どういう、こと？」

一夏の言わんとしていることを理解しかねて、簪は尋ねた。

「……これ、見てくれ」

持っていたノートPCの画面を、ちょうど数十分前に簪が一夏に見せたときと同じように、一夏が簪に向ける。

簪の目に最初に飛び込んできたのは、『機密』の2文字だった。

「……いいの？」と簪は、思わずそう尋ねそうになった。が、情報を扱う上での分別ぐらい一夏は弁えている、と知っていたため、その質問をやめて続きの文字を読むことにした。

「ええつと……織斑くんの、専用機を……倉持技研が担当して作ること？」

「おおざっぱに説明すると、どうやらそういうことみたいだ。送信日時が今日の昼過ぎだったことから考えるに、多分、IS学園に入学したときのサプライズ・入学祝い！ ……みたいな感じで送ってきたんだろうな」

それで、一夏の専用機が倉持技研によって作成されるという、こ

のメールが一体どうしたのか……情報の取り扱いは簪も同じく慣れていたため、その質問を口にする前に、一夏が何を考えているのか彼女も理解した。

「ってことは、もしかして……」

「いや、もしかしなくても、だな。俺へ提供するためのISを急ピツチで作成せんとするがために、簪さんのISを作るのがすつぽかされてるんじゃないか？ って俺は思う。时期的にも、俺がISを動かせることが判明した後に国家間でゴタゴタが発生して、それから自衛のために専用機を持たせると決まって、更にどこの企業が専用機を作るかで再度ゴタゴタが発生した、と考えれば、おおよそピツタリだ」

『ゴタゴタ』のだいたいの期間を想定しながら、一夏の話をつまえて簪も頭の中で勘定を合わせる。その結果、彼女の頭も、『ゴタゴタの終着に誤差が前後一週間ほどあれど、確かに一夏の計算はあながち間違っていないであろう』と弾き出した。

簪が頭の中で計算している間に、一夏は倉持技研にメールを打ち返していた。そのメールの主立った内容は、「自分のISを最優先で行うがために、他に遅れる可能性がある仕事、および既に先送りしている仕事」の確認である。

一夏がメールを送信して、倉持技研から返信が来るまで、5分かからなかった。

おおかた、その内容判断することで自身が受けられる仕事を確認しようとした、とも思われたのだろう。公開して問題のなさそうな情報は、ほとんどそのメールに書かれていた。

その文章量の多さに「全く、こんなにあんのかよ」と声に出して愚痴りながら、一夏は画面をスクロールしていく。

あった。

『代表候補生1人のIS作成が、しばらく延期』の表示。これに記載されている『代表候補生』が簪であるという可能性は100パーセントでこそないだろうが、現に今簪のIS作成が延期となってい

る事実をふまえれば、その確率は限りなく100パーセントに近づく。

「俺がいきなりこの学園に入ることになったもんだから……本当に、ごめん！」

思い切り頭を下げる一夏。しかし、彼のIS作成はその彼自身があずかり知らぬ所で決められたことであるとは簪も判断できているため、むしろ慌てたのは彼女の方だった。

「そんな……顔、上げて。織斑くんが悪いんじゃないでしょ……？」

「それでもだ。俺が原因で簪さんが迷惑を被っているってことに、なんら変わりはない。俺に手伝えることがあれば言ってくれ、なんて言っておいて——」

自虐を続けようとしていた一夏だが、不意にこつんと、軽い一撃が彼の頭を襲った。そこまで痛いというわけではないが、突然攻撃をされてしまった時の条件反射のようなもので、一夏は「つつ！」と呻く。

小さな握りこぶしで一夏を攻撃できた人間は、もちろんこの場には簪しかない。

「私は、これでもう、怒ったから……」
言って、にこりと簪は笑う。

どうやら彼女は本当に怒っていないらしいし、自分を攻めるつもりもないらしい。それが理解できて、一夏はある程度だが吹っ切れた。

「——分かった。それじゃあ、俺の方からも、『急激な作業で完成させなくていいから、もう片方の専用機作成を優先してくれ』って進言してみるよ」

「うん、ありがとう。それじゃあ……」

ノートPCを受け取る前に、一夏がしようとしていたこと。倉持技研の名前が出たゆえに一時忘れてはいたが、根本から忘れるミスを簪は犯していなかった。

「ああ。今から、簞を探してくる」

……同じく一夏も、忘れてはいなかったようだ。

寝ぼけ眼をこすりながら、一夏は窓側にある、もう片方のベッドを見る。

（やっぱり、いないか）

一夏のルームメイトにして第一の幼馴染である簞は、昨晚——正確には、昨夕だが——に一夏と喧嘩をした。そのことが原因となり、今のところ2人の間には大きな溝が生まれている。

一夏は、つい昨日簞と会話した、その後の出来事を思い出す。

「その……簞さん、だっけ？ の特徴、教えて？ 私も、探すの手伝うから」

部屋を出ていこうとした一夏を止めて、簞が尋ねる。

「マジか、サンキュー！ 特徴はポニーテールと姿勢がいいのと……」

……後、制服がミニスカート。……うん、大体そんなところ、かな？」

胸が大きい……という特徴を危うく言いかけてから、慌てて別の特徴に言葉を変えた一夏。簞の方のそれが憤まじやかなので、さすがにそのサイズを言うのはデリカシーがないと判断したためである。多少つつかえた所に疑問を持ったが、それも一瞬のこと。すぐに簞は、一夏から教わった簞の特徴を頭に叩き込んだ。

「それじゃあ、俺は校舎と部活棟の方を一通り見てくる。簞さんは、寮の方を頼む！」

「うん、分かった」

一夏は、校舎に向かって全速力で駆け出す。

まず最初に、1年生のクラスを1つずつ見て回った。さすがにそこにはいないらしい。

1年生のクラスルームにいないのであれば、他の学年のクラスにいる可能性は更に低い。一夏はそちらを後回しにして、彼女が怒ったときに行つていそうな場所を——小学生の頃の記憶をどうにか思い出しながら——徹底的に探すことにした。

まず1番最初に思いついたのが、剣道場である。場所はどこだったか……持っていたノートPCを開き、学園の情報を探す。

場所はすぐに特定できたため、そちらへ直行した。

「すいません！」

声をかけながら道場の中へ入ると、ちょうど剣道部部員が今日の部活動を終わらせ、片付けをしているところだった。

「おや？　もしかして……織斑一夏君、かね？」

部員の1人が、声をかけてくる。1番最初に声をかけてきたということは、彼女が部長だろうか。

「もしかして、入部希望——」

「すいません違います」

あからさまに、話し掛けてきた部員は残念そうな顔になった。しかし、一夏も今は箒を探すことで手一杯である。

「箒……あ、ええっと、去年の中学の剣道大会優勝者！　そいつで、ここに来てませんか？」

「人探しかね？　確かに来てほしいものだけど、残念ながら来てないよ」

今度は、一夏の方が残念そうな顔となる。ありがとうございましたと一礼して、その場を去った。

次に一夏が考えたのは、食堂である。運動量が多いから、やけ食いなんてことを箒は平気でしている可能性があった。

しかし、基本部活動のために使われるような器具やグラウンドを利用してウサ晴らしをしているという可能性も0ではない。一夏は、近い方のトレーニング場を選んだ。

……そのようにして、探すこと30分。

結局、学校中を探すこととなったが、それでも筭は見当たらなかった。後は、男子では勝手に入れない、いや入るが入ったら変質者扱いされること請け合いの、更衣室やトイレ程度。

簪と連絡を取り合ってみるが、どうやら寮の方でも発見できなかったとのことで、一夏は驚愕する。一体どこにいるんだ？——しかし、手掛かりもなしにこれ以上探しても見つからないだろうと、一旦休むべく2人は寮の廊下で合流した。

「いない、な……」

「実は、もう部屋に戻ってる、とか……」

「可能性はあるか……けど」

簪の腹の辺りから、小さく音が鳴る。思わず簪は赤面して腹を押さえた。

「俺も、さつきから何度も鳴ってるんだよな。後は俺が探すから、夕食にしようぜ？」

空腹の魔力には勝てなかったようで、簪は赤い顔のままコクンと頷いた。

「あれー？ かんちゃんとおりむー、一緒に食べてるのー？」

2人が食事をとっていると、1人の女子がその席に近づいてきた。

「あ、のほほんさん」

「本音？ あ、織斑くんと、おんなじクラスか……」

よいしょ、と、小さく掛け声をしながら、のほほんさんと呼ばれた女子——布^{のほとけ}_{ほんね}本音が席に座る。空想動物を象った部屋着の袖口からは腕が出ておらず、危なっかしい印象を周囲に振り撒いている。

「2人とも知り合いだったんだー」

「ん、まあな。昔から色々な場所で。それより、のほほんさんと簪さんこそ」

「えっとねー、私は、かんちゃんの専属メイドさんなんだよー」

専属メイド？ 頭にクエスチョンマークを浮かべる一夏に、簪が

説明する。

「更識家っていうのが、結構、大きな家で……本音の家は、その、代々うちの使用人の家計なんだ……」

「へえ、そういうの始めて聞いたぜ。……けど、のほほんさんが使用人って、想像しにくいかも」

「うんうん、だよな」

「怒るところだろそこは！」

えへへ、と笑いを浮かべたままの本音を見て簪は、正確には一夏も、もはや呆れるばかりだった。

「それじゃあ、後は俺が探すよ。簪さん、色々ありがとくな」

食後、寮の廊下で一夏と簪は別れる。

そして、再び簪を探し始めようとした一夏だが、直後に頭を抱えることとなった。

何せ、もう既に簪がいそうな場所は全て探したのだ。これ以上、どこを探せばいいのか、疲れの溜まった今の一夏には皆目検討もつかなかった。

「うーん……とりあえず、一度部屋に行ってみるか。簪さんの言った通り、既に部屋に戻っている可能性も0ではないわけだし」

何より、たとえ部屋にいなかったとしても、校外に無断で出ることが禁止されている以上は部屋に戻ってくるはず。そもそもは「早く謝ろう」というのが目的で探し回っていたのだ。見つからないならば、今度は確実に謝れる方法へと切り替えるべきである。

自室に、到着した。

一応、ドアをノックする。中から返事は聞こえてこなかったため、一夏は入室した。

これが、まずかった。

つい先ほどは声をかけながらノックしたというのに、今回は気を抜いて声をかけ忘れたのだ。

その結果。

一夏がドアを開けると、ちょうど部屋でもドアが開く。
そして、開いたドアとは……洗面所とシャワー室を隔てるドア。
中から、湯煙と共に、

——タオルを1枚身体に巻いただけの箒が、姿をあらわした。

「ほ、ほ、箒っ！ あの、ごめん！ 悪かった、まさかシャワーを
浴びてたとは——じゃなくて！」

咄嗟に後ろを向きながら、一夏は謝罪を開始した。

「あの、裸を見たことが悪くないとか、そういう意味ではなく……
あれ、ほ、箒？」

だがしかし、箒から一夏への反応はなかった。それどころか、一
夏の耳が狂っていないのであれば、彼の耳には箒の足音が聞こえた。
近づく足音ではなく、遠退く足音である。

後ろ向きのまま、一夏はベッドへと歩いて行った。そして、ベッ
ドに座る。

「ええと……裸を見るような状況になったのは、すまなかった。そ
れと、勘違いさせたことも」

悪かった、と言おうとして、しかし一夏の口は止まる。
無理もないだろう。

同じく耳に狂いがなければ、そのとき、服を着替える布擦れの音
が、彼の耳には聞こえていたのだ。

一夏の心臓が思い切り高鳴る。

しかし、それも数秒のことだった。段々と冷静さを取り戻してき
た一夏は、箒の行動にむしろ不審さを覚える。

先ほどから、何度か声をかけているが無視。ドアを開いた後も、
思わず箒を見つめたが、箒はこちらを睨むそぶりすら見せなかった。
「箒？ ごめん、返事してくれると、嬉しい」

確認で声をかけるも、箒は更に無視。そして、後ろでは布団に潜
り込む音が聞こえる。

一夏は、確信した。

(……無視、されてるよな、これ)

2 - 2 憤慨淑女は意外と聡明

とりあえず。

一夏は、「とりあえず」という言葉をよく使う。

昔から、重要度の高い事項が2つも3つも同時に進行することが多いのは、彼にとってあまり喜ばしくはないジンクスだった。そして、そういう状況に置かれるたびに、彼はそれが口癖かと思われるぐらい「とりあえず」を多用した。

問題に立ち止まっているぐらいなら、何かできることを1つでもやろう。一夏のそういう心情が、非常によく顕れている言葉だ。

昨晚だけで重要な案件が2つ、晩という縛りを除けば一週間後のクラス代表決定戦を合わせて3つ、一夏に振り掛かった。

しかし、いつまでも考えあぐねてベッドの中で狸ネイリストを続ける、というわけにもいかない。

立ち止まりそうな出来事に直面した一夏は、とりあえず、着替えて、食堂へ来ていた。

中学2年の頃まで、朝の一夏は大食漢であった。「エネルギー効率の観点からすると、朝食に最もウエイトを置き夕食の量を減らすのが最良である」という理念に従っていたためである。

しかし、「起床直後の大量摂取は、寝起きの臓器に次から次へと投石しているようなものだ、傷が付くことは間違いない」という話を小耳に挟んだ中学3年以来、朝の一夏は小食派であった。

結論として、今の一夏は小食である。どういふことかといえば、食事にあまり時間はかからないということだ。

そのため、食堂でハムエッグ、サラダ、スープ、それに白米を少量受け取った彼は、昨日の事件3つのそれぞれ当事者である3人――箒、セシリア、簪――が食堂の中にいないか、それを調べるために多少の時間を割くことができた。

10分ほど各席を探してみたが、発見はできなかった。できれば

誰かと話しておきたかったが、いないのであれば仕方がない。とりあえず、一夏は他に誘われた同じクラスの数名と食事をとることにした。

「ねーねー、織斑君。食事前に外したけど、結局その眼鏡って何なの？」

「ああ、小型ディスプレイ。普通は電源がオンオフ切り替えられるんだけど、とある知り合いがスイッチをパカパカ切り替えるもんだから、電源装置を壊してつけっぱなしにしてる」

「そのおかず、どう考えてもパンの方が合うよね……」
「朝食の白米は誰にも譲れない！」

どんどん飛び飛びになる話題にしろろじて一夏はついていったが、「食事は迅速に済ませろ！」と1年の寮長——困ったことに、これが一夏の姉である千冬なのだ——から檄が飛んできたことが理由で、最終的に押し黙ることとなった。千冬はかなり威圧的な雰囲気醸し出していたため、他の女子からの質問もそこで止んだ。

教室。

当然だが、篠ノ之箒はそこにいた。

「あ、ええつと……箒、おはよう」

一夏はぎこちなく声をかけるが、箒は完全にスルーの体制である。プイと顔を横に背け、顔すら見ないという状態だった。

(……あー、まあ、予想はついてたけれど……)

何度も何度も呼び掛けると、心証が悪くなるかも知れない。けれど、たった1回呼び掛けただけで席に着いては、同じく心証が悪くなるかもしれない。

こういう時の言葉選びが、やはり一夏は絶望的に苦手だった。この時の一夏は、時間がないためとりあえずそのまま着席することとした。

さて、今日も今日とて、一夏の授業態度は改善されていない。まず1時間目。真耶の授業だった。

昨日のように眼鏡（ディスプレイ、が正しい）とにらめっこを続けているわけではないが、授業を聞いているわけでもなかった。千冬がその姿を見れば確実に教師の話を聞いているないと看破できたのである。真耶からすれば一夏は、『教科書を広げたただひたすらノートをとり続ける、熱心な生徒』としか見えない。

そして、真耶は気の弱い——というより、慣れていないことに非常に弱い教師であった。今回の場合、真耶は男子生徒に慣れていない。そのため、一夏が本当に授業を聞いているかを確認することなど、できなかったわけである。

そして、休憩時間。

——ノートに集中していた一夏は、非常に残念なことに、休憩時間をノートとのにらめっこで終了させた。周囲に群がる女子はいっそ清々しいほどに無視して、である。

そして、授業は2時間目に入った。

「織斑」

この日初めて、授業中の一夏に声がかけられる。

「おい、織斑。返事をしろ」

声をかけていたのは、千冬であった。1時間目は用事でクラスを抜けていたようだが、2時間目の授業ではしっかり監督を務めている。

彼女は授業を聞いていないことを早速看破し、警告の意味を含めて、一夏の前に立ち名を呼んだ。

一夏は、反応しなかった。

……スパン、と、出席簿が頭に振り下ろされ、一夏は既に黒くなりかけていたノートに思い切り激突した。

「あいてて……」

「いてて、じゃない。お前は、授業を聞いたらどうだ」

「ISの基本機能の話なんて、既にタコが耳の中で子供を出産するぐらい何度も確認しています」

至って真面目に、一夏は自身の正当性を主張する。

「……なら、今教卓の上で話されていた内容を、説明してみる。それで今回限りは帳消しにしてやる」

「——えっと、何の話してましたっけ。ISは元々宇宙開発を目的として作成されたため、人体保護を目的とした特異なエネルギーバリアほか生体機能の調整までしてくれる、だとか、そんな話ですよ？ それに加えて操縦者の生命維持を最優先するための絶対防御プログラムが働いたとか——確か、山田先生はブラジャーを例に挙げてましたけれど、俺が例えとしたら——そうだな、自分のサポートや保護をしてくれて、いざという時には自分のことを絶対に護ってくれる……あ、俺から見た千冬姉さんみたいなもんかぐええ！」

自分が引き合いに出されるとは想像だにしていなかったのだろう、一夏はもう一度出席簿の手痛い一撃を喰らった。ノートに乗っていたペンの黒鉛が擦れて、一夏の頬を黒く彩った。

続けて、千冬が咳ばらいをする。どう見ても照れ隠しではないその姿に、数名の生徒がにやけ、そして千冬から『更なる照れ隠し攻撃』という二次災害をありがたく頂戴することとなった。

そして、チャイムは鳴る。

一夏は、擦れて黒ずんでしまった部分を消しゴムで必死に消していた。

「……織斑君、ノートに何書いてたの？」

「ああ、っと……企業秘密」

「あつ、反応した！ 企業秘密ってどゆこと？」

「何だその、反応するのが珍しいみたいな……」言いかけて、一夏は視線を一箇所に集中させる。

時計だ。

「もしかして、この休憩時間って……2時間目と3時間目の間？」

一夏はてつきり、今が1時間目と2時間目の間だと思っていたのである。さすがの女子陣も、集中のしすぎに多少引いた。

「ま、いいや。それで、企業秘密っていうのは……バイト先に見せるものだから詳しい内容は教えられないよ、ってこと」

「織斑君、バイトしてるの？」

「ああ、まあね」

一夏には、両親がいない。

それゆえ、一家の大黒柱の役目を担ったのは、千冬であった。

姉に可能な限り負担はかけさせまい、と、一夏が中学のころからバイトをしていたのはそういう理由があるのだが——そこまで重い内容を聞かせるわけにもいかず、どう説明しようか一夏は迷った。

迷って、とりあえず、

「自分の小遣いぐらい、自分で手に入れようと思ってたからさ」と、あながち間違ってもいない嘘で乗り切ることにした。

ウエストミンスターの鐘の音が鳴り、3時間目の授業が開始される。

「織斑」

「はいなんでございましょう、織斑先生」

休憩時間と同じく消しゴムかけをしている最中だったため、今回の一夏は、千冬からの出席簿の攻撃を喰らわずに済んだ。

振りかぶっていた出席簿を舌打ちしながら千冬は下に降ろす。

攻撃する気満々だった姉に軽くもない恐怖を一夏が覚えていると、千冬が一夏に話し掛けた。

「お前のISだが、準備に少し時間がかかりそうだ」

お前のIS？ すっかりノートに頭をシフトさせていた一夏は、一瞬だけ、千冬が何を言っているのか理解しかねた。

思考をノートから引き離し、どうにか『お前のIS』の話まで持つて行く。

「何だ、まさか、何を言っているか分からんわけではあるまい」

「……あ、ああ。もしかして専用機の話ですか」

「そうだ、お前の専用機の話だ」

専用機、という単語が耳に入り、クラス中がざわめく。

パワードスーツのISには、「コア」と呼ばれる核部分が必要不

可欠。

このコアを作成することが可能な人間は、世界中を探してもISの開発者ただ1人しか存在しない。そしてなんと、開発者その人は、そのコアを467個作った時点で行方不明となった。

そして専用機とは、書いてそのまま「ある個人専用のIS」のこ
とを示す。

総じて、専用機とは非常に貴重なものだ。それが1年生、しかもIS初心者に充てられるとあれば、生徒のざわめきもまた当然であつた。

1年生で専用機を所持しているのは、今のところ、国の看板を背負った代表候補生であるセシリアと簪（簪は、今のところ機体が未完成だが）のみだ。

だがしかし、である。

「すみません、俺の専用機の件、断らせていただけないでしょうか」

一夏の千冬に対するこの返答が、教室を更にどよめかせることとなつた。

「織斑くん、専用機だよ？」

「断る理由なんてないんじゃないの？」

IS学園に入学した以上、専用機はそれを持たないほとんどの生徒にとつて憧れの対象である。

次々と非難の声が上がつた。

「お前達、静かにしろ」

その声は千冬が止めたが、もちろん止めたのは話題を終了するためではなく、一夏と話すためだ。

「さて織斑。自分から専用機の誘いを蹴るんだ、何かしらまともな理由ぐらい持っているんだろうな？」

「当然です……けれど、その説明は、後でよろしいでしょうか。今は、授業を進めてください」

「その授業を聞いていないくせに、よく言う」
ちらりと、千冬が一夏の目を見つめる。

これで「本当は戦闘が面倒臭いから」などと言いかねないような雰囲気を感じれば迷わず意見を切り捨てるところであったが、一夏の眼から千冬が感じとったものは、むしろ強固な意志であった。

「はあ……分かった。放課後、説明しに来い。山田先生、授業の続きを」

千冬に促され、「あ、は、はい!」と、真耶は慌てて授業を再開した。しかし、一夏の専用機拒否のこともあり、その授業に集中できた生徒はほとんどいなかった。

「どういうことですか!」

午前の授業が全て終了し、昼食時間。チャイムが鳴ると同時に、セシリアは一夏の元へ憤怒の表情で駆け寄った。

「どういうこと、って?」

「専用機のことですわ! 貴方、わたくしとクラス代表決定戦を行うのですよ!? 相手の全力には自身も全力で答えるという、あの発言は嘘だったと!?!」

一夏とセシリアの周囲には、他の女子も集まっていた。周囲全員セシリアと同意見であり、状況は1日前の2時間目3時間目間の休憩時間とよく似ていた。

「嘘じゃないさ」

「嘘でないなら何だと言うのです! 自分から専用機を蹴るだなんて、わたくしがなめられているとは思えませんわ!」

「分かった、落ち着いて」

「これが落ち着いていたら——」

「いいから、落ち着け」

急に一夏の声に気迫が籠り、セシリアがたじろぐ。

大きく息を吐き出して、一夏が話を始めた。

「口調が乱暴になって悪かった。少し、俺の話を聞いてくれ。……」

俺が今すぐに専用機を手に入れることで、被害を被る人がいるんだ」

「被害……？」

「ああ、これを見てください」

一夏が、机の中からノートPCを取り出す。それからカーソルを操作してメールボックスを開き、昨日の倉持技研と自身のメールのやりとりをセシリアに見せた。

「見てのとおり、俺の専用機の製造が最優先になることで、他の何個もの研究所の予定が後回しになる。こんなデータを見てまで、自分の専用機が作られることを望む人間がいると、思うか？」

う、とセシリアは喉を詰まらせる。

「それで、その中にもうひとつ……これは、食事しながらでできる話だから、とりあえず食堂に行こう」

これでも良心の呵責に苦しみかねない内容だというのに、まだ先があるのか。好奇心を抑え切れず、セシリアは食事に同意した。

同意が得られた一夏は、その後すぐ携帯を開いた。

「さて、じゃあ説明しようか」

食堂の4人掛け席。そこに3人が座っている。

言わずもがな一夏とセシリア、それと呼び出された簪であった。

「織斑くん……？　こちらは……？」

「俺のクラスメイトでイギリス代表候補生の、セシリア・オルコットさん。あ、オルコットさん、こっちが日本代表候補生の更識簪さん。俺の幼馴染でもある」

代表候補生2人は、お互いぺこりと頭を下げる。どちらも、なぜ相手がこの場にいるのか飲み込めておらず、警戒するような目つきだった。

「さて、オルコットさん。さっき見せたメールの内容、覚えてるかな？」

「専用機を倉持技研が制作することと、それに伴いいくつかの仕事が停滞する、という話でしょうか？」

うん、と一夏は肯定し、それからもう一度ノートPCを開いた。画面の一部が指で示され、それをセシリアが確認する。

「『専用機1機の作成の、大幅な遅延』、ですか？」

「うん、それ。簡潔に言うと、その専用機って簪さんのなんだ」「なっ……」

セシリアも、ようやく彼の言わんとすることが理解できたようだ。3つも4つも他の仕事を停滞させ見ず知らずの相手に迷惑を掛ける、それだけでなく知人にさえ損をさせてしまう。これだけ条件が揃えば、一夏の専用機辞退という話も納得がいくというものだ。

「織斑くん、それ、話しちゃっていいの……？」

「問題ない。どっちにせよ、いずれバレる話だろ？ さて、それじゃあ、更に話を進めるぜ……」

オルコットさん、放課後に、ちょっと付き合ってくれ」

2 - 3 影の彼女は嬉し悲し

「今回は、紛らわしい言い方ではありませんのね」

「当たり前だろ。昨日の今日で同じミスをしたら俺の頭が悪いみたいじゃないか」

「それで貴方は、わたくしを一体何にお誘いなのでしょう？」

「それは――」

言おうとして、会話が止まった。見方次第では一夏が故意に止めたようにも捉えられるが、より正確に言えば止めたのはこの場では第三者の…… 箒である。

専用機の話に関して箒が第三者であることに間違いはない、しかし、一夏にしてみれば別の要件で当事者。その箒が、つかつかと、

一夏達が座る席の方向へと近付いてきたのだ。

「織斑くん。あれが、箒さん？」

「あ、ああ」

「もしかして、まだ謝ってなかったの？」

「謝ったぜ、昨晚から全部無視されてるけれどな」

箒は食器を持っていなかったため、この食堂にいる誰かしらに何かしらの話があるということは明らかだった。

そして、一夏が考えるに、その『誰かしら』『何かしら』のうち『誰かしら』に当てはまる人物は多分…… 果たして、妙に勇んだ足取りで歩んできた箒は、一夏の予想通りに自分達の前で立ち止まった。

今日まで一方的に話を無視していた箒は、何を言い出すのか。流石の一夏もそこまで予想することは不可能である。

ただひとり今の状況が飲み込めていないセシリアがおろおろしている間に、箒は口を開いた。

「一夏」

「な、何だよ」

「決闘だ」

血糖？ 食事の話だろうか。

現実逃避したわけではないのだが、箒の発言が本当に理解できず、一夏は本気で言葉の意味を履き違えた。

「ええつと、今喰ってる飯は……」

「現在の話をしているのではない！ 放課後だ！」

飯の話ではない。ならば何だ、けつとう、ケツトウ……そこでようやく一夏は、箒の示すけつとうが「決闘」であることを理解し「はあ！？ 決闘って、一体全体何するんだよ！」叫んだ。

野次馬根性が見事に振り切っている生徒たちが、一発で周囲に集まってくる。失敗した、と一夏が額に手を当てるが、箒の方は特別焦るでもなく、話を進めた。

「放課後、剣道場に来い。話の続きは、そこでだ」

「おい待て箒、剣道って……だあくそつ！」

一夏の制止を聞かず、箒は去っていく。「全く、また大勢人を集めおって……」などと文句を呟きながらの退場であったため、焦ってはいなくとも一夏の言動に不満は持っていたらしい。

どうやら即座に話が終わってしまったらしい、と理解した周囲の女子達が再び食事へと散っていく中、箒を止めようと立ち上がった一夏は諦めて席にドサリと座った。

「あああああ……何で、箒と剣道で勝負することになるんだか」

「織斑くん、運動は人並みにしかできないもんね……」

「それだけじゃないぞ、困ったことに箒は中学時代、剣道の全国覇者だ。その分、ハンディキャップぐらいは付けてくるんだろっけど

……」

「力量差はどれくらいですか？」

「ハンデ付き、だと考えて、今の俺が『ラファール・リヴァイヴ』に乗って、千冬姉さんが乗ってる第一世代機と対戦するようなもん、じゃないかなあ」

『ラファール・リヴァイヴ』は、量産を目的としたデュノア社とい

うフランスIS企業の第二世代ISである。バランスのとれた汎用機で、初心者にも扱いやすく、乗りこなせば現時点各国で開発が始まっている第三世代にも劣らぬ機体だ。勿論、大体の第一世代機のパフォーマンスは軽く凌駕している。

しかし、いくらハードウェアがよかろうと、ソフトウェアで差がつきすぎていけば話にならない。第一世代に乗り込むのが千冬、第二世代に乗り込むのが一夏であれば、多分千冬はかすり傷を負うか負わないか、という程度しかダメージを喰らわずに一夏に勝利してしまうだろう。セシリアの頭の中でも、箒と一夏の剣道における実力差が、非常に簡単に理解できた。

しかし、決闘か……。再び一夏は頭を抱えた。喧嘩している現在の状況で決闘ということは、その結果で何かしらの折り目がつくことになる。

頭より身体が先に動くタイプの箒のことだ、多分、結果によってどちらかが強制退室という条件を突き付けてくるだろう。自分が負けた時は、野宿さえするかもしれない。

「困ったなあ……しかも、放課後か」

「放課後といえば、わたくしが何かに付き合っただけだわね。一体どんな用事があるんですの？」

「ああ、あるというより——今から、作ろうとしていたんだけど、って話。さて、お見苦しい場面をお見せしましたってことで、とりあえずさっきの話題に戻ろう」

冷めたハンバーグを横に避けて、一夏はノートを取り出した。

「そのノート、確か授業中に一心不乱で書いていた……」

「ああごめん、あれとは別物。12冊で纏めて1000円だったから、ってそんなことでもいいか」

最初のページを一夏が開く。見事なまでに白紙だったため、セシリアも確かに授業中開いていたノートとは別物だと納得した。

「まず、今の状況を整理しよう」

一夏がボールペンを取り出す。

白紙だったノートに、文字が刻まれはじめた。

「事の発端、大前提。俺がISを起動させてしまった」

一夏、悲惨になる。ノートにそう書き込まれる。

「織斑くん、これ……」

「倉持技研の受け持った受験会場のIS整備の仕事を手伝ってたら、その最中にいきなり反応したんだ。悲惨だろ」

「けれど、これじゃ何を示しているか分かりませんわ」

仕方ないな、の声と共に（ISを起動）が記入される。そして、その文字から2つ矢印が伸びた。

「俺はIS学園に入学。お偉いさん方がすったもんだして、倉持技研が俺の専用機を制作することになる」

すったもんだ、入学しちゃう、とノートに書かれる。再び簪とセシリアからの駄目出しを喰らい、それぞれに「一夏のIS作成」「（IS学園に）」が追加された。

そのおまけで、「次からは一発で分かるようにお願いしますね」とセシリアが一夏に釘を刺した。

「で、それぞれ何が起きたか。俺の専用機のせいで、簪さんの専用機の制作がアホみたいに遅れるのと、千冬姉さんがクラス代表決定戦を決めちゃう」

更に矢印が引かれ、それぞれ「かんちゃん、IS制作遅れる」「代表決定戦が勝手に決定される＋一夏IS制作がこれに合わさることに」と記入された。

「かんちゃんって……私？」

「ごめん、簪さんの漢字が難しかったから、のほんさんの呼び方を流用した。さて、今の状態はこういうことなわけだ」

一夏の懷から、今度は赤ペンが取り出される。最後の2つの文章が赤で囲まれた。

「ここまでオーケー？ 簪さんも、オルコットさんと呼んだ理由は分かったかな」

コクリと簪が頷き、セシリアも「大丈夫ですわ」と返答した。赤

丸から、矢印が再び1本伸びる。

「箒の問題に関しては俺と箒だけの話だから、無視しておこう。それで、さっきセシリアにも言ったが、俺と簪さんとしてはこいつに不満がある」

矢印の先が一旦放置されて、「かんちゃん、IS制作遅れる」に二重線が引かれる。

「こいつの原因は、勿論ひとつ前の『俺の専用機の制作』にある。更にこっちの代表決定戦が関わってISの制作が急ピッチになるもんだから、倉持技研の方も予算の変更やらなんやら起きる」

2つのルートが、赤線と赤丸で繋がった。

「総括して、簪さんの専用機の制作が遅れる事実をひっくり返すには、俺の専用機の治療という予定が邪魔をしないようにすればいい」
先ほど放置された矢印の先に、「一夏の専用機制作に関与しよう！」が記入される。

「ここまでで、質問は？」

「関与する方法……については、今から話すらしいですね。ならば、特にありませんわ」

「私も」

「おし、じゃあ次に行こう。以上の理由から俺の専用機制作を、可能ならば後回しに、無理でも簪さんの専用機制作と並行して行うぐらいには持つて行きたい」

関与内容が「後回し、もしくは遅延」と記入される。一夏が矢印と文字を大きく書きすぎたせいで、ノートの1ページ目が埋まりきってしまった。

ノートがめくられ、次の白紙ページが姿を表した。反省したのか、控えめに一夏は「方法」と記入する。

「とりあえず、大きくスケジュールを変えさせるなら企業に直接干渉する必要がある。セシリアがそれをするのはまず無理だし、簪さんは既に何度か文句を言っているだろうから、こっちは俺ができるだけやるしかない」

「では、大きく変える目論見が失敗した時に、悪くても小さく変えよう、というのがわたくしの付き合う話、ですわね？」

ビンゴ！　一夏が指を鳴らした。

「それで、一夏だけでなく代表候補生が2人もついて来ているわけか」

放課後。 箒は時間については特に何も言っていなかったし、先に放課後に用事を入れていたのは自分である、ということ、一夏は千冬との話を優先した。

「専用機を拒否したい、それが無理でも遅らせた。そして、本気の勝負でないとクラス代表決定戦に意味はないので、そもそもクラス代表決定戦の日程自体もずらして欲しい、と、そういうことだな？」

「そうですね、見て分かる通り、当事者の2人とも話しています」
一夏がセシリアに頼んだ内容は、この「千冬への連絡に付き合ってくれ」というものであった。

腐っても——腐ってはいないが——セシリアも簪も代表候補生。当然ながら、他の数多の生徒と比べて、発言権は強い。

しかも、一夏が他のクラスメイトにクラス代表を押し付けようとした時とは違い、意見も十分正当と判断できる。

千冬は、一夏の持ってきた意見をすっかり一発で理解した。

「俺の専用機の制作が急ピッチということになれば、簪さんのISの方に割り当てられる余裕も出てくるはずです」

「ふむ……確かに、アリーナの利用日程をずらすこと程度は、できないこともない」

一夏の顔がぱあっと明るくなる。

「しかし、だからといって、織斑の専用機作成が急ピッチでなくなる、ということはありませんんだ」

「どうしてですか!？」

時間的な余裕を作れば、最低でも予定を変えられるはず。そう考えていた一夏にとつて、千冬の発言は何を言っているのやら、一切理解できなかった。

「2つ理由がある」

「教えてください」

「ひとつは……更識!」

「は、はい!」

突然に呼ばれて、簪の身体がビクンと跳ねる。

「作成の先送りが決定したIS、この学園に発送して貰うように頼んだな?」

「はい、頼みましたけど……」

「既に届いている。返却することは、難しいのではないか?」

しまった、と簪の顔が歪んだ。確かに、一度相手に手間をかけさせて送ってもらったものを即座に送り返すというのは、関係の悪化に繋がる可能性が大きい。

そもそも倉持技研側が約束を勝手に先送りにしたというのも事実だが、前提条件として専用機は研究の一貫として『企業や国』が『個人』に与えるもの。企業側が原因で予定が先送りになることに、面と向かって文句は言えないのだ。

「しかし、『先送りにされる理由がなくなったこと』を簪さんが聞き付ければ、それを盾に送り返すぐらいは……」

「確かに不可能ではない、と」

コクンと一夏が首を縦に振る。

「では、もうひとつ、理由を説明してやろう。織斑、お前のISが急ピッチで製造されることが決定したのは、何もクラス代表決定戦をすることになったからではない」

「なっ……!」

「お前のISの作成を倉持技研に持ち掛け、手掛けているのは——あの、馬鹿だ」

げっ。

確かに一夏の口から、その一言が漏れた。そもそも隠すつもりすら、その呟きには感じられなかった。

「はあ……あの人、ですか」

一夏の呆れたような問い掛けに千冬は答えなかった。ただ、「クラス代表決定戦の織斑の試合に関しては、一週間程度なら調整してやる。お前達の問題だ、その間にどうにかしろ」

と3人へ向けて言い放ち、立ちすくむ3人——特に思案顔になったまま動かない一夏——を残し、職員室へ入っていった。

「あの……織斑、くん？」

「ごめん。とりあえず、連絡する必要がある相手が1人出てきた」

「さきほど織斑先生の馬鹿とおっしゃっていた人物、でしょうか？」

「一体、誰なの？」

ああ、そうか。千冬の「あの馬鹿」で誰だか理解することができるのがおそらく自分だけであることを、今更一夏は思い出した。

「うーんと、俺にIS関連の知識を叩き込んだ師匠……って言うかとにかく、オルコットさんも簪さんも、名前ぐらいは知ってる人だよ」

名前ぐらいは知っている、のワードを参照に、セシリアは昨今の著名な研究家の名前をそらんじ始めた。

簪もぶつぶつと、今まで自分が会ったことのある人物を口に出していく。

確かに、2人の挙げていった人物は、IS関係者からしてみれば著名な人物ばかりであった。だがしかし、しばらく聞いていたが、簪、セシリア、どちらの呟きにも正解はなく、一夏は途中で2人を止めた。

「俺の師匠っていうのは、束さん——篠ノ之束。ISの、開発者だよ」

2 - 4 本気の簞は狂気の凶器

「たばっ……あ、えっ……」

一夏の口から飛び出した言葉に対するセシリアの驚きようは凄まじく、『驚愕』を飛び越えた位置に『絶句』が存在するのなら、そこから更に360度回って……結局のところ、やはり絶句である。酸素を求める魚のように、口がパクパク開いては閉じていた。何かしら、意味を持った言葉を出そうとして、しかしそれができないといったところだ。

一方で簞の反応はといえば、セシリアとはまた違ったものだった。もちろん、セシリアに負けず劣らず驚きこそしているのだろうが、彼女の顔を彩る表情は驚きだけではなかった。

驚きにまみれつつもどこか、納得したような顔つき。簞の表情はそれだ。

「そういえば、簞さんとは幼馴染だって、言ってたもんね」

「ああ——元々は、たまたま近所に住んでた、っただけなんだけどな。更にいえば、俺が昔剣道を習ってたのは、篠ノ之流っていう流派の先生だ。束さんと知り合ったのももちろんそこだな」

そこで、ようやく驚愕から復帰したセシリアが、口を挟んだ。

「ちよっと、待ってくださいませんか？ ……もしかして、この後剣道場で貴方が待ち合わせをしている篠ノ之簞さん、は、まさか……？」

「あー……うん、個人情報になっちゃうけど、いずれにせよばれることだろうし、いいか。オルコットさんが考えている通り、簞は束さんの身内……平たく言えば妹だよ」

一夏が自身の師匠を暴露した、それが束であることはまた別に、セシリアは啞然とした。一夏が「この学園の生徒は皆、どうも、人の名字に関して無頓着過ぎるんじゃないだろうか？」という、少しばかりではなく外れたことを考えたが、それを考えたところで何か

が変わるわけでもない。

「ああ、ちなみに見ての通り、箒は体育会系の女子だ。東さんほど頭がいいわけでもないし、姉妹の間でISの色々な会話をするというわけでもない。むしろ……」

「むしろ？」

言い淀んだ一夏に言葉を重ねるように、簪が先を促した。

言葉が詰まった瞬間、簪は一夏にちらりと視線を向けられたようがしたので、簪は先を聞かずにいらなかったのだ。

言いくいことであるとは、理解していても。

「……どうも、姉妹仲は、悪いらしい」

「ああ、そう、なんだ……」

簪の声のトーンが、明らかに1つ落ちた。

簪にも、姉がいる。その姉と簪は、様々な事情があり、現在不仲なのだ。箒はもしかしたら自身と似たような境遇にあるのかもしれない、と、簪がその結論に至るであろうということを、一夏は理解していた。

「俺としては、どっちにも仲良くしてほしいと思ってるんだけどな」
非常にばつが悪そうに、一夏は頬を掻きながら、視線を誰もいない空間へ僅かに逸らした。

しかしその動作もおよそ2秒弱程度のことで、顔の方向はすぐに2人いる少女の方へと戻された。その表情は、一転して明るいものになっている。

「——さて。今日手伝ってもらえる用事は終わった。この後知つての通り、俺は剣道場に用事がある。別にそれ以外に火急の用件があるわけでもないし、今日のところは、ここで解散しよう」

暗い雰囲気吹き払うように、明るい声で一夏がそう言った。

「うん……私も、とりあえず、コアを受け取らないと」

「では、ごきげんよう」

簪が、総合事務室へと去ってゆく。それを見届ける前に、一夏は剣道場へと足を動かし始めた。

待ち構えているであろう幼馴染との、一方的な——もちろん、箒からの、である——決闘を果たしに。

自分が、真剣な相手の申し出を断ろうにも断れないという癖は、どうにかならないものか。そんなことを考えながら。

「それで、何でオルコットさんは俺について来てるんだ？ 寮ならあっちだけど」

「ついて行ったらまずいのでしょうか？」

罪のない笑顔でそう返事をするセシリア。

それに対し、「まずいかもな」と堂々と文句を言えない性分も、どうにかならないものか。そういうことも、おまけで考えながら。

「……来たか」

「来るさ」

剣道場。

箒は、一夏が到着した時にはもうとつくに、全ての防具を付け一夏の防具も出した上で床に座り込んでいた。

準備は万端。まるで、そう言わんがごとく。

「お前のことだ、無視するかとも思っただがな」

「馬鹿言えよ、一方的で不条理だったとしても、約束を取り付けられたならすっぱかすのはマナー違反だ」

一方的で不条理、の部分をさりげなく強調する一夏だったが、箒は特別気にすることもなかった。というか、完璧に無視した。

「ふん……取り巻きの女子など連れて来なければ、格好付けの一つにでもなったのだろうがな」

「いや待て、別にオルコットさんは取り巻きじゃねえよ！ 彼女には、勝手について来られただけだ！」

必死に弁解する一夏の後ろで、セシリアが口を尖らせる。

「勝手について来たのは確かですが、別に否定もしなかったでしょう？」

「それはそうだけど——だああ、もう、ややこしいっ面倒臭いっ！

とにかくオルコットさんはただの観客だよ、気にすんなハゲるぞ！」

「ハゲッ……ん、ゴホン！ 話が逸れた、元に戻すぞ」

わざとらしい咳だが、確かに、コメディチックな空気を真剣な空気にへと変えるための区切り程度にはなった。

「で、決闘って……まさか、お前の得意なフィールドで勝負するんじゃないよな？ 俺が運動をそこまでできないことぐらい、箒も知ってるだろ？」

言いつつも、一夏は胴着の着用を開始した。

箒は既にいつでも試合を始められる状態なのだ。剣道関係の勝負になること程度は、一夏も間違いないと確信している。そしてわざわざ防具一式が出ているのだから、これは着用しろということなのだろう。一夏の行動に迷いはなかった。

そして、今の一夏にとって重要なのは、細かい対戦条件と決着後の事情だ。

「その点に関しては、私だって考慮している」

「考慮、ね。具体的には？」

「まず、一夏の勝利条件は一本取ること。私から、たったの一本。どこでもいい、それだけすれば、この勝負はお前の勝ちだ」

面、胴——様々な場所を示しながら、箒が言う。

「そして、私はその20倍。勝利条件を満たすために、私は一夏から20本取る。勝敗条件に関しては、これでどうだ？」

「うん、分かった、俺が1本、箒が20本だな」

不公平にも聞こえるであろう。流石に、差がつきすぎている。

しかし、どちらからも文句は出ない。実力の差を補うルールにケチをつけるほど箒は野暮ではないし、意地を張って同等の条件にしてほしいと願うほど、一夏は自分の実力を過信していなければ愚直でもないのだ。

「それで、わざわざ決闘って言うぐらいなんだ。何か賭けるんだろ？」

胴着というものは、慣れていなければ着用に時間が掛かる。

一夏は、過去には確かに篠ノ之流の剣道を習っていた。しかし、それも10年近く前の話である。身体のサイズも胴着のサイズも過去とは一切違うため、未だに彼は着用に手間をかけていた。

「……今回賭けるものぐらい、お前にも分かっているだろう？」

「箒の一方通行な感情をそのまま当て嵌めるなら、分かっているでもない、かな」

「何？」

箒の、面の奥にある眉が、ぴくりと吊り上がった。

「何でもねーよ。とにかくさっさと、条件を言え」

「ッ……！ 負けた方が、部屋から退出だ！ それ以外に何がある！」

「いんや、何もねえな。ゴチャゴチャ言うより分かりやすいじゃんか」

やっと、一夏が準備を終了させた。

防具の重さは不慣れなのだろう。多少よろけつつ、しかし一夏は立ち上がった箒と向き合う。

「さて、足捌きつてのは、どんな感じだったっけな——？」

「先手必勝！ そんな声が聞こえてきそうな勢いで、一夏は箒へと飛び込んだ。」

箒は、ゆつくりと、飛び掛かって来る一夏に向けて竹刀を構えた。

「それで、その結果がこれ、ですね」

20分もしない時間が経過した、剣道場。セシリアは溜息を吐いて、汗だくの一夏を見つめていた。

「第二世代に乗った初心者と第一世代に乗ったブリュンヒルデ程度の差とおっしゃっていましたが……言い得て妙ですわ」

「悪、かつたな」

一夏と箒の試合は、終始にわたって箒が圧倒していた。

剣道に関してはそこまでの知識がないセシリアが見ていても、力量差は一目瞭然。それほどまでに、一夏と箒には実力の差があった。「一応、俺は、インドアなんだよ……最初にルールを、否定しなかった、俺が悪いんだろーが、な……」

息も絶え絶えという体たらくの一夏に対し、試合終了後の箒はそのまますたすと剣道場を出て行った。

基礎体力でさえ差がついているという、これ以上ない証拠である。「ほら、しっかりなさって。そろそろ立ち上がれるでしょう?」

セシリアに腕を引っ張られて、ようやく一夏が立ち上がる。それでも、最初には軽くフラついた。

「あー……にしても箒、すっげえ強くなつてたなあ……」

「貴方が弱すぎるのではなく?」

「当たり前だろ、簪さんは『あまり運動ができない』って言うてたが、別に俺は運動オンチじゃないぞ。100メートル走だつてクラスで上位3分の1には入ってたし、体育大会で弁当だけが楽しみなタイプの人間ってわけでもない。人並み程度の運動だったら、問題なくこなせるんだよ」

首を左右に曲げながら、一夏は坦々と説明を続けていく。残念ながら首はコキコキとは鳴らなかった。

「代表候補生からすれば、そのぐらいは当然でしてよ?」

「知ってるよ。代表候補生の運動量はアホみたいに多いってことも、自衛が可能な程度に体術の訓練を受けるってことも」

負担のかかった肩を揉む。多少中年臭い動きである。

「けど、俺の姉さんはご存知の通りIS世界最強だ。横に並んで歩こうとしようにも、俺が今まで進める道は研究職だけだった。だから、俺は研究職っていう道を——うん、悪いな、これじゃただの言い訳だ」

からからと一夏が笑う。そして、部屋に戻った後のことを、考え

出した。

「オルコットさん……の部屋には、もう誰かルームメイトがいるんだよな。つか、俺が女子と相部屋になるくらいだ。どこもそうか」「それですわ。去り際に『さっさと荷物をまとめて出ていけ』と言われてましたが、一体どこで寝起きする予定なんですか？ まさか、野宿というわけにもいきませんし」

第一、寮の部屋とは学園側が決めるものである。本来であれば、このような勝負によってどちらか片方が退室を迫られることなど、ありえないのだ。

前例がないため、頼れる相手もない。

「そうだな……考えてみる」

剣道場の扉を、一夏が開く。春の涼しげな風が2人の身体に当たるが、大量の汗をかいた一夏にその風はむしろ寒すぎた。

「……とりあえず、千冬姉さんに頼ってみるかな」

考えてみるとセシリアには言ったものの、結局一夏には、それ以外の選択肢は残されていなかった。

3 - 1 脅迫者は世界最優

「……織斑」

「……はいなんでしょう、織斑先生」

織斑千冬は、国立IS学園1年生寮の寮長である。

寮長という仕事を請け負っている者が、そうでなくても連日連夜仕事に追われるここIS学園で、寝泊まりをする場所がないわけではない。ここは寮長室の前である。

織斑一夏は、国立IS学園1年生寮の住人である。

郷に入っては郷に従えという言葉があるが、従いたくなくても入学してしまったここIS学園で、まさか野宿をするわけにもいかない。しかし彼は今、野宿もやむなしという状況に迫られているのである。

「お前と篠ノ之が、非公式に決闘をする。そして、負けた側が退室する。確か、そんな話だったな？」

「その通りですね」

一夏は先刻の決闘で、箒に鮮やかなストレート負けを喰らったところだ。

時々腕をけだるそうにグルグルと回しているその姿を見れば、確かに全力をもって事にあたったのだとよく分かる。

しかし、負けは負け。現在の一夏は、自分の手荷物を2つのバッグに纏め、千冬に縋っている状態だった。

上京してきたばかりの田舎の少年のようにも見えなくはないが、最大の違いといえば、目の中に夢と希望の代わりに諦めが映っているところである。

「IS学園教師として、私がそれを認めると思ふのなら、お前は馬鹿だ」

「ですよねー」

生徒たちの部屋では行くあてもない——簪や、もしかしたらセシ

リアも、ルームメイトさえいなければ快く泊めてくれたやもしれないが——一夏は、当然のごとく姉である千冬を頼った。しかし結果は……やはり当然のごとく、断られるに決まっていた。

「とつとつ、お得意の話術でも使って説得してこい」

「先生それ皮肉ですか」

「皮肉でもなんでもない。相手に意見を飲ませるのは、お前の得意な分野だろう？ 突発的に飛び出す言葉が残念なだけで」

「バツサリ切り捨てられた!？」

とにかく、けんもほろろといった具合であった。

「ああもう、とりあえず1日だけでいいんです、泊めてくださいよ！」

「却下だ」

「じゃあどこで就寝しろって言うんですか!？」

「さつきも言っただろう。篠ノ之を説得しろ」

一夏にとつて、まさに取り付く島もない状態が続く。

——切り札を、切るまでは。

「分かりました、保留として……諦めませんよ、あくまで保留です。そういえば織斑先生、話は変わりますが」

「何だ急に」

話が変わる、と言われたが、千冬は一夏を信用していない。こいつに話を変える気なんてない、どうせ何か交換条件でも出そうとしているのだろう。そう考えているし、その考えはあながち間違いでもなかった。

「いえ、今度、寮長室に一年女子の数十人が突撃する、という計画があると小耳に挟みまして」
ぴくつ。

千冬の眉が、わずかばかり吊り上がる。

「……例年のことだ、いつも通り弾き出すさ」

「んー、それならいいんですけど」

「どうということだ？」

一夏の歯切れが妙に悪い。他の人間であれば特別に気にすることはない千冬だが、千冬にとっても一夏は長年付き合ってきた肉親だ。その煮え切らない言い方に、反応してしまうのも無理はなかった。

「いえ、別に」

「もったいぶらずさつさと言わんか」

「……えー」

どこから取り出したのか、一夏の脳天に出席簿が直撃した。

「言え」

「つつ……分かりました、ちょっと待ってくださいね」

言うが早く、一夏は携帯を取り出した。

カチカチと操作を繰り返し、やがて1つのページを開く。

「……これは？」

「IS学園の——裏サイト、みたいなもんですよ」

白を基調とした、シンプルな背景のサイトだった。カラーリングの爽やかな雰囲気からは「裏サイト」という印象は持ちにくいが、しかし見た目だけで判断するのは筋が違う。もう一度背景をよく見てみれば、その背景はIS学園の制服と似たような——というより、ソックリな——カラーリングであった。

「織斑先生がいつからこの学園に赴任したかは、教えてくれなかったんで知りようがありませんが。しかし、最低でも今年は2年目、ですよね？」

「それがどうした？」

「いえね、ホラ。自身の代で野望を果たせなかったOGの方が、どうやら野望の実行者を後輩に移そうとしてるらしくて」

ページ内の「掲示板」がクリックされる。一夏が再度画面を見るように促したため、千冬は映っていた文字に目を走らせた。

「……織斑千冬に関しての情報求む。直接物品を入手する必要性、なし。写真は1枚最低5000円、部屋の撮影は最低50000円。ある程度の交渉は受け付けますが、部屋の撮影は先着1名のものしか受け付けません……ちょっと待て、織斑、そのサイトのURL

をメモさせる！ IS学園の方から叩き潰す！」

文章を読むにつれ千冬の眼がだんだんと血走っていったのが、目の前にいる一夏からも理解できた。殺気だろうか、一夏は寒気で鳥肌が立つのを感じた。

「別にいいですけど、少なくとも……万全の準備ぐらい、整えておいた方がいいんじゃないですか？」

「万全の準備、だと？」

「だから、その織斑先生の部屋の中です」

一夏が、千冬の背後のドアを指差す。

「今から、織斑先生の指揮の元、このページの作成者もしくはこの情報の投稿者を学園側から突き止める、とします」

バッテリーの減少を抑えるためか、一夏は携帯をぱたりと閉じた。「確かに、IS学園はトラブルが発生しやすいため、その特定自体はあつさりできるでしょう。けれど、それまでの間に生徒たちが行動を起こさないとも限りません。実際どうでしょう？ もう織斑先生、昨日今日で、何度も何度も写真を撮影されたんじゃないですか？ 『いつものことだ』と気にせず、咎めるような行動はしなかったのではないですかね？」

多少、千冬の額が汗ばんできた。

一夏の言っていることに、一切間違いはない。千冬は『ブリュンヒルデ』——第一回のIS世界大会『モンド・グロッソ』において世界最強の座を獲得した人間である。彼女を崇拜する生徒も学園には多く、写真を撮影されることなど日常茶飯事であった。

そして、赴任当初は多少の気恥ずかしさもあつて生徒を注意していたが、どれだけ注意しても生徒側からは続々と撮影者が生まれ、結局千冬は撮影に関しては放置する現状なのだ。

その中に、売買目的を主とする人間がいようと、不思議ではない。「さて、物事は最悪の状態を想定して動くべしとは、ISに留まらない一般常識であつたと俺は記憶しています。織斑先生、いや、千冬姉さんの住むこの部屋を撮影されたとしたら、結構なことになる

かもしれませんね。例えば、ネットに写真が掲載される可能性だつてあります」

「……………」

「その時、千冬姉さんのずばらな生活態度が一気に公になりますね。その後どうなるかまでは、俺も分かりませんが」

人間、自分の欠点を突かれると焦るものだ。社会からの評判がどうなろうと千冬にとつて知ったことではないが、今まで部屋に他の人間を入れなかったということは、少なからず部屋の現状を恥じているということである。

しかも、ここは天下のIS学園。千冬は、その気になれば寮の鍵などやすやすピッキングできる生徒の存在を——残念ながら、知っていた。

「さて、話を戻しましょう」

ここで戻ってきたか。千冬は自身の考えが当たっていたことを確信したが、しかしもう、丸め込まれた状態であった。

「俺、今泊まる場所がないんです。千冬姉さん、『住む場所の片付けぐらい自分でやる』んで、決着がつくまで部屋に泊めさせて下さい」

一夏の天使の微笑みを前に、ぶっきらぼうながら千冬は承諾した。こうして、一夏は千冬に、交換条件を呑ませることに成功したわけだ。

「んーじゃ、片付けを始めますか」

この学園の生徒としては始めて入室したことになるであろう——いやもしかすると、教員も合わせて初めてであるかもしれない——千冬の寝泊まりしている寮長室。

一言で表すのならば、そこは……

（通知表にずばら度を付ける項目があるなら、確実に最高評価だよな）

魔窟、であった。

そこかしこに散乱している書類、今朝脱ぎ散らかしたであろう服。食堂で食事がとれるおかげでインスタントフードの食べ散らかした跡などは流石にないが――千冬が一人暮らしであれば、多分インスタント食品のゴミもそこかしこに見受けられたであろう――その代わりとも言つべきか、コーヒーやビールの空き缶、それにビールのつまみの入っていた袋。

足の踏み場がないほどでもないが、見ず知らずの人間を呼べるような部屋でも到底ない。ゴミはゴミ、仕事に関係する物品は関係する物品とアバウトに場所が別れてはいるのがまた千冬らしいが、いずれにせよ。

（よくもまあ、こんだけ散らかせるもんだ）

一夏の思い浮かべた感想は、これに尽きる。

先ほど「最悪の状況を」と一夏は言つたが、もしこの部屋が公開され、そのうえで「生徒に飲酒を薦めていた」などというデマでも流れてしまったとしたら、それこそ最悪の場合で退職である。恐らく、生徒たちの方が総出で否定するだろうから、そこまでの事態には発展しないであろうが……。

女性なのだからもう少し気を使つたらどうだ、と千冬に言いたい一夏であつたが、言うべき対象である千冬は今ここにはいない。

先ほど一夏が彼女に見せたサイトを徹底的に潰すべく、今頃は学園の各所へと奔走しているであろう。

さて、どこからとつかかるか……部屋の惨状を一通り確認した一夏が思い悩んでいると、彼の携帯に着信が入った。

非常に、温泉に入りたくなるような、愉快的着信音。

一夏は部屋の入口を確認し、受信ボタンを押した。

『やーやーいっくん！ 首尾はどうだね？』

「……そうですね。いきなり携帯の着信音が変わって、驚愕してるところです」

ははは、と白けた笑い声を聞かせる一夏、しかし通話先の相手のテンションは下がらなかった。

『おおつ！　ということは束さんお手製の――』

「電波送信だけで相手の携帯のデータを書き換えられることは分かりましたけど、それをこんなことに使うのは束さんぐらいのもんですよ！」

『えへへ』

「誉めてない！」

たったの数十秒、いや十数秒で、一夏の氣力をこっそり奪って行く。この奇天烈な人物こそ――ISの開発者にして一夏の師匠である、篠ノ之束だ。

師匠、と一夏は呼称してこそいるが、束からすれば一夏は弟子というより『興味対象』である。研究者、詩人、画家、何に限らずその道を極めた人間は頭のネジがどこか抜けていることが多いが、この篠ノ之束は『自分が興味を持った人間以外、全てを有象無象とみなす』という、やはり一種の変人であった。

『そんなことよりいつくん！　さっきの電話で話していたことは、成功したのかい？』

「ああ、それなら――今、このとおりです」

携帯のカメラが急に動作を開始する。ただの無線電話が、いきなりテレビ電話へと機能を変化させた。もちろん、映像は束へと流れている。

『ふむふむ、これがちーちゃんの部屋かあ！　相変わらず……』

「汚い、つてのは言わないであげて下さいね」

束の口走ろうとした感想を一夏は遮る。自分で汚いと認識しているのに他の人間からも汚いと言われては、掃除に対してモチベーションが上がらないこと請け負いだからだ。

「もういいでしょーか？　後3秒でカメラは耳の穴へと移動しますよ」

『いつくんの耳の穴！　ハリーハリー！』

「駄目だこの人！？　つかフラッシュないから中は見えません！」
諦めて、一夏は画面に自身の顔を映した。向こうの映像は見えない

いが、

「と、まあ、目的の通り千冬姉さんの部屋に泊めて貰うことに成功しました。束さん、姉弟の絡みとかは絶対ありえないんで、盗撮用のカメラを窓の外に飛ばしたりしないで下さいね。お願いします」
『なぜバレた！　いっくん、いつの間に超能力の使い方なんて覚えただんだい！？』

電話越しに彼女がどういう表情をしているのか、そして大体何を考えているのかは、手に取るように分かった。

最も、一夏の心配は正直、無駄なものだった。彼女の手に掛かれば、大体のことは遊びの域で終わらせてしまう。

篠ノ之束とは、そういう人間だ。一夏がどれだけ盗撮をやめると言っても、彼女が盗撮を実行したければ勝手に行うのだろう。

「ま、俺が超能力を手に入れた経緯なんてないから置いておくとして……とりあえず、これから千冬姉さんの部屋を片付けなきゃいけないんです、失礼しますね」

『えーっ、えーっ、ちょっと待っておくれいっくん！』

「片付けが終わったら、改めて電話します」

それでも食い下がろうとする束だが、一夏は携帯の通話終了ボタンを押し、無理矢理ポケットに突っ込んだ。

直後に再び着信音が鳴り、今度は受信ボタンも押していないのに勝手に『あれ？　いっくん？　暗いよ！？　私に顔を見せておくれー！？』と通話を開始しだしたのだが、それに関して一夏は無視を決め込むこととした。

それから、およそ2時間後。

一夏の手によって、変貌した寮長室が、そこにはあった。

バラバラだった書類は全て系統別に分けられ（一夏がデータを見てもいいのかというちょっとした問題点はあったが、どうせ興味の無いものだし、と一夏は特別気にすることはなかった）一夏が使っていないなかったバインダーに挟まれている。

ゴミはプラスチックゴミ、金属ゴミ、生ゴミと分けられ、すでに袋詰め状態。後は捨てるだけである。

2時間では簡単な物品整理と目立つゴミの廃棄しかできなかったが、部屋の中を撮影されて汚れた部屋が見られるという心配もないだろう。

——そもそも、最初っからそんな心配を、一夏はしていなかったのだが。

一夏の携帯が、再び鳴る。そして、一夏が取り出す前に、それから『いつく——ん！』と声が響いた。

「もしもし束さん、やっぱり監視してますね？」

『そ、ソナコトナイ……よ』

「片言になるぐらいなら、堂々と胸を張って言った方がいいです」

『監視してるよ！　ぶいぶい』
びっ。

条件反射で、一夏は携帯の電源を切った。

だがしかし、再び電話から声が聞こえはじめるのは、それからたった2秒後のことであった。

『うつ……いつくんがいぢめる』

「はいはい……どうせ監視カメラぐらい、とつくの昔に設置してると思ってましたから。今更気にしませんよ」

再び、一夏は苦笑いになる。束と話していると呆れることが多いが、一夏の苦笑いは最早半固定化されたものとなっていた。

しかし、それもあくまで束に一夏が振り回されている時だけの話である。すぐに一夏は苦笑いから、平常時の人懐こい顔に戻った——

「それより、千冬姉さんがいない今のうちに話しておきたいことが——」

『んん？　ちーちゃんを説得するために作ったニセモノサイトのことかい？　あのぐらいなら、右足一本でちょちよいのちょいちょいだよ』

「右足一本って……ああ、ISが使えるようになったから、今度か

らは俺も宙に浮いたまま足でタイピングできるんだっただか」

『そーそー！　いつくんも、作業効率を上げるために、覚えておい
て損はないよお』

——瞬間の、爆弾発言である。

千冬が今必死になつて消そうとしているサイトは、一夏が束に協
力を要請して作成してもらったものなのだ。

確実に、千冬の部屋に泊まれるように。

確実に泊まるための手段が「嘘も方便」の一言で身内を騙す方向
へと走っている分、もしかすると一夏の頭も多少ネジが緩んでいる
のかもしれない。

ばれたら、大惨事どころでは済まないだろう。だがしかし、いか
に片手間、いや片足間で作成されたものとはいえ、サイトは束のお
手製である。

堅固なセキュリティを誇るはずのIS学園を容易に監視するほど
だ、IS学園からサイトをどれだけ調べようと、束、そして一夏に
疑いが掛けられることは決してないだろう。

すぐに文字入力のことへと話題が移ったのも、心配する必要のな
い話をどれだけしようと無駄という考えの元であった。

「頑張つてはみますけど、球体キーボードも俺は苦手ですしねー…
…慣れるのに、どれだけ時間が掛かるか」

『ええ、駄目だよ！　キーボード打ち込む時間って、結
構長いんだよ？』

「んー……まあ、束さんのスピードに、平面キーボードで追いつく
のは難しい、というより無理ですかね。うん、まあ、今回俺が残り
を仕上げるISぐらいなら、きっと平面キーボードでも十分です」

3 - 2 世界情勢はルール厳守

『おおっ！ やる気マンマンだね？』

「はい、いずれにせよ俺が引き取らないと、次のステップに進むどころか第一ステップを踏むことすらできないですからね」

一夏がほんの少し前に偽装サイトを作成してくれと頼んだ時、それとは別にもう一つ、彼が束に頼んだことがあった。

それは、第との決闘よりも前にできた用事——自身の専用ISの制作を、一時的に中止にしてもらうこと——が、関係している。

『それにしてもいつくん、束さんお手製のISを蹴るだなんて、私もびっくりしたよ』

「俺としても、束さんが手がけたISは見てみたかったですけどね。ただ、やっぱり他人に迷惑を掛けっぱなしっていうのは、性分じゃなくて」

『全く、企業つていうのは面倒だよね』

一夏が束に頼んだ、千冬を騙すことより優先した願い。

それは、『作成途中の自分の専用機で未完成の残りの部分は、自分の手で完成させたい』というものだった。

そもそも、なぜ目標が『一時凍結』から『自身のIS作成』になったか？

現在、倉持技研では束の大胆な介入の元、「常軌を逸している」と周囲から揶揄されるほどの急ピッチで一夏の専用機の開発が行われている。

製造開始日はつい数日前だというのにも関わらず、その現時点での完成度は既に6割強。普通のISであれば製造後にトライアル、不具合が生じた部分を再調整、再びトリアルと繰り返しという点を見れば、確かに周囲の揶揄は間違っていない。このスピードでの製造が成立するのは、ひとえにISを知り尽くした束のおかげと言

えよう。

そして、世界最高の技術者が参加する以上はもちろんのこととも言えるが、倉持技研がこのISの製造にかけている費用も莫大なものだ。ここらへんは束が制作に参加するのみでなく、『世界で唯一、男性IS操縦者のデータを直接受け取れる』ことが出費以上のメリットに繋がるおかげで事なきを得ている。

さて、現状でここまでオーバーワークを続けている現在の段階で、一夏の専用機制作を急に一時凍結などしたら、どうなるだろうか？ 急激に莫大な費用を注ぎ込んだというのに、その費用分の利益が企業に戻って来ない。研究員が冷や飯喰らいになる以前に、これでは企業自体が傾く危険さえ孕みかねない。

つまり、費用に合った分の見返りがない交渉は、企業側から受け付けることは不可能である、といえる。束が無理矢理脅すこともできなくはないが、そもそも倉持技研は一夏が就職しようとしていた企業。悪い噂が立ってしまったら、将来の一夏に不都合が生じかねない。

他人がどこで何をしようがとことん無頓着な束であるが、こと自分の興味対象が相手となればとことんまでその相手に入れ込むのだ。結果として、ここで費用を使い切られては簪の専用機製造が結局上手くいかなくなり、かといって凍結をすることは不可能という状況が出来上がる。

費用を使い切られず、しかも一夏の搭乗データは可能な限り早急に入手できる方法。一夏が一番最初に思いついたのは、残りの製造を他の企業に移すことだった。

しかし、それでもことが円満に解決するとは言いがたい。なぜなら、倉持技研が見込んでいる利益は、あくまでも男性の搭乗データを『独占的に』入手できることを前提としているためだ。

せつかく6割強も自社で作り上げておきながら、残りの3割弱を別の企業に任せ、それでいてデータの入手権はどちらの企業にも平等に生まれる。どれだけ一夏と倉持技研に繋がりがあろうと、これ

は見過ごせるものではない。

となると、『利益は求めず、かといって技術はある程度提供できる相手に制作を任せる必要』が出てきたのだ。そんな便利な場所があるわけがない。

その解決策として束が提唱した意見こそが、『それなら、いつく
んが残りを作っちゃえば』だった。

確かに、IS学園の設備であれば、最悪1からISを作成することすら不可能ではない。

このような経緯があり、一夏はISの残りの部分の自力制作を束に（その本人に後押しされる形で）願ったわけである。

「そもそも、束さんが無理矢理介入しなければ、こんなことにはならなかったんですよ？ 俺のISを作ってくれようとしたのは確かに嬉しいですけど、だからって人に迷惑をかけすぎないで下さいよ！」

『えー、だって、興味ないじゃん』

ふう……。電話越しに、一夏は深いため息を（わざと）束に聞かせた。

「ま、とにかくです。コアの実権を握ってるのはどうやら束さんみたいですから、そこらへんの細かい手続きは束さんに任せます」

『任せとけ！ なんなら今から書類記入もぶっ飛ばして最速で』『他人に迷惑をかけるなって言ってるでしょーがああああああ！』

思わず、大声で叫ぶ一夏。直後に、ここが『本来自分がいるはずのない』寮長室であることを思い出し、慌てて廊下を確認する。どうやら誰もいないらしく、一夏は胸を撫で下ろした。

『耳がキーンってする……。ううう、周りの音が変に聞こえるよお』『……とにかく、任せました。信用してます』

『信用された！？ おーけーおーけー、任せてくれたま』『ピッ。』

多少酷い、以前にそもそも師匠と弟子なんていう関係性は一切漂

わせぬまま、一夏は携帯の電源を切った。そして、

「……全然耳、大丈夫じゃないか!!」

再度、廊下に人がいないことを確認して、もう一度大声で突っ込んだ。

もしかしたら未だに自分を見張っているかもしれない束の盗撮用カメラに、叫びが届くように祈りながら。

そして、翌朝。

千冬の部屋で寝泊まりを始めた一夏に、寝坊など許されるはずがなかった。

寝ぼけ眼を擦りながら、現在は朝食の途中である。今日のメニューは味噌汁、おひたし、焼鮭、白米、それになぜかフルーツポンチ。

「それで、織斑くんは結局、お姉さんの部屋で寝たんだ……」

「ふああ……うん、そういうこと」

「昨日の決闘の負け方は、それはもう酷いものでしたのよ」

「オルコットさん、それ、言うか普通？」

昨日と違うことといえば、『当事者』——いわゆる、今現在一夏が直面している問題の関係者と食事をとっているということだ。

同じ徹を踏まぬよう、一夏は昨晚のうちに2人に朝食の誘いを掛けておいたのだ。

私の強いセシリアと今のところIS制作に心血を注いでいる上に内向的な性格の簪はこれを快諾。今に至るわけである。

「大丈夫、織斑くんが弱いこと……私も、知ってるから」

「グハアッ!？」

「わたくしも弱いとはお聞きしていましたが、想像以上でしたわ」

「やめて!？ 何で朝からゴリゴリとプライドを削られて行かないやいけないんだ!」

……当事者がいるとはいっても、していることは昨日と変わらな

い雑談であるが。

「しかし、専用機を手に入れるってことは、運動の方もサボっちゃ駄目なんだよな。モヤシっ子みたいな烙印を押されるのは嫌だし。

簪さんも座学ばかりに見えて、予想以上に運動もできるんだよな」

「うん……国の代表としてISを使う以上、ね」

「もちろん、イギリスでも同じく、ですわ」

ISは、戦争に利用することができないと世界中で——アラスカ条約、という条約によって——決められている。

ISの性能は現存する全ての兵器の性能を軽く上回るものであり、それが戦争に利用されたら単純なISの総力戦と変わらないものになってしまうためだ。

『どうせ本当の戦争になれば、そんな条約さつさと破って捨てられる』という世論もちろんあるが、ISを戦争に利用した時点で他のIS所持国から確実に狙われるというバランスの元、この条約が現時点で破られた記録はない。最も、IS自体がまだ開発から10年ほどであるが。

現状、ISは競技スポーツの一種として、各地で大会が開かれている。

しかし、だからといってISは軍事利用されないか？ その答えは、もちろんノーだ。

使われないとは言っても、ISが強力な抑止力となることは間違いない。更に、現状で禁止されているのはあくまで戦争に対する利用のみ。

証拠に、広域殲滅と燃費をとことんまで追求した軍事用ISはこれまでに何度も開発されているし、ISを所持する各国は空軍や陸軍に『IS部隊』をほぼ確実に設置している。

ISを持つということは、同時に一般人とは比べものにならない責任を負うことと同義なのだ。

そのような責任を負う者が脆弱であつたら、どうなるか？

例えば、IS操縦者が無防備な時に命を狙われたとする。この時

に自衛ができればおそらく、操縦者が殺された上で暗殺者の側——例えばテロリストなど——に、ISをタダで渡すことになってしまう。

結果として、ISを所持する可能性がある国家代表及び国家代表候補生は、漏れなく過酷な訓練によって身体を鍛えているのだ。

「俺は日本のコアを使っているとはいえ、男性であるという特殊性を利用して今のところこの国の代表にも候補生にもなっていないかな。逆に言えば、どういう訓練をしているのかが分かりにくい。そこらへんは、多分泌匿情報だろ？」

一夏に尋ねられ、簪とセシリアはコクリと頷いた。

「じゃあ仕方がない。千冬姉さんにでも聞くか」

「私を呼んだか？」

いきなり背後から声が聞こえたので、一夏は慌てて後ろを向く。

「な、何で千冬姉さんがここに？」

すぱーん。出席簿が一夏の頭にヒットする。

「勤務中は織斑先生だ。寮長の私がここにいて、何がおかしい」

「いや、おかしくはないですけど、そんな驚かせるような登場しなくても……いやそれより、わざわざ来たってことは何か用事があるんじゃないですか？」

一夏に指摘されて、「ああ、それだ」と千冬が書類を取り出す。

どうやら図星だったらしい。

「どうせ休憩時間は、作業に没頭するだろうと思ってな。ほれ、今のうちにこれを書いておけ」

そう言つて千冬が一夏に差し出したのは、マル秘のマークが押された書類だ。

他の誰にも見られないようにしながら内容を確認していくと、それはコアの受け渡しに關しての書類だった。

「朝渡してくればよかったんじゃない……？」

「今朝送られてきたんだ、文句を言つな」

「書類1枚でこれって、少なすぎないですか？」

「馬鹿者、書き終わったら次を渡していくに決まっているだろう」
なるほど。理解した一夏は、すぐにペンを取り出す。

そして書類を手に持ったまま記入を始め、それからすぐに書くのをやめた。

「織斑先生、書きにくいです。ここの2人は事情も知っているわけですし、机に置いて書いていいですか？ 授業までに書き終えられる気がしません」

「ふむ……更識は問題ないが、オルコットは駄目だな」

「わたくしだけが駄目となると——ああ、そういうことですわね。了解しましたわ」

「誘ったのは俺なのに、悪いな」

「そのぐらいの分別もつけられない子供じゃありませんわ」

食べかけの朝食が乗ったトレイを持ち上げ、セシリアは別の席へと移動した。

一夏が書類を机に置き、再び記入を始める。

「そういえば、更識もIRSを引き取ったそうだな？」

空いた席に腰掛けつつ、千冬が聞く。

「は、はい」

「この慌ただしい時期に外部から2つもコアを受け取るハメになるとは、流石に考えていなかったぞ？」

「す、すいません……」

「織斑先生、書類がマル秘である意味をなくしてませんか？ はい、一枚目です」

「事実自体を隠す必要は別にないさ。ほら、2枚目だ」

周囲の女子が「何か書類みたいなもの書いてるけど、何事？」と近付いてくるが、千冬が眼光でその全員を威嚇していた。

「なに、怒っているわけじゃない。そう硬くなるな」

「怒ってなくても織斑先生は怖——いつてえ！」

一夏の頭に、再び出席簿が炸裂する。下手な方向に頭を動かして書類への記入をミスしてしまうようなことがないよう威力が調節さ

れているのが、無駄に凄かった。ということを一夏が考えていたら、さっさと書けと再び殴られた。

「とにかく、だ」

一夏が書き終えた2枚目の書類を受け取りつつ、千冬は続ける。

「あの馬鹿に——束に振り回されるようで、悪かったな」

「い、いえ。その、織斑くんも、手伝うって言ってくれてますし……」

顔を僅かに赤らめる簪。それを見て、千冬が少しだけ口角を吊り上げた。

「そうか。ま、倉持技研への交渉が駄目になったとしたら、その時はこき使ってやれ」

「織斑先生それ俺が決めることじゃ痛ア！」

「お前は記入している」

脳細胞をどんどん出席簿に死滅させられてゆく一夏を横目に、簪は頬の赤いまま「はいっ！」と、力強く頷いた。

簪さんも元氣よく返事するな！？　と言おうとした一夏だが、どうせまた出席簿による手痛い一撃を喰らうのだろうと考え、やめておくことにした。

結局、一夏が全ての書類を書き終えたのは授業開始の10分前であつた。

遅刻するなよ、と釘を刺された一夏は全然手が付けられていなかった朝食を掻き込む——噛む回数も少なく、一夏自身が謳う健康な食べ方など、微塵も感じられなかった——が、それでも授業には間に合わず、一夏は千冬に5度目の攻撃を喰らうのだった。

そして、同日の夕方。

簪の専用機を倉持技研に返却しても制作が進まないという連絡が、彼女の元へ届いた。

3 - 3 結局あの人はアレがソレ

「……まさか、簪さんにコアを送った時点で、倉持技研のほうでは完全にプロジェクトを中止にしていた、とはね」

夕食の席。

座っているのは、一夏とセシリア、簪。朝と違わぬメンバーだったが、そのうち2名——一夏と簪の表情は、明らかに優れないものだった。

けれど、それも当然であろう。彼ら2人の手回しは、結果として完全なる失敗に終わったのだ。それどころか、一夏の専用機の受け取りが確定している以上、改善するどころかむしろ状況は悪化した。この状況でもしも喜んでいたら、精神に異常をきたしているかもしれない、と疑われること間違いなしだ。

「私が早まって受け取ってなければ、問題なかったんだよね……」

「それを言うなら、俺がもう少し早く動いてりゃ、費用が高むゆえのプロジェクトの完全停止だなんて事態にはなってなかったかもしれない」

はあ……と大きく息をつく2人。

嗜め役はもつぱら、というよりか全てセシリアだった。

「まあまあ、お二人とも。出てしまった結果に今更どうのこうのと言っても、何も始まりませんことよ?」

「うん……とはいえ、的確に行動できてれば発生し得なかった問題だからな。自分で言うのもなんだが、明らかに未熟だったよ」

「だね……」

「ですから、またそこで溜息を吐かない! それより、今後どういう予定で動いて行くかを考える方が重要でしょう!？」

2人から溜息が漏れるたびにセシリアが嗜めるのだが、それからたっぷり15分、一夏と簪のネガティブ状態は続いた。

その間、やはり食事には一切手がつけられない。どうやら、今日

も一夏は冷めた食事を頂くことになりそうだ。

最終的に、一夏の「ま、2人してずっと落ち込んでても仕方ない！」と、セシリアがそれまでに何度も話したこととあまり変わらない発言でどうにか、2人——もちろん、セシリア以外のことである——も現状に区切りを付けた。

「——んじゃ、ま、これからの計画を立てますか。よっと」

皿をどけて、一夏がノートを取り出す。

1ページ目を開くと、文章がびっしりと記入されているページが3人の目に飛び込んできた。「やばっ！」と声を上げ、慌てて一夏はノートを閉じる。どうやら、開くノートを間違えたようだ。

「見えた？ 見えてないよな？」

慌てて確認すると、簪はすぐに「大丈夫、見えてないよ」と返答する。ところが、

「ごめんなさい、わたくしは最初の方……手動介入システムがどうこう、と書いてある部分から少しだけ」

セシリアは多少だけ読んでしまったらしく、申し訳なさそうに一夏に返した。

「……どういうシステムか、まで読んだ？」

「いえ、一瞬でしたのでそこまでは読んでませんわ」

ほっと、一夏はとりあえず安心した。

このノートに書いているものは、一応『企業秘密』の内容だった。もし中身を完璧に見られてしまったら、一夏としては冷や汗どころでは済まない。

閉じたノートを持ってきていたバッグにしまい込み、次はしっかりと中身を確認してから、同じ表紙ノートを開く。

つい昨日、今と同じメンバーがいる中で、一夏がこれからの行動予定を書きなぐったノートである。

「ええっと、それじゃあ現状を確認しよう」

ポケットからペンを取り出し、一夏は記入を始めた。

その1、現状について。

一夏の専用機、一夏が作ることに。
簪の専用機、簪が作ることに。

「……あれ、倉持技研、働いてなくね？」

「織斑くん、それ、書き方が悪い……」

簪が、一夏のペンを右手から引ったくった。

一夏の専用機、一夏が作ることに。（現時点での完成度は最低でも6割強、コアに関しては篠ノ之博士のものか、もしくは倉持技研のもの）

簪の専用機、簪が作ることに。（倉持技研の買い取ったコアを使用、完成度は現時点でおおよそ2割）

書き足された注釈で、一夏はなるほどと納得した。正確に書き出せば、確かに倉持技研はちゃんと働いている。

「それで、この2割と6割強を分けて作った時点からでは、簪さんの専用機を戻してしまうと倉持技研の側は赤字を抱えることになる」と

もしも一夏のISの製造が急激に進められたものでなければ、黒字になっていたかもしれない。少しだけそう考えた一夏だが、倉持技研の予算配分がどうなっているかを掴むことができないため、机上の空論だったなと思い直した。

「……んで、俺は簪さんと違ってあちらの不手際が理由でコアを送ってもらったわけじゃないから、もうすぐ送られてくるコアを送り返すっていう前提自体が成立しない。ひとつ無理を言った上で更に無理を重ねるのは、まあ不可能だな」

どちらも返送不可能、とノートに追記される。

「あれ？ 結局技研のほうはこれ以降、ただただ寝て待て状態なんじゃないか？」という一夏の指摘は、今度は誰も言い返さなかった。

「って、皮肉はどうでもいいんだ。それより問題はこれに平行した内容、だよな」

「ですわね。5月にはクラス対抗戦がありますし、それまでにクラス代表を決める必要がありますもの」

クラス対抗戦。1年生の各クラスの代表同士によって行われるリーグマッチである。

入学からまだ1ヶ月しか経っていないという時期に行われるこの試合には、交流、競争心の向上、及びある程度の実力指標を作るという目的がある。

実際の生徒の関心は、そんな本来の目的より、各クラスがやる気を出すためという理由で出される副賞、学食のデザートの半年間フリーパスにあるが――。

ともかく、1ヶ月。

それが、一夏がIS制作に充てられる精一杯の時間。一夏はそう判断した。

うーむ、と一夏が唸る。

「送られてきた順番として考えれば、簪さんの機体を完成させてから俺の機体の制作に取り掛かる、っていうのが妥当なんだけど、それで1ヶ月だと間に合うかどうか、ってーのが問題なんだよな。かと言って、俺の機体を優先して作ったとしたら、今度は簪さんがクラス対抗戦に間に合わなくなる。4組で専用機持ちの肩書きがあるのって簪さんだけだし、簪さんがクラス代表だろ？」

うん、と簪は頷く。

その2、問題点。

どちらかのISの制作を優先すると、もう片方のISの制作がクラス対抗戦に間に合わない可能性あり。

はあー。一夏が、思わず天を仰いだ。

「クラス代表に『仮』とかあれば、対抗戦はオルコットさんに任せ

てそれから決めるって荒業も可能なんだけどな。ない物ねだり、か」
「でも……」

「でも？」

「私は、一応対抗戦までは余裕があるけど、織斑くんの方はそれより前に期限が来ちゃう、よ……？」

「え？ クラス対抗戦一日前までに決めれば、なんとかなるんじゃないか？」

一夏が問い掛けると、簪ではなくセシリアが答えを返した。

「あなた、練習期間とか、考えてます？」

「あつ！」

自身の失念を、一夏が悟る。

確かに、専用機の作成期限自体は、簪と1日程度しか変わらないだろう。

しかし、『セシリアに素人をいたぶろうという感情などはない』し、『ISはマグレが簡単に通用するようなものではない』。一夏は、自身が専用機を作った後、それに自分が慣れる——最低でも、フォーマットとフィッティングは終わらせ、ある程度ISの操縦ができるようになる——期間が必要である。

そして、もしもクラス代表に一夏が選ばれたとすれば、その後も更に練習を積み重ねる時間を要するだろう。

「わたくしが負けるつもりはありませんが、かと言ってあなたに絶対に勝てるなどという過信をするつもりもありません。即ち——」

セシリアの言葉の続きを、今度は簪が引き取った。

「織斑くんのISを完成させるのが先、だね」

自分を置いてとんとん拍子で決められた内容に、一夏嵌めを丸くした。

「……簪さんは、それでいいのか？」

「うん、大丈夫」

「……分かった」

その3、最終判断。

とりあえず、一夏のISを先に完成させる。

ノートの上に、結論が書き出された。

「それじゃあ、頑張ろ？ 私も、手伝うから……」

えっ？ 簪の言葉に、これまた一夏は驚きの声を上げた。

「待って、いくら俺が急ぐとはいえ、簪さんだって作らなきゃいけないISがあるんじゃないのか？」

「……私と織斑くん、得意分野が違うんだから、2人で作った方が早く完成するもん」

「いや、でも——」

続きを言おうとした一夏を遮り、簪はニコリと笑う。

「でも、代わりに……織斑くんも、私のISを作るの、手伝って？」

簪は3割弱の手伝い、一夏は8割ほどの手伝い。比率としては、明らかに一夏の方が損をしている。

しかし——そんな些細なこと、一夏にはどうでもよかった。ただ、「分かった、それじゃあ、お願いします！」

「うん。それじゃあ、届き次第作業開始、だね」

2人ともが打算抜きでお互いに頼れる存在同士である、それだけだった。

IS学園は、ISに搭乗する人間を育成するだけの場所ではない。ISに携わる人間、その全てを育成する場所だ。

そして、ISの国家代表であったり代表候補であったり、そうでなくとも企業のテストパイロットのみがISに携わる仕事である、ということもない。ISの整備、開発、武器開発——それらも全て『ISに携わる仕事』なのだ。

そのためIS学園は『整備科』が設置されており、ISの戦闘以外の面を学ぶ場所、及び学園のISを調整する場所として、学園にはいくつかの整備室があった。

冷めた料理——冷ましたのは一夏達本人であるが——を食べ終わった一夏が現在いるのは、整備室である。簪とセシリア、それと千冬が同席している。

第三整備室。「とりあえず現在使われていない整備室」を適当に選んだため、部屋の番号を一夏は確認していない。そもそも、使用手続きすらともに踏んでいない。

本来であればここまで勝手な使用は認められがたいのだが、千冬の同伴、それに何より緊急の用件が発生したため、無理を言って使わせてもらっている状態だった。

「……流石に、早すぎる」

一夏の前には、未完成のISが置かれている。

未完成のISといえば簪の機体である。それ以外に、未完成のISは学園にはない。

しかし、一夏の目の前にあるISは、簪のものではなかった。

「あの馬鹿、よりにもよって当日に無理矢理配送させるとは……」

「ちよつと、束さんに連絡してみます」

頭痛を引き起こしそうな頭を押さえる織斑姉弟。しかし、現在この第三整備室にある機体のことを考えれば、仕方がない。

そこにあるのは、本来であれば2、3日後に届くはずの、一夏の専用機だった。

——およそ、30分前。

食事中的一夏達は、「とりあえず、飯を食い終わったら簪さんの機体の現状を見に行こうか」という話をしていた。

しかしそこへ、1年1組副担任の真耶が登場したことにより、その予定は崩れることとなった。

このとき真耶は、一夏に「何やら荷物が届いたとのことなので、食後に事務室まで確認に行ってください」といった内容を伝えた。

この時点で、一夏は妙に嫌な予感を覚えたが——荷物を無視する

ことも不可能だ、ということ、食後の予定は迷うことなく荷物の受け取りへと変更になった。

そして、食後。事務所へ向かった一夏は、自身に届いた――

「ええっと、確か……書類記入が、今日でした、わよね？」

恐る恐るといった口調で、誰にとはなくセシリアが尋ねる。

その質問に対して返事はなかった。なかったが、沈黙がむしろセシリアの肌には痛かった。

「おい、織斑」

「はい、織斑先生」

「ISは即日運送してくれと、あの馬鹿に頼んだか？」

千冬に聞かれて、昨日の会話を一夏が思い出す。

――「ま、とにかくです。コアの実権を握ってるのはどうやら束さんみたいですから、そこらへんの細かい手続きは束さんに任せます」

――『任せとけ！　なんなら今から書類記入もぶっ飛ばして最速で』
確かに、書類記入はぶっ飛ばしていない。今朝、食べる時間も惜しんで大量の書類に必要事項を記入した記憶が、一夏には確かにある。セシリアも覚えているのだから、間違いないだろう。

しかしおそらく、様々な利権が絡んでくるはずのISコアがここまで早く届いたのだから、『書類記入をした上での最速スピードで』送られてきたのだろう。

結論。

「俺は頼んでないというか、人に迷惑を掛けないうでさといって言いました」

「その言い方をするということは、あの馬鹿は迷惑を掛ける気満々だったということだな？」

ですね、と一夏が肯定すると、千冬の額に青筋が立った。「あんの馬鹿者……」と呟く彼女を見て、セシリアは「いつも教室で生徒を怒る千冬」がいかにか手加減した怒り方であるかを、否応なしに理解することとなる。

あまり千冬と接点がない簪でさえ、滲み出る怒気に怯え、嵐をやり過ぐす森の小動物のように身体を震わせていた。

「一夏！ 携帯を貸せ！ 今すぐ、あいつを引きずり出す！！」

3 - 4 全ての道は完成に通ず

「……ごめん、電話掛けてみたけど出ない」

既に携帯を開いていた一夏が、申し訳なさそうに——ではなく、どちらかと言えば残念そうに言う。

生徒教師間の関係を保っている時は敬語を使用する一夏だが、千冬が自分を名前で呼んだ時点で『今はプライベートである』と彼は認識したため、珍しく話し方が姉弟のものになっていた。

「嘘をつけ！ あいつは睡眠時間でもない限り、お前の呼び出しにすぐに反応するだろうが！」

「……本当に出ないんだって」

疑いの目を向けられ、一夏は慌てて千冬に携帯の画面を見せる。

それからもう一度束の番号へと発信するが、一夏の言った通り繋がったのは留守番電話サービスセンターだった。

「……ふむ」

留守番電話サービスセンターのアナウンスからどれだけ経過しても、携帯の画面が変化することはない。

そして一夏が通話を終了しても、束から連絡が来ることはなかった。

動作すべてを目で追っていた千冬だが、どう頑張ろうと束と今通話することは無理だと、最終的に悟ることとなった。

「まあいいさ。機会はいくらでもある」

口角を吊り上げる千冬だが、いまだに青筋が収まっていない。「私はまだ用事がある。とりあえず今日明日はこの整備室は空いている」を最後の言葉にして、あまり安穩であるとは言えない雰囲気を残したまま、部屋を出て行った。

千冬のが感情が見事に崩れる様を呆然と女子2人が見つめる中、一夏が1回大きく手を叩く。

はっとして2人が振り返ると、その瞬間に——「電話だよ！ 電

話だよ！　ぷりてい束さんから電話だよ！」——一夏の携帯から、得体の知れない着信音が響いた。

いや違う。得体の知れない、という表現は間違っている、と簪は思った。明らかに、今の着信音は、人物名を発していた。

最も、人物名を発していようが得体が知れないことに代わりはない、というのがセシリアの考え方だったが。

「2人とも、勘違いしないでくれよ。これ、無理矢理ハッキングされて着信音変えられてるんだ——もしもし」

一夏が電話に出る。そして、話をしている隙に、セシリアは簪へと話し掛けた。

「……あの電話の相手、本当にあの篠ノ之博士なのでしょうか？」セシリアは明らかに、疑いの目を向けている。

しかし、簪としても質問に答えることはできなかった。

「飛ばした監視カメラで、千冬姉さんがいなくなるの見てたんですよ？　全く、心臓に悪いですから止めてくださいよ」

彼女達からしてみれば、世界中から指名手配を喰らっている『あの』篠ノ之博士である。少なくとももう少し威厳がある人物像を思い浮かべるのが道理であろう。流石に、『ぷりてい束さん』などというコールは、一夏の悪ふざけにしか思えないのだ。

「んえ？　……はあ、確かにスピーカーホンにはできますけど——珍しいですね、束さんが見たことすらない人と話をしようだなんて——無論、悪ふざけにしか見えない以上は電話先が本当に束博士だとは思えないのだから、電話先の相手と会話することになるうとも、セシリアと簪がドキリと心臓を跳ねさせることなどなかった。

「えええっ！？　話せるの？　織斑くん、それ本当に！？」わけがない。

「うん本当に」

心臓がドキリと跳ねるところか、バクバクと高速で脈を打ちはじめのほどだ。

人間の性格がそのまま知性と釣り合ったものになるなど、ありえ

ない。怪しいというのは、あくまで勝手に束の理想像を思い描いたセシリアや簪の思い込みに過ぎないのである。

そして、一夏と箒が幼馴染であること、それに箒と束がどちらも珍しい篠ノ之姓であることを踏まえれば、一夏と束が知り合いであるという話には筋がきちんと通っている。まして今は一刻を争う状況、一夏がわざわざ嘘をつくデメリットはどこにもない。

結論として、簪は雲の上の存在である束が自分達に何を話すのだろう、と、ひたすらワクワクした。

一夏との付き合いは短い——というより、正確にはおちやうけた部分を見ている時間の方が長いセシリアは簪ほど一夏を信用してはいないが、しかし束という名前のインパクトは強く、やはり緊張で生唾を飲み込んだ。

「えーっと、反論は出なかったんで、スピーカーホンにします。いつも人と話す時みたいない対応をしたら、その場で通話切るんでそのつもりで」

束に何やら釘を刺してから、一夏が携帯のボタンを操作する。

プツリとシステムの切り替わる音が携帯から聞こえ、そしてスピーカー状態となった携帯から極小の砂嵐のような音が聞こえはじめた。

『うんうん、確認したよ。さてさてそこにいる2人の女子!』

「は、はいっ?」

セシリアと簪が声を重ねて返事をする、一夏が軽く苦笑した。

「2人とも。スピーカーホンってあつちの声を全体に聞かせるものであって、こつちの声を全部拾うもんじゃないよ」

「あつ……」

向こう側の声を大勢で受け取るためにスピーカーという名称がついているのだ。そんなこと、常識である。自分達のミスに、2人は恥ずかしさから頬を赤くした。

『んー、テレビ電話にすればそっちと会話できるけど、私はいっくん以外に興味ないしね! おっといっくん、これでも結構オブラー

トに包んで言ってるんだよ?」

終了ボタンに指を掛けていた一夏が、軽く舌打ちしながらその指を外した。

『さてそれじゃ、早速話に入るよ!』

「確かに急いでるっちゃ急いでるけど、自己紹介ぐらいしたらどうですか!」

『えー、だってめんどくさい……ごめんなさいいっくん! ストツプストツプ! 電話切っちゃダメ!』

「織斑くん、大丈夫、相手が誰かは分かってるんだし……」

『ほらその水色の子だつてこう言ってるじゃないか!』

「見えてるし聞こえてるのかよ!」

再び、この場にいる女子2人は、電話の相手が本当に束なのか心配になってきた。

確かに、IS学園の警備体制を見事に無視してこちらの人数を把握するその手腕は、天才という称号に相応しいものなのだろうが——
(……どうしよう、やっぱり、ただの素っ頓狂な人にしか見えない)
(同感ですわ……)

2人してこんなアイコンタクトを交わしてしまうほど、電話の相手は『変』だった。

そして、3分後。

『さてさて、ジャブも終わった所で、そんじゃーそのISについて説明しちゃうよ! 耳の穴に補聴器4つつけてよく聞きたまえ!』
ひとしきり一夏とのコントが終了し、束がようやく用事を切り出した。

既に、一夏は突っ込み疲れて憔悴し始めている。精神労働が肉体労働と同じ代償を与えるならば、今頃一夏は肩で息をしているだろう。

『まず、そのISで既に完成してる部分を教えるよ——』

翌朝、6時半。

いつもであれば起きていないこの時間、既に一夏は目を覚ましていた。

今現在一夏がいる場所は、昨日ISを運び込んだ第三整備室である。机の前に座り、両腕ではせわしなくキーボードをタイピングしていた。

「ふあ、あ……」

横で欠伸が聞こえたため、タイピングはそのまま、一夏は視線だけ左側に移す。

ちょうど、簪が包まっていた毛布から抜け出したところであつた。

「ん……織斑くん、おはよ……」

「おはよ。もしかして、キーボードの音が五月蠅かつた？」

「んーん、大丈夫……」

「ごしごしと簪が目を擦る。」

一夏と簪の2人は昨日、この整備室に泊まったのだ。

昨夜、束からISの完成具合——もちろん、一夏以外に聞かせられない内容は省いて、だが——を聞かされた彼ら（お嬢様気質であるがゆえに部屋に帰って寝たセシリアも含め、合計で3人）は、早速ISの作成に取り掛かった。

部屋に戻るのを面倒臭がつた一夏と簪は、見回りに来た教師を説得し——説得というより、圧倒的な集中力で作業を進めていたがために、見回りに来た教師の話を総スルーして根負けさせたというのが正しいが——、整備室で寝るギリギリまで作業を続けた。

「とりあえず、一旦部屋に戻ってシャワーでも浴びてきなよ」

「うん、そうする……」

皺の入った私服を身につけ、簪は整備室を出ていく。

簪が出ていったところで、今度は一夏が大きな欠伸をした。

その目の下には、薄くクマが作られている。——一夏は、昨夜から徹夜で作業を続けていたのだ。

これからちよつとしたら授業、ここで眠るわけにはいかない。

眠気覚ましに軽く背伸びや体操をしていると、簪が制服に身を包んで戻ってきた。

そして、入室直後の第一声で、「織斑くん、今日は休んだら？」

と言った。

「そりやまた、どうして？」

「どうしてもこうしても、織斑くん寝てないでしょぎく。」

寝ぼけた状態の彼女にはばれなかったが、完璧に目覚めた状態の彼女にはすぐに、徹夜明けであるということがばれた。

「な、なんのことカナー」

「……棒読み以前に、昨日オルコットさんが持ってきた毛布に折れ目を入れるぐらいしようよ」

何とか言い返そうとするも、一瞬で証拠を提示されてしまつてはぐうの音も出なかった。まさか、気遣いがそのまま着眼点にされるとは、一夏も考えていなかった。

「ん、まあ徹夜は慣れてるから」今更毛布を丸めながら、一夏が笑う。「それに、そもそも授業自体が出席日数稼ぎみたいなもんだし……それでも、1時間ぐらい仮眠を取っておく程度は、したほうが――」

ボタンと大きな扉の音が、簪の台詞を妨害した。
入ってきたのはセシリアだ。

「おはようございます。……本当に、この部屋で寝たのですね……」

「おはよう、昨晚は毛布ありがとうな」

今丸めていた毛布を、再び綺麗に畳み直して、セシリアに渡す。

「……？ 使っていない毛布を、どうして丸めていたんですの？」

「えっ……」

「どうせ、一晩中IS作成に没頭していたのでしょうか？」

なぜだ、なぜばれる。セシリアにも見抜かれていたことに一夏は首を傾げた。

そんな一夏は、自身の指が無意識に空をタイピングしていることに気付いていない。セシリアも簪も、苦笑いするばかりである。

「まあ、いいですね。それで、今日からはちゃんと寝るとして、どれぐらいの時間があればこのISは完成しそうですの？」

「そうだな……東さん曰くこの3人以外は作成に関与するなどのことだから、それで考えると……毎日授業には参加するとして、恐らく2週間」

「2週間、ですか……クラス対抗戦までの準備期間を考えると、ギリギリですね」

「それから当日までに簪さんのISも完成させなきゃいけないしな。そっちは整備科の先輩達に手伝ってもらえるから、まだいいとして」なぜ、東はこの3人以外制作に関与を禁止したのか。それは、この一夏専用ISに搭載されるとあるシステムが原因だった。

今のところ、まだどこにも発表していない新たな理論に基づいて作成されたシステム、それがこのISには搭載される予定である。

東は、『もしもその詳細を漏らしたら、与えられる限り最大の損害を、漏らした人間の所属する国に与える』という条件を提示した上で、更にできる限り漏洩の可能性を減らそうと協力人数を最小限にしたのだ。

2週間で完成するという結果が弾き出された今にして一夏が考えてみれば、もしかすると東は『一夏の要望に間に合うギリギリの時間』を考慮し、そのために必要な最低人数まで把握していたのかもしれない。

「とにかく、今はできる限りのスピードを出して作るだけだな」

「うん……」

「さて、それでは食堂へ参りましょうか？」

だな、と返事をして、一夏が一步踏み出した。そして次の瞬間、床に倒れ込んだ。

「……ん、くはあ……」

大きく欠伸をして、一夏が目覚めます。

場所は、整備室。自分の身体には、なぜか毛布が被さっている。

はて、俺はどうしたんだっけ——？ 思い出そうとすると、ドアがゆっくり開いた。

「おう、目が覚めたか」

「千冬姉さん？」

目の前の千冬は、スーツを着込んでいる。いやな予感で、一夏は目線を泳がせた。

神経を集中してみると、眠気は改善されている代わりにやけに空腹感が襲って来ている。自分の覚えている最後の記憶の時より、時間が経過しているらしい。

「んーと、俺、どうしたんですか？」

「過労と睡眠不足で倒れただけだ。まったく、体調管理ぐらい自分でちゃんとやれ」

頭を抑えながら、少しきつい口調で千冬は注意した。暗に、これ以上頭痛の種を増やすなという訴えを、一夏は感じとった。

「授業は——」

「もう午後の授業が始まっている。別に参加するというのなら止めはせんが——」

「分かりました、サボります」

言い終わった瞬間に、一夏の額に1本の白いチョークが直撃した。投擲したのはもちろん千冬であり、そのダメージは彼女の腕力のせいで非常に高いものとなっている。一夏はのけぞった。

「教師に対して堂々サボると宣言する馬鹿がどこにいる」

「……ごめんなさい、体調不良で休みます」

「それでいい」

体調不良、は嘘ではない。実際、体調管理が甘かったせいで倒れたのだ。よく考えたら、一昨日の晩も慣れない部屋だったために3時間ほどしか寝ていなかった、と今更一夏は思い出した。

「……で、ISの方はどうなのだ？」

「多分、授業に3人全員がきちんと参加する前提で、およそ2週間前後で完成といったところですね」

「授業に参加せず、作り上げた場合は？」

「は？ と聞き返す一夏。千冬は、再び同じ質問を繰り返す。

冗談かとも思ったが、どうやら千冬が真面目に確認をしているらしいと気付き、一夏は「全員休むなら、およそ半分の時間で。俺だけ休むなら、2日か3日縮まるくらいです」と、大まかに答えた。

一夏からの回答を聞き千冬は少し考えると、「これは独り言だが――」と前置きをして、何か言い始めた。

「学園としては、可能な限り来週のうちに全クラスの代表を決めたらしい。2週間ペースでは確実に間に合わない。ああ、それと当然だが――1年生が習う内容の全ては、織斑一夏はすでにとある馬鹿に習ったものだそうだ」

後半に関しては、一夏自身も理解していた。しかし、千冬の意図を未だに一夏は掴みかねている。

……いや。ひとつ可能性は見つかったが、自分の姉がそれを本当に許すのだろうか、どうしても心配になる結論なのだ。

即ち、「織斑先生、まさか俺に授業をサボらせようと――」どこから出したのかすら目視できぬチョークが、再び一夏に直撃した。

「だから、教師の前で自分からサボる宣言をするな」

痛みに耐えつつ、一夏は千冬の叱咤が「行動」ではなく「言葉」

に向けられてのものであると、そして自分の導いた結論が本当に正しかったことを理解した。

「……織斑先生」

一夏の顔が凜々しいものへと変わったのを見て、昨晚の怒った笑みとは違う、心底楽しそうな笑みを見せる千冬。「何だ、言ってみろ」

「いきなりの寮生活で、どうやら体調が安定しないみたいなんです。来週の日曜日まで、休んでもいいでしょうか」

「……嘘はないな？」

形式上そう尋ねつつも、千冬は既に出席簿を開きペンを取り出していた。

「はい——千冬姉さん、なんていうか、感謝するよ」

気にするな、と右腕を軽く振りながら、千冬は部屋を後にした。

一夏からはもちろん見えないが、千冬のその顔は、満更でもないようだった。

4 - 1 術の欠片は空を舞う

一週間は、弾丸の如き速さで過ぎた。

週末までとそれから1日、つまり日曜日まで、学園で織斑一夏の姿を見た生徒はセシリアと簪、それに少し遊びに来た本音の3人だけ。食事すら、千冬が運んできた食堂の定食を食べていく一種の引きこもり生活。夜中に多少汗くさいなと千冬や簪の部屋へと赴きシヤワーを浴びる時以外、一夏は一步も整備室を出ることはなかった。それが崩れたのは、月曜日のことである。

この日も授業は休んで午前中ずっと整備室にいた一夏だったが、放課後には第2セシリアのクラス代表決定戦があったため、午後、久々に整備室を出たのだ。

最も、事前に集められる情報は全てかき集めた一夏である。セシリアの専用機こと『ブルー・ティアーズ』に関してもかなりの情報を既に集めた後であり、第2が初心者機動しか見せられなかったことも相まって、試合が終わるまでに彼が得られた新規の情報は特にはなかった。

結果はもちろんのこと、セシリアのストレート勝ちだった。

そして、火曜日。この日からなんと、簪までも授業を休み始めた。優等生であると教師からの覚えがよかった簪が授業をサポートしユするとあって、数名の教師は大反対したのだが、この週の週末までに教わるであろう範囲内の要点を全てそらんじることによって、どうにか簪はその反対をやりすごした。

もう1人——セシリアは流石に授業時間まで手伝うといったことはなかったが、こちらも放課後は自身の練習そっちのけで整備室に足を運んでいた。

セシリアは技術面では一夏や簪に劣っていたが、基礎部分の確認に関してはやはり代表候補生なりに正確にこなしていたし、何より作業効率を落とさないための様々な気遣いが、精神面から一夏を支

えた。

最も、息抜きにと出された、「味がしっかり出るのではなくて？」と適量の3倍の茶葉によって抽出された紅茶とおそらく牛の生肉が入っていたのである。クッキーは、むしろノックアウトに貢献したらしいが。

その他、本音が機密部分に関わりがない部分の手伝いに参戦した——実は、彼女の世間話によって簪の作業時間が減った分のロスタムまで入れるとほんの僅かしか制作には貢献できていないが——など一夏には嬉しい誤算が多々あり、とうとう木曜日の夜、一夏の機体は完成した。

「ほう。確かに今週中にクラス代表を決めておきたいと言ったが、もう完成したか」

完成を一夏が千冬に報告すると、目を吊り上げながら彼女はそう言った。

「俺も、最初の予定では間に合わなさそうだなあと思ってたんですけどね。簪さんやセシリアさんに感謝感激ですよ」

ここ数日の開発週間のおまけのような副産物として、一夏がセシリアの呼び方を変えたというものがある。

一夏はかなり親しい相手になると名字呼びから名前呼びに変えるという癖を持っており、つまりセシリアとの信頼関係は相当なものとなったのだ。

それはともかく——機体が完成した以上、伸ばしたままの予定をすぐにでも消化したい千冬は、第一に「それで、明日にも対戦は行えるのか？」と尋ねた。

「あー、……まあ、無理じゃないですけど。どいう予定で対戦をするんですか？」

「すぐに対戦ができるならば明日にオルコット対お前、明後日に篠ノ之対お前という順番になるだろうな」

千冬の答えに、一夏はやはりそうかと納得する。

一夏は、既にセシリアと箒の対戦を見ている。ここで先に一夏と箒で対戦をしてしまうと、一夏が一方的に情報アドバンテージを得た状態となってしまう。

それならば、対戦以前に情報が割れているセシリアと一夏を先にぶつけるのが、一夏と箒の関係上最もフェアだ。

その分、セシリアは未知の相手と2回も対戦することになるが……そもそも自身のデータが既にある程度開示されている以上、セシリアとしてはそこまで不快になるようなものではない。むしろ、その程度の悪条件に文句をつけるようでは代表候補生の名が廃ると、本人は十分なやる気である。

さて、そうなると次の問題は、今現在の自身と箒の技量の差、と一夏は考えた。

「んーと、それじゃ、明日の午前中に開いてるアリーナを教えて欲しいです」

箒は、一応IS機動に向けての練習時間があつた。それに対して、一夏はなかった。

その隙間を可能な限り埋めようと、そういう要請を一夏が発するのはごく当然であつたが――。

軽く、一夏が千冬にはたかれた。

「完成したというのにまだ休むつもりか、お前は」

「……フィッティングとか、いつやるんですか」

「そんなもの試合本番で終わらせる」

無茶苦茶だ。一夏は頭の中で、そう思った。

フィッティング。一般的に「寸法合わせ」を示すこの言葉は、ISを文字通り「自分の服のように」適応させることを示す。

このフィッティングとフォーマット、即ち基本設定の書き込みを終わらせることで、始めてISは十分に性能を発揮すること――俗に、一次移行と呼ばれる――が可能となる。そして、これらを終わらせるには多少の時間、ISを稼働させる必要があるのだ。

それをぶつつけ本番でというのは、即ちダンスパーティーでダボ

ダボの服を着ながら踊り、同時に服の丈を調節していけと言われて
いるようなものだ。

少々スパルタが過ぎる。

「それとも何か、これまでの休みは全てずる休みだったと学園に報
告してやるのか」

「是非ともぶつつけ本番でやらせていただきますお姉様」

スパルタが過ぎることには違いないが、しかし転身の早い一夏で
あった。

「では金曜日、授業終了後にお前とオルコットで対戦だ。場所は最
初の予定と同じく第三アリーナ。あちらには私から伝えておく」

「了解しました」

それでは今日は寝るぞ、と千冬が一夏に確認を取る。一週間と少
しの間ずつと整備室に閉じこもっていた一夏は、もちろん箸との仲
直りなぞできてはいない。

電気を消そうとして、そこで「ああ——」と思い出したかのよう
に千冬は呟いた。

「そういえば、ISの名前を聞いていなかったな」

名前。姿とコアナンバー、で大体の把握こそできてしまうが、や
はりISにとって重要なものである。

よくぞ聞いてくれました。と一夏は自身ありげの顔になるが、そ
の瞬間千冬は電気を消したため、一夏の誇った顔は空振りに終わっ
た。

しかしめげない。くじけない。今度は「よくぞ聞いてくれました
！」と口で——よっぽど、名前に関しては自信があるらしい——言
った。

「最初は、白黒の白に数式の式で『白式』^{じょうしき}の予定だったんだ。最初
はというより、束さんの呼び方だけどあいだでっ！」

一夏がいきなり痛がったのは、額に千冬からデコピンを飛ばされ
たからである。

「一応、書類に書かねばならん事項だ」

言外に「仕事中だからタメ口は禁止」と言われ、慌てて一夏は口調を直した。直しながら頭の中でマニュアル人間め、と考えていると、なぜだか見透かされて再び攻撃がヒットしたので、一夏は考えることをやめた。

「じゃあ、改めて。まず、当初の予定では『白式』でした。先ほども言った通りこれは束さんの考えた名称です。しかし——実は束さん、開発当初には組み込んでいなかったプログラムを無理矢理組み込んだらしく。で、開発者が名前をつけるのであれば俺にもつける権利はあるよなっでことで、別の名前を付けたんです」

白式——字面を思い浮かべて、千冬は多少ばかり頭を掻いた。束の奴め、粹なことをしてくれるではないか——だが、一夏が名前を変えると言うのであれば、それはそれで構わない。

「で、名前はなんなんだ」

「由来とかの説明もすべきで」「しなくていい」

即座に申し出を蹴られ、多少一夏はふてくされた。しかし、それで千冬の機嫌を損ねたら、再び頭皮の奥の奥まで浸透する一撃を与えてくるやもしれない。すぐにふてくされるのをやめて、一夏はI Sの名前を口にした。

「『白彼岸^{しろひがし}』。白の字はそのまま、彼岸花の彼岸で白彼岸です」

その名を聞いて、千冬はいきなりぷつと吹き出した。何がツボにはまったのやら一夏には一切分からないが、どうやら千冬の笑いは収まることを知らないらしい。

「……そんな変な名前だと思うなら、変えるけど？」

「い、いやいや、いい名前じゃないか。ふはは……」

「……なんか、釈然としないなあ」

「しなくていい。変える必要はないから、さっさと寝ろ」

仕方なく一夏は目を閉じるが、意識が落ちるまで千冬の微かな笑い声はずっと一夏の耳に届いていた。

そして、翌日の放課後。

「ええっと、オルコットさん……?」

「なんですの?」

簪とセシリアは、ピットゲートで待機していた。現在はセシリアが、機体のチェックを行っているところである。

「織斑くん、何で来ないんだろ?」

「知りませんわ」

…… 3度目の。

既に、試合開始予定の時間からは30分が経過していた。5分程度の遅刻であればまだ理解もできるが、同じIS学園内にいるというのに30分もの遅刻というのは遅すぎる。

まさか、見込違い? 彼を過大評価しすぎていたのだろうか?

そうセシリアが思い始めても、仕方のないことだ。

簪としては、彼が理由もなく遅れることはないと信じているのだが……しかし、一夏はどことなく抜けているところがあるので、やはりISに関して問題があったのではないかという心配は拭い切れていない。

そして、同じくピットゲートで待機している教師2人も、何やらあったのではあるまいかと心配を——していなかった。片方はしていたが、もう片方は一切心配などしていない。千冬である。

「……ちよっと、整備室、見てくる」

「すいません、よろしく願いますわ」

とにかく、ISが置いてあった第三整備室に行けば、現状の確認ぐらいは可能だろう。

そう思っ、簪が廊下へ出ようと自動ドアを開けると――

汗だくだくの様子で、一夏がちょうどドアから入ってくるところだった。

「遅いではありません……ん、か?」

怒りをぶつけようとしたセシリアも、思わず語尾を疑問符にして

しまう。それほど、一夏は疲れているようだ。息も荒い。

「織斑くん……どうしたの？」

「ごめんっ、いやっそのっ、フィッティング終わってないからっ、運ぶのは人力だっ、忘れてたんだよッ」

整っていない呼吸のまま、説明する一夏。確かにISを背負っている。インドア派なうえに最近はずっと部屋に籠っていた彼のこと、ここまで運ぶのに相当の体力を使ったことは想像に難くなかった。それにしても、一夏がどこか抜けていたせいでこの遅刻をした、という予想は正しかったのか。簪は多少呆れた。

背負っていた白銀のISを降ろし、一夏は大きく息をつく。

「しかも運んでたら大量の生徒が野次馬根性全開で話し掛けまくって来て、やっとこさ今到着したんだよ」

「それなら携帯で連絡なり入れんか、馬鹿者」

千冬の出席簿が、一夏の頭に炸裂する。ISにもたれかかって休憩していた一夏は咄嗟に回避することなどもちろんできず（たとえ見えていても完璧な回避など一度たりとも成功したことはないが）、床と全身で接触を果たした。

「いつつ……織斑先生、今から試合っていう生徒にそれはどうかと思っんですよ」

「試合に30分も遅れる生徒もどうかと思うがな？」

自身の非を突かれると、一夏は言い返すことができない。

半分は女子生徒も原因のようなものだが、しかし、それを言い訳にしないこともまた一夏らしい所であった。

「さて、時間が押しているのでさっさと試合に入るぞ。オルコット、先に乗で準備しておけ」

「分かりましたわ」

こなれた動作で、セシリアがアリーナへと飛び出していった。数百時間もISを稼働させていれば当然の、流麗な動きだった。失敗などする道理がないと、千冬は視線をすぐ一夏に戻す。

「では、織斑も早急に準備を済ませろ。方法は分かるな？」

「はい」小さく返事をして、一夏は教科書に書かれていた内容を出す。「確か、座るように、心を通わせるように――」

静かに目を閉じ、ISに触れる。そして次の瞬間に、周りの重力が急に消え去るような浮遊感を、一夏は感じた。

「そうだ、それでいい」

ISの機能『ハイパーセンサー』により、周囲360度全てが一夏の視界となる。ISに乗るのは形式的な試験と合わせてこれが2度目だが、その妙な視界に違和感こそあれど、不快感はなかった。

右手、左手、右足、左足、浮遊。各所の動作を、少しずつ確認していく。妙な動きをしないか、その最終チェックも兼ねて。

「よし。問題はないようだな、織斑？」

「そこは一夏って呼んでほしかったけど……まあ、いいか。一方通行に呼びますね」

一定の実験動作を終わらせた一夏は、本来向かなくても見えるが、千冬のほうを人間としての目線でしっかりと捉えた。

「千冬姉さん、行ってくる」

「ああ、行つてこい」

軽く膝を曲げ、一夏は大きく飛翔するポーズを取った。

「……簪さん？」

飛び上がる直前。簪が何が言いたそうにしているのが見えて、一夏は声をかけた。

「あ、あのっ、織斑くん……オルコットさんは、やっぱり強いと思うけど……その、が、頑張つてね！」

「ああ。それじゃあ、行ってくる――『白彼岸』！」

自身のISの名を叫び、大空へと一夏は飛び出した。

4 - 2 水平線の先は軌跡を描く

『白彼岸』が、風を切って青空を駆ける。

フォーマットもフィッティングも終了していない、未だ無骨な白銀のIS。人間に異常な負荷をかけないために、風圧は、息のしづらさは、その身にそれほど感じない。

——しかし、空は、涼しい。

気付けば一夏は、観客席からの歓声を振り切って、セシリアより100メートルも上の空まで駆け上がった。

急停止して、ハイパーセンサーで首も回さず周囲を見渡す。そもそもが宇宙空間での活動のために作られたハイパーセンサーは、地平線の彼方まで青を見せていた。海が見える。海に浮かぶ船が見える。カモメが羽ばたく姿さえ、彼の目には鮮明に映った。

同じ高さまで、セシリアが飛んできた。

「毎日のように見ておりましたが、やはり自分達で作った機体が動いているのを見ると感無量ですわね」

「ああ——凄いな、これ」

「最初飛ぶ時は気分が悪くなる方もいらっしゃるそうですが、どうやら大丈夫のようですね？」

「気分が悪くなる？　これがか？　——むしろ気持ちいいじゃないか、すごく」

一夏とセシリアの視線が合う。一夏の瞳が輝いているのを見て、セシリアが微笑んだ。

「気に入りました？」

「ああ、ISに乗って撮影したビデオなんかも見たことがあるけど、そんなの比じゃない。凄い、ホントに凄いよ」

「それは当然ですわ、なにせISは……」

『2人とも話すのは勝手だが、とりあえず明日以降が対戦中にしろ。時間がない』

下手をすればそのままISの談話になってしまいそうな2人を、千冬が放送で叱り付ける。少し一夏は口を尖らせたが、特に文句も言わず定位置に戻った。

「さて、それじゃ始めようぜ」

「フォーマットとフィッティングはよろしいのですか？」

「俺もそれくらいはしたかったんだけどな。千冬姉さんのあの調子じゃ、そんな時間は設けてくれないだろ」

セシリアが、拡張領域——武装を分解、収納しておくISの機能、及び領域自体のこと——から後付装備を取り出した。

既に一夏はセシリアの試合を見たため、それを知っている。《スターライトMk?》、六十七口径のレーザーライフルである。

「……つまり実戦で慣らしていくしかないわけだ、って、そんなの言わなくてもとくに理解してるみたいだな」

「当然ですわ」

一夏の輝いていた瞳は、すぐに鋭い目付きへと変わった。最も、熟練の鷹のような殺気を放つ目とははるかに遠い。

『試合は始まっている、いつでも仕掛けて問題ないぞ』

再び、千冬の声が放送に乗った。全く、そんなに試合を急がせたのか。一夏は肩を竦めた。

「さて、千冬姉さんもああ言ってることだ。始めよう………かつ！」
言いながら、拡張領域から一夏は一本の剣を展開、すぐさまセシリアに投げた。

もちろんセシリアは難なく回避する——しかし、その剣にはチェインが付いていた。

一夏が鎖を引き寄せると、剣は手元へ戻ってきた。その間、重力に負けて空から剣が落ちることもない。

「うん、どうやら問題ないみたいだな」

「それが、一夏さんの作った武装の1つですの？」

「ああ、元々は《雪片》——千冬姉さんの装備だけだな」

千冬——過去、第一回のIS世界大会『モンド・グロッソ』で格

闘部門優勝、及び総合優勝の栄冠に輝いた人間。その戦闘スタイルは、なんとたった1本のブレードで空を駆け回り、一撃必殺を狙うというハイリスクハイリターンなものだった。

その千冬は第二回目のモンド・グロツソをとある理由より決勝で棄権、そしてその直後に突如として選手引退を宣言。今や彼女は――いや、機体や装備でさえも――生ける伝説となっている。

千冬が使用していたブレード、その名こそ《雪片》だ。

「さすがに今の俺は、姉さんみたいな化け物機動なんて無理だからな。かといって遠距離装備を扱えるわけでもないし、ある程度色々な距離に対応できる武器がいいんだ。名前が気になるなら、単純に《鎖雪片》、でいいかな」

「なるほど……では、そろそろ本当の開戦と行きましようか？」

「ああ、もう1つの特殊機能は、フォーマットとフィッティングが終わってからじゃないと無理、だしな！」

言葉が終わると同時に、一夏が再び《鎖雪片》を投げる。

セシリアはこれも難なくかわし、今度はすぐに一夏を狙い撃つ体勢となった。

閃光が走る。が、そこに一夏の姿はない。

「さすがに回避しますか！」

「sonだけじゃーねーぜ！」

一夏が右手をセシリアに向けて振るう。空中に固定されていた《鎖雪片》が、セシリアの方へと向きを変え、再び進む。

「なっ！」

再び回避動作をとるセシリア。しかし、予想外の方からの攻撃に対処しきれず、切っ先が装甲の一部に触れた。

「飛ばした方向を変えられるなんて、わたくしの天敵ではありませんか！」

再び、セシリアが一夏を狙撃する。……一夏は僅かに身体を捻るが、レーザーは『白彼岸』の左足装甲を奪っていった。

「……天敵、つてわけでもないんだよなあ。セシリアさんと同じで、

1 回曲げるとその間、身動きが取れない」

「わたくしと同じ……イメージインターフェイスですか？」

「んー、この機体ってどうも第三世代じゃないらしいから、コア能力を引き出すべく作られてるイメージインターフェイスとは少し違うかな」

一夏が《鎖雪片》を引き戻す。曲げた後でも、戻す場合なら問題なく移動と両立できるらしい。

「第三世代ではない？ ということは、第二世代ですか？」

「後で教える。それより、そろそろ『ブルー・ティアーズ』の《ブルー・ティアーズ》を出さないか？」

一夏に指摘されて、セシリアは応答するようにISのスカート部分から浮遊物体を切り離した。浮遊する板は落ちずに、空中に固定されている。

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアの掛け声と共に浮遊するビット——《ブルー・ティアーズ》が四方に移動する。

「……なるほど、360度見えるって言うても、これは確かに怖いな」

一夏の周囲に、4つの飛行物体。イギリスの開発したビット兵器、《ブルー・ティアーズ》である。

ビットの1つを狙って一夏が《鎖雪片》を投げつけると、そのビットも移動して回避した。

その間一夏の身体は無防備だったが、セシリアの《スターライト Mk?》による射撃はない。

「……やっぱり、同時には操れないんだ」

「見抜かれていましたか」

「まあ——試合を1回見ちゃったからね」

「なら、攻撃方法を変えるまでです！」

一夏の視界から、突如1つのビットが消えた。

いや、視界から消えたのではない。巧妙に、人間にとって自然と

死角になってしまふ位置に移動したのだ。

対応が遅れ、ビットからの一撃をモロに喰らった。

「ひっでえ！」

叫びながらも、一夏はセシリアへ剣を投げつける。こちらも反応が少し遅くなり、先ほどより大きめに装甲を削った。

セシリアは、ビットを動かしている間は身の回りの完了が疎かになる。その隙を突ければ、いかに初心者の一夏であろうと、ダメージを与えることが可能だ。

しかし——残念なことに、それは一夏も同じだ。

剣を投げられたセシリアは、回避と同時にビットにて一夏を射撃。こちらも一夏の装甲を削る。

「まっず」

剣を引き戻しつつ、一夏はセシリアと多少距離を取った。

《ブルー・ティアーズ》に囲まれ続けていては、ダメージレースで負ける。そう判断したためだ。

しかし下がったところで、今度は一夏の肩の近くを《スターライト Mk?》のレーザーが通りすぎた。

ミスった！ 既に下がった後で、一夏は己の失敗を悟った。

「そこだと、届かないのではなくて？」

「だ、な！」

慌てて、再びセシリアへと近付こうとするも、ビットからの弾幕がそれを邪魔した。

鎖の長さを考えていなかったのだ。現在の位置では、セシリアまでその刃が届かない。

「さあ、輪舞曲でもいかがかしら？」

「Aパートの連続なんて、御免被るぜ！」

「あら、つれない」

拗ねながら、セシリアの弾幕は次第に一夏へと向きを変えてきた。ビットを回避しようとするれば、それが止まって本人からレーザーが飛んで来る。

右腕を、左足を、左肩を、——頭にレーザーが当たりそうになつて、他は多少被弾しつつもそこだけは本気で回避した。

「えげつねえ！ もっとおしとやかにしてくれよ！」

目の前をレーザーが通り抜ける。酷い恐怖だ。

けれど、それに文句を言う一夏の顔に、怒りはない。

「あなたがもう少し、上手にエスコートして下さればよろしいんですわ」

「本場仕込みのレディに通用するエスコートなんて、悪いけど習ってない！」

強引に、ビットへ剣を投げる。もちろん、その投擲は回避され、更にレーザーが一夏を襲った。

しかし、再び無理矢理剣の向きを変える。回避したビットへ向けた一撃が、そのままそれを損傷させた。

「まず1つ！」

本体のダメージと引き換えに、ビットを1つ壊す。セシリアの顔が陰しくなった。

「次だっ！」

「させませんわ！」

無理矢理ビットを狙って剣を投げるが、今度はビット自体を狙われない位置まで移動するセシリア。

しかし、一夏はその間に、移動したものは別のビットへ接近、蹴り飛ばした。

同時に伸びきった剣とビットを対角線上に置き、しならせながら剣を引き戻す。

蹴られて脆くなったビットを、勢いよく戻る剣が引き裂いた。

「2つ！」

戻り際を狙い、セシリアはレーザーを一夏に当てる。ビット1つと引き換えに、一夏のISのシールドバリアーはどんどん減らされていった。

「やべえ、もうバリアー残量半分だぜ」

「あら、それは残念ですわね。こちらはまだかなり残っていますよ」

「知つとるわ！ 装甲の破壊具合だって、こっちの方が全然大きい
だろ！——しかも、まだビット2つ出してないじゃないか」

一夏の台詞を聞き、観客がざわめく。

第2セシリアの対戦は、セシリアが完封に近い結果をたたき出して終わった。そのため実は、観客席のほとんどがセシリアの装備を正確には把握していないのだ。

「やはり知っていましたのね……《ブルー・ティアーズ》をまだ出し切っていないと」

「情報戦だって勝負の一部、だろ？ セシリアさんだって、手伝いで俺の機体見てるんだから、かなり情報は仕入れてるじゃん」

「別に、文句は言っていないせんわ！」

『ブルー・ティアーズ』が、新たに2機の《ブルー・ティアーズ》を展開した。一夏が2機落とした分が、すぐに補充される。

すかさず、一夏が新たに展開されたビットに急速接近する。回避させようとせず、狙われたビットがミサイルを撃ち出した。

「あつぶね！」

回避しながら、ビットを切る。後ろから別のビットが狙撃してきた、一夏の装甲をえぐった。

「残り3つ！」

剣は飛ばせるとはいえ、力を籠めて切り付けた方が威力は高い。対第2戦の時にミサイルビットは使用されていなかったため、一夏は今の一撃でこちらの硬度を確認した。

しかし、その一瞬の隙を、代表候補生ともあろう人間が見逃すはずがない。

考え事で身体が止まった一夏を、一気に3つのビットが囲む。

「フォーマットとフィッティングは間に合わなかったようですね？」

「……まだ、終わってないぜ。フィッティングじゃなく、試合がな」

一夏が《鎖雪片》を構えると同時に、レーザーとミサイルが一夏を覆った。

もくもくとアリーナ上空に煙が立ち込める。

「これで、終わりですわ」

爆風の被害を避けるため、ビットが一夏のそばからセシリアのそばへと移動した。

全ての攻撃を喰らえば、シールドが半分以上削られたISではひとたまりもないであろう。

少し残っていたとしても、一押しで決着がつく。ならば、後は自分の身を固めるべきであろう。セシリアはそう考えた。

勝者を宣言するアナウンスは、聞こえない。即ち、一夏はまだ削り切られていないのだ。

煙が晴れるのをセシリアは、距離を取って待った。一夏が元いた場所に、《スターライトMk?》の銃口を突き付ける。

次の瞬間、セシリアのビットが急に地面へと落ちていった。

「なっ……!?!」

ハイパーセンサーで確認していたが、ビットに狙撃された様子はない。《鎖雪片》が飛んできた姿も見えなかった。

混乱するセシリアの横で、更にもう1つビットが落ちる。残ったビットはたった1つ。

目を見開きながら、セシリアは煙と同時にビットも確認してた。

やはり、攻撃は当たっていない。ならば——なぜ? なにゆえ、ビットが機能しない?

冷や汗をかくセシリア。その視界の先で、ようやく煙が晴れた。

「——間に合ったぜ」

煙から、一夏とそのISが姿を表す。

その外見に観客が、ビットゲートの簷が、そして焦りを見せていたセシリアでさえも、目を奪われた。

無骨なフォルムのISは、最早存在していない。曲線がシャープに。右腕が光る白銀からほんの少しくすんだ灰色に。そして《鎖雪

片』の刃が、より鋭く。

「それが、そのISの本来の姿ですのね?」

「ああ、これが完成した『白彼岸』……三と二分の一世代ISだ」

4 - 3 放置したコーラは空気に似る

「第三世代から、半分進んだ……？ ちょっと待ってくださいな！ 各国はまだ、最近やっと第三世代を開発しただばかりですよ！？ それなのにもう、その機体は第四世代への足掛かりを掴んでいるんですの！？」

「ああ。ちなみに束さんが全部作ってたら、最悪こいつは第四世代だったぜ」

今度こそ絶句するセシリア。一夏が個人間秘匿通話——ISの、1対1で会話できる機能——で話していなければ、観客席まで静まったであろう。

第一世代は『ISの基礎完成』。第二世代は『後付装備による使用場面の多様化』。第三世代は『イメージインターフェイスを利用した特殊武装の実装』。そして第四世代が『パッケージ換装を必要とせず多様化させられる万能機』を目標としている。そしてセシリアの言った通り、世界各国は未だ第三世代機が最新、当然ながら最も多く実戦配備されているのは第二世代。そんな時期に、もう第三世代を追い越す機体が開発されているのだ。何も言えなくなっても、それが当たり前の反応である。

「えーっと、固まるのはいいんだけど……そろそろ、試合を再開するぜ？」

「あつ、あ、あああつとそうでしたわね！ さあ、続けましょう！」
《スターライトMk?》を一夏に向けて再度撃つ。ビットも一夏の方を向いている。

それに対して、一夏は両手を前に構えた。ISの腕、ではなく、生身の両手を、だ。

「それでは被弾して、終わるだけですわよ！」
レーザーが一夏へと近づく。しかし、被弾はせずに掻き消された。一夏は腕を前に構えたままなのに、急に《鎖雪片》のみが動き、

刃がレーザーを横に薙ぎ払った。「……は？」

わけが分からない。

続けてもう一度セシリアは撃つ。しかしやはり、一夏の両手は動かないのに《鎖雪片》、その鎖だけが動くのだ。

握ってすらいない。量子化、具現化、そして攻撃を防いだら再び量子化。

「どうなっていますの！」

とうとう自棄になって、セシリアは一夏に向けて連射を始めた。ビットさえ残っていればもう少し変則的な攻撃も行えたのだが、3つは破壊された上に2つはさきほどいきなり地面へと墜ちてしまっている。

自身の移動と《鎖雪片》を巧みに利用して、そのことごとくを一夏は避ける。その動きが一次移行前より滑らかに——本人に合うように設定されたのだから当然だが、それ以前の技術として差があるような動きへ——なっている。

「一次移行で、一体何が起こったんですの！？」

「この連射をやめてしつかり俺を見てみればいい」

そんなことを言われても、攻撃を止めたら即ち隙となるのだ。得体のしれない機動に関してのトリック、それを悠長に調べる余裕はセシリアにはなかった。

「こちらならどうです！」

浮いている唯一のビットからミサイルを放つ。それと少しタイミングをずらして《スターライトMk?》で一夏を狙う。ちょこまかと動き回って回避していた一夏が、移行後初めて大きく移動した。

「……何ですの、それ？」

攻撃によって眩む視界。そこから離れた一夏を見て、セシリアは一夏の両手の動きに気がついた。

止まっているのではない。せわしく、一夏の目の前に表示されたディスプレイを叩いているのだ。

「立体キーボード」

「キーボードの動作ということぐらい、見れば分かりますわ!」

吠えながら再び狙撃。ちっ、と小さく舌打ちをして、一夏は再び距離を取った。

「対戦中に、自分の使っているシステムを教える馬鹿者はいないぜ!」

台詞の10秒後。がくん、と、最後に残ったひとつのビットまでも、重力に負けて地面へと墜ちた。

セシリアは確認した。一夏はやはり、一切攻撃動作を採っていない。

むしろそれでだ。セシリアの頭に、ひとつ引っ掛かることがあった。

攻撃されていないのに墜落するビット。
持っていないのに主人を守る剣。

細やかな機動を突如再現し始めた一夏の機体。

そして、一夏のタイピングするキーボード。最早、これらに何の繋がりもないなど、考える方が間違っている。

そして——実は少しだけ読んでしまった、アレ。

「理解、しましたわ」

「はっや! 言わないぜって言った10秒後にもう気付くってどういう……まあ、いいや。それで、どう理解したんだ?」

「あなた——全ての動きを、『手動で』制御していますわね?」

一夏が軽く口笛を吹く。「凄いな、正解だ」手がディスプレイを叩くと、《鎖雪片》がセシリアへと飛んで行った。

《スターライトMk?》を盾に、セシリアは刃を弾く。同時に、会話が開放回線から再び個人秘密通話へと切り替わった。

「手動介入システム——こないだの見せかけのノート。あれが、そのISには搭載されているのですね?」

残った唯一の装備である《スターライトMk?》で、再びセシリアは一夏を狙い撃つ。その全ての狙いを、一夏は自身のイメージではなくキーボード操作で回避した。

「正解。もしかして、ノートの1ページ目、本当はシステムも少しだけ見えてた？」小さく、セシリアは舌を出した。「ごめんなさい、どうしても見られなかった物らしかったので、つい……」

見たなら見たで、怒らないのに……。一夏は「ま、いいや」と言っ
て、再度《鎖雪片》でセシリアを狙った。

「自分の考えたシステムを自分の機体で実証できるなんて、入学するまで考えてなかったぜ！」

今度は回避動作を選択するセシリア。しかし、回避動作ということとは、その分一夏に接近のチャンスが与えられるということである。一旦量子化してから近付き、再び展開。『白彼岸』は『ブルー・ティアーズ』よりスピードが遅いが、横へ避ける相手に直線距離で近づけば追いつく。

キーボードを叩いていた一夏の右手に、鎖を介さぬ《雪片》が握られた。

ガキンッ！ 咄嗟の判断でセシリアは《スターライトMk?》を盾にする。

「んで、セシリアさんは近接戦闘が苦手、そうだろ？」

「いくら苦手でも、初心者に遅れを取りはしませんわ！ 《インタ―セプター》！」

セシリアの握っていたライフルがブレードへと変わる。試合は、前半戦と違い切り結ぶ接近戦へと変わる。

「うええい！？ 下手っ、なんじゃっ、ないのかよっ！ おらっ！」

「ふっ！ はあっ！ 確かに下手、ですがっ！ あなただって同じぐらい下手なんですわっ！」

「ああくそっ！ 右手が塞がっているとタイピングが面倒臭ええええ！」

いくつかの金属音がアリーナに響く。しかし、一発もお互いのI
Sには当たっていない。

十、二十。切り結ぶ数は増えるが、しかし互いのシールドエネルギーは減少しなかった。

「遠距離でも近接でも当たらないとかつ！ 消耗戦かよ、ああもう
タイピングさせる！」

「手動入力させたら武装も役に立たなくなるのでしょう！？ 《ブ
ル・ティアーズ》が墜ちたのだってそれですものね！？」

「何で俺の周りには勘のいい女しくないんだよっ！」

「あんな不自然な墜ち方すれば、馬鹿でも分かりますわ！」

大きく、ブレードと鎖のぶつかる音。2人の間で、一夏の《鎖雪
片》の鎖が、セシリアの《インターセプター》を絡めとった。

「隙ありっ！」

鎖をそのままに、一夏が再び右腕に《雪片》を握る。

「させま……せんわよっ！」

「うおっ！」

セシリアが、鎖を《インターセプター》ごと強引に横に薙ぐ。右
腕が鎖に引かれ、一夏とセシリアの間に空虚が生まれた。

「隙あり、ですわ！」

超至近距離のまま、セシリアは左腕に《スターライトMk?》を
展開、そのまま一夏へと突き付ける。

「終わりですわ！」

セシリアの手がトリガー部分を引く。

カチリ、金属の音が小さく聞こえる——レーザーが一閃、しない。

「必死のタイピングも、間に合ったか！」

「な……まさかっ！？」

カチカチと、セシリアは何度もトリガーを引く。しかし閃光は走
らない。

理解した。これは、撃てない。

「切り結んだのは、この時間を稼ぐがための！？」

「そうだ……ぜつと！」

《鎖雪片》が量子化される。セシリアの《インターセプター》が自
身の装甲を裂く前に、一夏は大きく距離を取った。

《インターセプター》を振り終わってから、慌ててセシリアが一夏

に近付く。遠距離型であるというのに、遠距離兵装が全て封殺されているのだ。

今一夏に遠距離装備を出されてしまったら、対応のしようがない。
「怖い怖い怖いっ！ こっちくんなんっ！」

《鎖雪片》の刃が、直線でセシリアを狙う。回避の時間を使って、一夏は更に距離を取った。

「レディの扱いがなくなってないのじゃなくて？」

「俺の知る限り、ブレードを持って近づいて来る女性のことはヤマンバっつーんだよ！」

「まだ老婆に見られる歳ではありませんわよ！？」

「殺気が増した！？ 怖えよヤマンレディ！」

止まったまま《鎖雪片》でセシリアを何度も狙う一夏。しかし使い慣れていない装備は、少しずつセシリアを近付ける。小刻みに小刻みに、《インターセプター》が一夏に届こうとする。

《鎖雪片》を止めたら一気に近付かれる。しかし、止めなくても少しずつ、確実にセシリアは近付いてくる。

「ええい！ 面倒ですわ、いい加減観念なさい！」

「観念しない！ そのまんまエネルギー切れろっ！」

「もっと別の攻撃で攪乱すればいいではありませんか！ まだ他の装備を一切出していないのでしょうか！」

一瞬、なぜか一夏の攻撃が止まった。隙を突いてセシリアは一気に距離を詰める。

「——まさか、他の装備、ありません、の？」

「ああああああ言うなっ！ あったらとっくに出しとるわっ！——」

あまりにオーバーリアクションであつたために嘘も考えたが、今嘘を吐く理由は、考えてみたが思いつかない。

ということは、本当に装備は《鎖雪片》と《手動介入システム》だけ？ とにかく、接近しても未だ装備を出さない以上、この状況で出せる装備ではないだろう。

セシリアが一夏に突っ込む。最後に一度《鎖雪片》を使うが、一夏には操縦者の死角を見切る能力など備わっていない。難なく回避され、一夏はダメージと一緒に大きく後退した。そして、

不気味にニヤリと口角を吊り上げる。

「残念……距離が、開いた」

恐るべき勢いで、一夏がディスプレイ投影のキーボードを叩きはじめた。

荒れ狂うような《鎖雪片》がセシリアを襲い、一旦彼女も後退せざるを得なくなる。

すると、鎖は一夏を覆うような形となった。

「——防御体制、ですかしら？」セシリアは問い掛ける。しかし、一夏からの返答はない。

キーボードを叩く、その音だけがアリーナのフィールドに小さく響くのみだ。

「……待ってくださいな。何で《鎖雪片》も『白彼岸』も動いていないのに、何かを入力し続けているんですの？」

一夏は答えない。

「それとも、距離が開いたから使える装備を、密かに動かしているとか——」

一夏は答えない。ただただ、指をせわしく動かすのみだ。

「——介入システムで動かせるのは、『白彼岸』だけではない？」

一夏は答えない。答えない……が、指が一瞬だけ動きを止めた。

「ということは……ええい、今すぐ倒さねばならないではないですか！」

気付いて、大慌てでセシリアが一夏へと加速した。

介入システムは『白彼岸』以外も動かせる。もしそうであれば——今この場で『ブルー・ティアーズ』を止めることは可能か否か。

可能なだろう。一夏が、一心不乱にキーボードを叩くのだから。
「間に合えっ……！」

セシリアが口にした言葉は、ちょうど一夏の心境とシンクロする。
『ブルー・ティアーズ』のスピードとハッキングへの対処能力が間に合うか、それとも一夏の入力スピードが間に合うか。

既に一夏とセシリアの距離は3メートルとない。後は鎖の隙間を縫って、セシリアが一太刀切り込むのみ。

「はあああっ！」

「……最終防衛システム突破、PIC……こいつだ！」
一太刀、一夏の腹。セシリアの《インターセプター》が、そこで止まった。

「う、動かな……きゃあああっ!？」

PIC。パッシブ・イナーシャル・キャンセラー。ISにおいて行動の基礎となっている慣性制御装置。一夏が止めたのはそこだ。周囲からの力の制限を抑えていたその装置が止まれば——重力の影響で、機体は浮かなくなる。

そして、移動の要を失ったISは、人間にとって、ただの重りではない。

「止まったな？ 止まったなら、後は俺の独壇場だ！」

「えっ、ええ、ちよっと待ってくださいな！ 動けない女性をいたぶるというのは紳士のすることなのですか!？」

「攻撃しないと、試合は終わらん！ 行くぜえええええええ！」

ブレードを一夏が握り締める。セシリアは既に、ブレードを持つ力は残っていない。

これ以上、試合は続かない——ブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

おおおおおと声を上げてセシリアに突撃していった一夏の声
が、尻すぼみになり、そして最後に疑問符をつけた。

おそらく観客でさえも同じ気持ちであっただろう。が、一番意味

不明なのはセシリア本人だ。

「……わたくしの、勝ち？」

「……お、おー……そうら、しい、けど？」

実に締めりのない終わり方で、2人は同時にISを解除した。

ピットゲートに戻った一夏とセシリアを待っていたのは、呆れた簪の顔と頭を掻く千冬の姿であった。

「千冬姉さん、えーっと、なんで俺、負けたの？」

はあー。大きく溜息をつく千冬。いつも整った凛々しい顔立ちをしているはずの彼女は、今に限って目を泳がせていた。

「その……なんだ。コールが遅れたんだ。まさか、一夏のシールドエネルギーが0になっているとは予想すらしていなくてな」

「そりゃあ俺のシールドエネルギーが0になったというのは理解できるけど、いつ？」

「お前がセシリアを落下させた時に、切っ先が軽く、装甲に触れてだな……」

千冬の説明で、何とも言いがたい微妙な空気が、再びピットゲート内を満たした。

4 - 4 剣道少女は可憐淑女

「……」

「……」

「……はあ」

溜息は簪のものである。こんなに気まずい空気の中で——自分の敗北に納得のいかない一夏、自分の勝利に納得のいかないセシリア、そして結果に納得はいかなくとも、今から試合をやり直すには時間がない教師陣——素直に感想を述べられる人間など、簪ぐらいしかないかった。

「織斑くん」

「はい」

「まず、ISの動かし方、下手すぎ」

「はい」

「ISの制御を完全手動にするっていうのは驚いたけど……武器を動かすのはともかく、IS自体を動かすのは手動じゃなく自分のイメージでできたほうが、その分クラッキングに裂けるってことは分かるよね？」

「はい」

「事前に乗る機会がなかったから仕方ないかもしれないけど、次からはしっかりと、練習するようにしょ？」

「はい」

「低いの反対」

「ハイ」

「よろしい」

「今のはよろしかったんですの!？」セシリアがツツコミを入れるが、無視された。

「それじゃあ織斑先生。俺も箒もセシリアさんに負けたわけですし、彼女がクラス代表に決定、ですかね？」

「ん？ ああ、そうだな……明日の朝のホームルームで、クラス中に連絡することしよう」

「了解です」

それ以上の会話は特にないようで、一夏以下生徒3人は一礼してピットを出た。

生徒が去ってゆく足音を確認した後、真耶が口を開く。

「織斑先生」

「何だ」千冬の返答は素っ気ないものだった。

「いえ——何やら、考え事をしていたようですので」

図星を突かれたようで、「ふむ」と千冬は再び思案顔になる。そしてその直後に、「実はな……」自分の考え事について、語りはじめた。

「一夏……織斑が今回使用していた技術、データは保存してあるか？」

「はい、ええと……」

保存してあったデータを真耶が開こうとして、千冬はそれを「いや、開かなくてもいい」と遮った。

「さつき更識は、『ISの稼動を手動に切り替えた』、そう言っていたな？」

「ええ、織斑くんもその点に関して否定はしていなかったようですね」

「戦闘中、オルコットは『そのシステムは機体も止められるのか』、と一夏に聞いており、そして実際オルコットの機体は稼動を停止した。一夏自身は、システムに関して『自分が考案したシステム』だと宣言していた」

「そうですね……それが、どうかしたんですか？」

「——この世界が今女尊男卑である、その最たる理由は？」

「ISが女性にしか乗れず、各国が女性優遇の政策を打ち出したためです」千冬の問い掛けに、真耶は考える時間すらなしにすらすらと回答した。

真耶の、お手本とも言える回答に、千冬は小さく頷く。そして続けて、「では、この女尊男卑が再び10年ほどでひっくり返るとしたら？」と、真耶に質問した。

「それは――男性が、ISに乗れるようになる、ですか？ それとも、ISの戦闘力に匹敵する兵器が完成する、とか……」

今度の回答には、千冬は横に首を振った。

「確かに、将来的にであれば対等になれるかも知れん。しかし、今までのIS周辺機器は全て女性規格で作られてきたんだ。これから先に男性用ISが開発されたとして、その後すぐに女尊男卑がひっくり返る可能性はそこまで高くない」

「それでは、一体……？」

真耶の問い掛けに、千冬はゆっくりと答えた。

イギリスの名家の出であるセシリア・オルコットには、両親がいない。

彼女が少女から淑女として、ようやく認められ始めた3年前、父母同時に事故に遭遇して帰らぬ人となった。

父の方は、彼女はあまり好いてはいなかった。名家の出であり様々な事業で成功を収めていた母にいつも媚びへつらうような人間で、どうしても情けない人間という印象しか持てなかったのだ。

しかし、母は――いつも気高くあつた母は、彼女にとつて死ぬまで、いや死んでからも憧れの存在であり続けた。

母の残した莫大な遺産を守り通すため、彼女はありとあらゆることを学んだ。政治、経済、経営といった家の存続だけに留まらず、家の名を汚さぬよう礼儀作法や淑女としての嗜み、そして人に負けぬ学業。ISに乗るようになったのも、代表候補生として国から保護、及び様々な優遇を受けられるためだ。

女性に無条件で頭を下げる男性へ次第に膨らむ嫌悪感、そして義

務のようにこなす人との競争で擦り減る心。IS学園入学直後の彼女を形作っていたのは、そのようなプライドだけだった。

一夏と出会ったのは、そんな時だ。

そして、ぶち壊された。

女性を前にしても、決して屈せず自身の意見を突き通す。人より優位に立てる状況であつても、自身の信念に反していたならば状況を蹴る。今まで見てきた男性と、一夏は全く違う存在だった。

ある意味では、馬鹿。『頭が悪い』と『馬鹿』はイコールではなく、彼は確かに頭はいいのに、どこかが馬鹿なのだ。

だが、むしろそれこそがセシリアには新鮮だった。だからこそ、彼女は彼がどのような人間なのか、深く知りたくなった。

気付けば、一夏という人間に、セシリアは引き込まれていた。

いつ以来だろうか。自分のためにではなく、人のために自分の利益を無視することができる人間に出会ったのは。

母とは方向が違うのに、『信念を通す』という点は母と同じ。自分の目指す背中を彷彿とさせるものを、彼は持っていた。

いつ以来だろうか。メリットもなしに人の手伝いなどしたのは。

『セシリアと簪が、代表候補生という立場を利用して一夏に色目を使っている』、なんていう噂が耳に入ってさえ、不快な気分にならなかった。むしろ、自分は代表候補生になれたから彼という人間に出会えたのだと思うと、噂も気にならない。

いつ以来だろうか。勝負が——楽しい、と感じたのは。

人の上に立つべきもの、そして隙あらば相手を蹴落とすもの。母が逝ってからずっと、競争とは、勝負とはそういうものだった。

だけれど、一夏との勝負はどうだ？ 自分のISに目を輝かせる一夏、そして彼と言葉を交わしながら戦闘を続ける自分。驚愕と共に感じたものは、勝敗なんて超えた、掛け値なしの楽しさだ。

認めよう。彼と共に過ごすのが、この上なく楽しいと。

ならば、認めざるを得ない。彼の成すことを、この目で見続けた

いと。

かくして、セシリア・オルコットは——剣道場にいた。

「……なぜ、わたくしはここにいらんだっけ……？」

気付いたら、ここにいた。目の前には相対する2人のクラスメイト。

先ほどの対戦の余韻を味わっていたセシリアは、数日前と同じ——夏と幕の決闘を目の前に、微妙な混乱を見せていた。

唯一違うのは、隣で簪が真剣に2人を見つめているという点だった。

「……セシリアさん、そろそろ始まる」

「え、えっと……？」

「廊下で出くわした箒さんに、いきなり織斑くんが決闘を申し込んだ時は何でいきなりと思ったけど……どっちも、もうやる気みたい」「はあ、ご説明ありがとうございます……じゃなくて！ えっと、今回の対戦条件は、どうなっているんですの？」

「2人は……勝利条件は前回と一緒、としか言っていない」

再びご説明ありがとうございますと言いかけ、そこで目の前から感じる気迫が一段と凄味を増したことに気づき、セシリアは口を塞いだ。

「さて、それじゃあ始めようか、箒？」

既に面をつけていて顔は見えない一夏が、竹刀を構えながらそう言う。

対して、箒からの返事はない。

「ルール確認だ。箒が20本取るまでに俺が1本取れば、俺の勝ち。取れなければ箒の勝ち。もしくは、どちらかが気絶した場合、もしくは降参した場合もさせた側の勝ち。俺が勝ったら、1025号室に住ませてもらう。箒が勝ったら現状維持。いいな？」

「……」

「——箒！」

「あ、ああ！　それで構わん！」

「じゃあ行くぜ……セシリアさんか簪さん、合図をお願いしていいか？」

再び何かを考えて始めたセシリアを置いて、簪が前へ出た。

静かに手を挙げ、「……始めっ！」大きく振り下ろす。

前回と同じく（簪はそんなことは知らなかったが）、先手をとって攻めたのは一夏だった。

「はあああああっ！」

猪突猛進。思い切り突っ込む一夏の攻撃を難なくかわし、箒は一夏の面に一本叩き込む。

「つつつ……まだまだあ！」

一夏が竹刀を横に振り抜き、それを箒が竹刀で受け止める。

次の攻撃動作に一夏が移るまでに、箒は最短動作で胴に一本、更に一夏の攻撃範囲外へ足を運んでいた。

攻撃が空振る一夏の面に、再び一本。

「こないだより、遅いっ！」

空振りも気にせず、一夏は再び箒へと突進する。

（私は、何をしているのだ……？）

一夏と剣を交えながら、箒は考える。

自分は、別に一夏と同室であることは、嫌ではなかったはずだ。

一夏の方が嫌だと言っていたのは単純な言葉足らずであることも、喧嘩をした当日には分かっていたことだし——それなのに決闘、そして追い出す。

自分でも、思っていることとしていることが全くのちぐはぐであることぐらい、理解していた。

そして、文句すら言わず、一夏は部屋を出ていつてしまった。

もし、一夏が部屋に帰ってきた時、自分は快く部屋に入れただろうか？　——多分入れなかった。入れてもいいと考えながら、脊髄

反射で追い出しただろう。

それで、多分根に持たれてしまったのだ。一夏は再び決闘を申し出てきた。

「そんなことしなくても、もう私は怒っていない」——その一言を言うだけで済むというのに。

（一体、私は……）

考えすぎていると一夏が目の前にいて、箒は頭を振った。

今は、対戦中だ。

いつそ手を抜いて負けてしまえばいいのに。そうも考えたが、一夏はそれを許さないだろう。

彼に軽蔑されるだなんて、箒にとっては部屋がどうこう以前にどうしても考えたくないことだ。

「——やっぱり、箒は強えな……」

一夏が言う。

自分が、強い？ 箒の頭の中に、再び後悔の念が押し寄せてきた。違う、自分は強いのではない。

ただ強情なだけだ。

向かって来る一夏の動きを捕らえ、箒は竹刀を振るう。一夏が床に倒れ込んだ。

もう何本取ったかすら、彼女は数えていなかった。試合は、終わったのだろうか。脱力感と共に、箒は竹刀を床に落とす。

——次の瞬間だった。

箒の面に、思い切り竹刀が叩き付けられる。

「は……？」

箒の目が驚愕に見開かれた。

20本、取ったのではないのか？ ……私は、もしかして、負けた？

箒の考えをよそに、簪の高い声が響いた。

「……一本!!」

一夏が構えていた竹刀が、地面に落とされる。

それと同時に、一夏が床に座り込んだ。

ゆっくりと、彼は面を外してゆく。下にあった素顔は、息切れしながら少しの微笑みを零していた。

「私の、負け……か」

箒も、一夏に続いて面を外す。悲しげながらどこか清々しい顔が張り付いていた。

「おう、どうやら油断があったみたいけど——俺の、勝ちだ」

勝ちだ。その言葉を宣言されて、張り付けた顔のままに箒は涙を堪えた。

「……それでは、失礼する」

「待てよ、箒。そんなに急がなくてもいいじゃないか。どうせ、この後には特に用事もないだろう?」

「用事ならあるではないか!」とうとう、箒は叫んだ。「私は負けたんだ! 今すぐ部屋を出る準備をしてくるのだ!」

箒に威圧された一夏は、一瞬きよとした顔になり、そして——

ぶつ、と吹き出した。

「何がおかしいんだ!」

「いや、ええつと、ごめん箒、言葉足らずだったかもしれない」

言葉足らず? 一夏の意図する所がわからず、怒った顔で箒は齒軋りした。

「俺が勝つたら、1025号室に住ませてもらう……箒は出ていけなんて、言った記憶がないぜ?」

「な……?」

「まあ、確かに剣道着を脱ぐ時間はちょっとは掛かるけど……どうせ、今日は俺も箒もやることはないんだ。少しぐらいゆっくりしていけよ。って、おい箒! 待った待った、いきなり泣き出すなよ!

え！ え！？ 俺何か変なこと言ったか！？」

一夏にしてみれば本当に突然に、箒は泣き出した。しかし、それは悲しいためではなく。

「女の子を泣かせるなんて…… 織斑くん、ひどい」

「簪さん！？」

結局、数分間、箒は一夏に身体を預けて泣きつづけた。

翌朝、ホームルーム。

「それでは、1組代表は——」

「待ってください山田先生、その先は言わせません」

一夏が、青い顔で真耶の発言を遮った。「どうしました？」と真耶が一夏に尋ねる。

「何でセシリアさんじゃなくて、俺が代表なんですか！ 俺は負けましたよ？ セシリアさんに負けましたよ！？」

一夏が喚く。そして、その発言が終わると同時に、セシリアが立ち上がった。

「それはもちろん、わたくしが辞退したからで——」

「山田先生！ 他薦した人間の辞退は認められるんですか！？」

間髪入れずに問い掛けた一夏の頭に、出席簿のクリーンヒットが直撃した。もちろん千冬だ。

「やかましい。負けたなら黙って従え」

しかし、明らかに不服である一夏は、すぐに立ち上がって反論を返す。

「そうだとしても、俺は箒とまだ対戦してません！ そちらの結果で判断してもいいじゃないですか！」

更なる反論にも、千冬は動じなかった。ふん、と小さく鼻息ひとつで「残念だが——」と返す。

「昨日、お前は篠ノ之と対戦しただろう」

「はっ？ そんなこと——」していませんと言いかけて、一夏はハッとなった。まさか。いやそんな。止まる一夏に、千冬が耳打ちする。

「私は、確か模擬戦としか言わなかったからな。本人から宣告があれば、立派な試合だ」

それでも、一夏は「納得がいきません」と小声で反論する。耳聡く声を聞いた千冬は、今度は耳から口を離して「ほう、そうか。篠ノ之を泣かせるまでして」一夏がすぐに彼女の口を塞いだが、遅かった。

「泣かせたって、どういうことだろう……？」

「もしかして、一方的にいたぶったとかかな……？」

周囲からの噂話が一夏の耳にも聞こえる。汗だくになる一夏の手をどけて、千冬はニイと口を歪ませた。

「反論はないな？」

「……………」

「ほら、さっさとしないとどんどん噂が広まっていけど」

「……………はい……………」

言質を取って、千冬が「それではクラス代表は織斑一夏だ！」とクラスを纏めた。

その上で適当に泣かせたことに関する理由をでっちあげると、クラスの中で批判の声は一切上がらなかった。

1 - 1 落ち着いた日常は津波前に引く潮

「止まれっ、止まれ止まれ止まれっ！」

一夏の叫びが、アリーナに響く。その左手が、球状キーボードをカチャカチャとタイピングしている。

「まだ……遅い！」

一夏に向かつて、水色の髪を靡かせながら簪が突撃していった。両手で大型のブレードを握っている。

彼女の操るIS『打鉄』の装甲には傷のひとつも付いておらず、満身創痍の一夏とはどこまでも対照的だった。

一夏の右手に握られていた《鎖雪片》が簪を狙うが、それも呆気なく回避される。

「だあつ！ 簪さん早すぎるんだつて！」

「織斑くんが、遅いんだつてば……」

一夏の腕がタイピングを続けるが、簪のISは止まらなかった。大型ブレードが、装甲とぶつかる。

既に、《鎖雪片》によるブレードの迎撃は間に合わない。悟った一夏が右腕の《鎖雪片》を即座に手放し、空いた右手をクラッキングのためのタイピングに回す。

「間に、合えっ……！」

両手の指が、まるで独立した生物のごとく動く。タイピングが音を伴うのであれば、電子音が重なりすぎて耳に不快感を残しかねないほどだ。

それでも、判断が少しばかり遅かった。クラッキングを続けていた一夏の腕が、志半ばといった所でぴたりと止まる。

それと同時に、簪が自身の意志でブレードを量子化させた。一夏のISのシールドエネルギーは0と表示されている。

模擬戦は、一夏の完敗で終わった。

クラス代表が決まって数日。4月も下旬となった。

入学直後の、令嬢達による騒がしい質問攻めも最近になってようやく静まってきて、一夏は人にわいのわいのと噂されることなく自分のしたいことができる時間をようやく手に入れた。

その時間のほぼ全てを、彼は今のところISに関係する時間に充てている。代表候補生による指導の元IS操縦の練習。簪による球状キーボードのタイピング練習。箒と基礎体力作り。いくつかのIS関係企業からのバイト受注、姉から押し付けられたIS整備。ある意味、IS学園から見れば模範的な生徒だ。

唯一、彼が相変わらず授業を無視する傾向にあることが様々な教師の悩みの種だった。授業は上の空で、そのくせ内容を聞いてみればすらすらとそらんじるのだから、これほど質が悪い生徒もいないだろう。

しかも、授業無視して何をしているのかと見てみれば、4組の簪と共に彼女のIS制作案を考えていると言うのだ。真っ当ではないがそれなりの理由があり、総じて教師からは強く言い出せない状況だった（ちなみに、簪も授業を無視して専用機制作に没頭していたので、こちらも教師達を悩ませる一因となっていた）。

とにかく、ようやく一夏は地固めが終了し、それなりに快適な学園生活を過ごしていたということである。

「前に比べれば、どうにか滑らかに動かせるようになってきましたわね」

ピットに戻ってきた一夏に、セシリアが言う。手には紙とペンを持っており、その紙には毎回の一夏の撃墜時間が記録されていた。

少しずつだが、確かに時間は伸びている。つまり、回避もそれだけ上手くなっているということだ。

「うーん、実感がないわけでもないけど……やっぱり、すぐに上手くなるうと考えて即刻上手くなれるもんじゃないんだな」

「当たり前ですわ！　いかに操縦センスがある人間だったとしても、

練習の積み重ねをしていない者が積み重ねをした人間に勝てるわけがありません！ いいですか、一夏さん。そもそも――」

「いやいや、大丈夫。言われなくても、理論では理解してるんだ。けどやっぱり、反復と経験は重要なんだなって、最近は特にそう思うぜ」

言いたかったことを先にまとめられてしまい、セシリアは頬をぷくりと膨らます。それを一夏が苦笑しながら「まあまあ」と嗜めていると、既に着替えが終わった簪がピットに入ってきた。

「あれ、簪さん早くないか？」

「面倒だから、スーツ着たまま」

「ああ……そうか、ISスーツって吸水性高いもんな。面倒だから俺もそうするか」

宣言するが早く、吊してあった制服を適当に着込む一夏。ついでに準備してあったタオルで汗を拭き、「それじゃ、整備室の方に行こうか」とピットを出る。

そして、数分後。

3人は、第二整備室にいた。

「おおっ！ おりむーとかんちゃん、今日も来たんだ」

「そういうのほほんさんこそ。いつも手伝ってくれるのは嬉しいけど、勉強のほうはきちんとやってるのか？」

「だいじょーぶだよ、危なそうだったらおりむーに教えてもらうし」
「本音、それは他力本願すぎるよ……」

整備室には3人のほか、数人の生徒がいる。そのほとんどが2年から分岐される『整備科』に所属する生徒で、一夏たちからすれば先輩ばかりであった。唯一の例外が、姉であり整備科である布仏虚と簪に影響を受けた本音だ。

4人――いつもは筈がいるが、今日は一夏の訓練に参加していなかったのて来ていない――は訓練終了後、毎日のようにこの整備室に入り浸っている。

「ごめんねー、私たちも手伝いたいんだけど、ちょっと今は手が回

「んなくて」

「いえ、手続きなしで一画だけでも使わせてもらえてるんですから、文句なんてないですよ。ありがとうございます」

上級生に返事をしながら、いつも借りているスペースへと足を運ぶ。

そこには、未だ未完の簪専用IS『打鉄式』があった。せめてフォーマットとフイッティングさえ終わらせることができればスピースを取る必要もないのだが、未だ装着して動かすまでの完成度合いには到達していないのだ。

「さてさて、今日も制作やれ制作、つと。目標はクラス対抗戦、それまでに完成させましょつ、とね」

一夏が、提げていたバッグから愛用のノートPCを取り出す。慣れていれば球状キーボードと立体ディスプレイを利用したほうが早いのだが、まだそれに慣れていない一夏はノートPCのディスプレイと平面キーボードを使用した方が早かった。

「……織斑くん、球状キーボードの練習、こっちでも、しょうか？」

「いやいや、作業が遅くなったら困るだろ？」

「でも……」

「とにかく、この『打鉄式』の完成を急いじゃおうぜ。俺が授業無視して残り3割のISを作る時ですら、3人で2週間掛かったんだ。ここで使い慣れてない道具を使って失敗でもしたら、絶対に対抗戦には間に合わないだろ？」

「むっ……」

自分のことを考えて一夏は批判していることは簪も気付いていたが、むしろそちらの方が彼女としては不満だった。

簪の目から見て、一夏の処理能力は異常だ。平面キーボードだといつのに上級生の球状キーボードによるタイピングを抜かし、必要部品があればすぐにコイルする。そして、呼ぶ相手もセシリアと本音、それに筭のうち、必要部品に最も近い相手。的確な指示、彼自身のスキル。どこを取っても学園生徒内では頭ひとつ抜けている。

別に自分はクラス対抗戦に間に合わなくても特に問題はないのだから、一夏には更に自身の技術を向上させることを優先して欲しい。それが、簀の考えであった。

しかし、一夏も自身より簀を優先する。お互いが相手のことを考えるがゆえに、むしろうまく互いで折り合いを付けられないのだ。そして、一夏と簀では、どちらかといえば一夏の方が押しが強い。結局、いつも簀は一夏に言いくるめられていた。

今回も、やはり言いくるめられてしまったか——反論を断念して簀が眼鏡型ディスプレイに電源を入れると、その直後に整備室のドアが大きな音を立てて開いた。「一夏あ——っ!!」

「簀、うるさい」

「む、すまん……ではなく! 一夏貴様、また私をのけ者にしたな! ? 模擬戦が終わったら連絡しろと、あれほど言っておいたではないか!」

暴力的なまでの足取りで、簀が一夏に近付く。整備室の面々は特に気にするでもなく、「またか」とでも言わんばかりの調子で軽く横目で見て、小さく一笑してまた自分達の作業に戻った。

「だから、声を荒げるなつて。響くだろ」

一夏に再び指摘され、簀は僅かばかり声のボリュームを絞る。「お前が約束を守らんのが悪い! なぜ連絡しなかったのだ! ?」しかし気迫のせいなのか、確かに声は小さくなっているのに、一夏の耳には小さくは聞こえなかった。

「簀の電話番号、まだ聞いてない」

「別に電話以外でも連絡手段はあるだろう!」

「あー……そっか、部屋に行けばよかったんだな。悪い、整備室のほうに近くてそこまで気が回らなかったよ」

すぱん、と簀が一夏の頭を叩きそうになり、しかし辛うじてその腕を自分で抑えた。

一夏がやっていることが急を要する内容であり、いくら怒っていてもその邪魔になるようなことをすべきではないだろうと、彼女な

りの考えである。とはいえ彼女は、今怒らない代わりに部屋に戻ったら怒ることにしただけであつたので、実際の所一夏は助かったわけではないが。

技術的には最も下の筈は、結局セシリアと話しながら一夏や簪の指示を待つ。整備室はここ数日、いつもこのような状況だった。

「あー、セシリアさん。真後ろの棚の上から2段目、小型の部品が入ってるでしょ。その中から小さい杭みたいな」一夏が言い終わる前に、セシリアはパーツを取り出していた。「これでしょうか？」

「そう、それ2つぐらい貸して」

「……織斑くん、それだと少し小さすぎない？」「あー……、それじゃあ」今度は、指示する前に筈が一回り大きいパーツを一夏に放る。

数日間で最も変わったことといえば、セシリアと筈のアシスタントとしての熟練度だった。毎日整備室に足を運んでいるため、一夏ほど完璧ではないとはいえ、既にどこに何が収納されているかを2人はほとんど覚えていた。あうんの呼吸で、手元に欲しいパーツが届く。一夏からすれば、嬉しい誤算だ。

かくして、4人（善意で手伝っている本音を含めれば5人）のIS作成は、徐々にペースを上げていた。

——しかし。

「……ううむ」

夜。一夏は、筈が窓側のベッドで寝静まった後も、1人で起きていた。

していることは、もちろん簪の専用機制作に関わる内容である。

「現時点で、大体4割」

『打鉄式』のありとあらゆるデータを見つめながら、一夏はある計算をしていた。

明かりを落とした暗い部屋で、一夏愛用のノートPCの画面が白く光る。そしてその画面には、世間一般の高校1年生では恐らく理

解もつかぬであろう図や数式が、いくつも並べられていた。

「……やっぱり、今のペースじゃ間に合わないよなあ」

口惜しそうに、一夏が呟いた。

一夏の今していた計算。それは、セシリアと篤の成長度までふまえての、クラス対抗戦までの完成度予想だった。

画面の右上隅に、小さくパーセンテージが載っていた。76パーセントと小数点以下の少し。それが、現在の作業進行スピードで『打鉄式』がどこまで完成するかのおおまかな計算結果であった。

もちろん、弾き出された数値はあくまで『予想』の範囲のものである。しかし、平均して76パーセントでは、一夏としては納得できるものではなかった。4分の1が完成しないということは、即ち100パーセントには程遠いということなのだ。

「どうにか先輩方に手伝ってもらえればいいんだけど、どうもあつちにはあつちで忙しそうだからなあ……手伝ってもらえるとして、ギリギリ最後の3日ぐらい、かな？」

再び、一夏は計算を始める。先輩方に最後の3日手伝ってもらえた場合、どこまで完成するか。確証はないとはいえ、計算しておいて損をするということもない。

……結果は、およそ88パーセント。手伝いが入ってなお、1割と少しは完成しないという数値が弾き出された。

「くっそ……こうなったら、またサボるか？」

自分のISを作った時と同じように、授業を全てサボタージュすれば時間の問題はなんとかなるかもしれない。ほんの少しだけその考えが頭をよぎり、すぐに諦めた。

ただでさえ、もう2週間程度授業をサボっているのだ。これ以上休んでもしも単位を落としてしまつては、それこそ話にならない。「つつても調べたところ、同級生に頼れそうな相手はいないみたいだしなあ。マジでどうするかな……」

画面とにらめっこすること3分間。結局答えは出てこなかったため、一夏はそれ以上考えることをやめた。

大口を開けて欠伸をしながら、ベッドに寝転がる。ついこの間睡眠不足で倒れてから、こと睡眠に関して一夏はかなり気を使うようになっていた。

「あと、少なくとも1人の協力者と1人のデータ提供者ぐらいがいれば、なあ。……まっ、ないものねだりしても仕方ないか。とりあえず、今尽くせるベストを、だな」

その言葉を最後に、一夏は瞼を閉じた。

ものの数秒で、彼は深い眠りへと落ちて行った。

1 - 2 深夜0時はベッドタイム

「よし、やっと着いたわよ、IS学園！」

深夜、学園正面ゲートの前で大きな声が発せられた。

時間は既に12時を回っており、下手をすれば近所の家から文句が飛んでくるかもしれないだろう。

しかし、問題なのは大声より、むしろその声の主自体である。

肩から提げているのは大きなボストンバッグ。それと身体のサイズは1対2か、多少オーバーに見積もっても3程度しかない。少し釣り目で、サイドアップにしている髪が風に軽くなびいている。

見た目は子供で、頭脳も年齢ももちろん子供といって問題はない。この時間に外を出歩いてたら、まず間違いなく補導されるであろう少女こそが、声の発生源だった。

「さあて、目的地はどこだったかしらん、っと」

少女は、上着のポケットから1枚の紙切れを取り出した。破れてどこか見落としていたらいけないのでぐしゃぐしゃというほどにはしていないが、かと言って丁寧に折り畳まれているかといえば角と角とが全く合っていない。中途半端だった。

「見落としてはいいわね。本校舎1階総合事務受付。えーっと、見取り図見取り図」

再び適当に紙切れを上着にしまうと、今度は肩にかけていたボストンバッグのサイドポケットを探る。

数秒探って、それから別のサイドポケットを探る。

そちらも数秒探ったら、今度はボストンバッグを肩から降ろし、本格的に様々な物品を取り出し始めた。こころなしか、少し汗を掻いている。

そして全ての物品をバッグから取り出した後、すぐにバッグに出した物品を入れ直した。

入れ終わった瞬間に、瞳を隠すように顔にてのひらを当てた。

「あちゃー……完璧だと思ってたのに、見取り図を忘れてたか」

諦めて、少女はゲートの中に歩を進めた。ない物ねだりはしない主義、学園の中に事務受付があることは確実なのだから、見取り図ぐらいなくてもどうにかなるだろう。

せめて、人が起きている時間に到着すれば誰かに聞くぐらいできたのだが……空港から、間違えて反対側の特急電車に乗ってしまっただのが問題だった。そして、そのことに気付かず1時間以上反対方向の列車に乗り続けていたことは、更に問題だった。

——一応、諸事情で遅くなるとは伝えておいたけど、もし事務受付が閉まっていたりしたらどうしようかしら？ 野宿？

そう考えると遅刻直前の会社員のような心境になり、彼女は歩くスピードを自然と早める。カツカツカツと、彼女以外誰もいない廊下に、足音がやけに響いた。

「んー、もう。どっかに目印はないの！？ 早くベッドに潜り込みたいんだけどなあ」

いつそ職員室でも誰かはいるだろう。ならば、総合事務受付ではなくそちらでもいい気がしてきた。してきた……のだが、見取り図がないと職員室の位置だって分からなかった。少女はがっくりと肩を降ろす。

「うーん、どこかな……」

肩を落としてすら、彼女の歩みは止まっていなかった。何事も、データより自分の五感で感じたものを。それが、彼女の信条である（ISで位置情報を確認——とかしても、意味ないわよね。それじゃ、個人間秘匿通話で誰か——いや、そもそもする相手がいないじゃない！）

しかし、連絡というのはいい手段だ。そう考え、彼女は携帯を取り出した。

そしてある番号に電話を掛けようとして……いきなり、頭を誰かに叩かれた。

「ったあ！？ だ、誰……よ……千冬、さん」

「学園では織斑先生だ。こんな時間に生徒を起こそうとするな、馬鹿者」

少女の背後に立っていたのは、1年1組担任にして1年寮寮長である千冬だった。

そして、千冬と少女は、お互いに知り合いである。

「え、えとー。どうしてここに？」

「お前が予定より遅れて来ると言うから、呼び出されたに決まっているだろう」

「あー、ですよー……痛ウ!？」

再び、少女の頭に千冬の攻撃が炸裂した。少女が涙目になって千冬を見上げる（見上げなければならぬほど、2人には身長差があった）も、「手間を掛けさせた分だ」と当たり前のように千冬に回避されては言葉も出なかった。

「さて、では手続きに行くぞ、ついてこい」

「……明日の朝じゃダメですか？」

「残念だが、手続きを終わらせないと寮は使えん。上が五月蠅くてな」既に教師に会っているのだから、と少女は尋ねてみたが、即座に駄目出しを喰らった。「野宿でいいなら明日に回すが、どちらがいい？」

ニヒルに笑う千冬。長旅で疲れている少女にとって、寮の柔らかいベッドとどこかのソファープラス持ってきたタオルでは、勝負にはならなかった。「……手続きする方向で、お願いします」

分かればいい、と千冬が歩き出し、それに少女も付いて行く。目的地だった総合事務受付は、話していた場所から歩いて3分もしない場所にあった。しかも、まだ電気が灯っている。

これならば、苦手な千冬に会わなくとも自分ひとりで辿り着けたかもしれない。そんなことを少女は考えるが、既に時遅しだ。

幸いなことに、手続き自体はそれほど面倒臭いものではなかった。「ええと、それじゃあ手続きは終わりです。ふああ……っと、すいません!」

「いえ、私が遅れたのが原因ですから気にしないで下さい。こちらこそ夜遅くに、すいませんでした」

「いえいえそんな！ IS学園へようこそ、鳳鈴音さん。部屋の確認などは、寮長の織斑先生に聞いて下さい。これが鍵です」

本当であればひったくるように奪い取りたい少女——鈴音だったが、流石に対応としてそれはまずいだろうと、疲れた頭で最低限それだけは理解していた。

鈴音が鍵を受け取ると、そのすぐ後に事務受付の電灯は落ちた。

どうやら、彼女の転入手続きが、この日（正確に言えば十数分前に日付は変わっているが）最後の受付嬢の仕事だったらしい。

「こつちだ」隣で立っていた千冬に声を掛けられ、鈴音は再び千冬の後ろにつく。

「千冬さん、寮長だったんですねひいっ！」千冬の打撃が、後ろに目がついているかの如き正確さで、鈴音を捉えた。「織斑先生だ、と先程も言ったぞ？」

「えと、織斑先生」

「何だ」

「一夏つて、元気にしてますか？」

鈴音の質問に、千冬は軽く頭を痛めた。

「元気にとは少し違うが、まあ、自分のやりたいことを思い切りやっているな。授業もまともに聞かずにだが。おかげであいつ、職員室では教員泣かせと名高いぞ」

あはは、と鈴音は声だけで笑った。なるほどそれは確かに一夏らしいと、簡単に納得してしまったためだ。

千冬と知り合いである鈴音は、もちろんのこと一夏とも知り合いだった。というか、逆だ。一夏と知り合って、その一夏と友好関係を築いたからこそ姉の千冬とも知り合ったのだ。

「逆に聞くんが——お前は、まだあいつが好きなのか？」

一夏と会った頃の思い出を頭の中で掘り返していると、いきなり千冬からそんなことを聞かれた。一瞬で、鈴音の顔が赤く染まっていく。

「ち、千冬さんっ！？ あたあっ！ いや、今のは急すぎ——」

「冗談だ、冗談」

千冬が笑うが、どうも冗談というには多少の悪意を感じる。決して嫌な気分になるような悪意ではないのだが、聞かれて恥ずかしいことには変わりなかった。

「それで、どうなんだ」

「冗談じゃないじゃないですか！」

「ん？ いや、思ったよりオーバーなりアクションをしたからな。そんな行動をされれば、人として気になるのは当然だろう？」

駄目だ、この人には勝てない。すぐにその結論に至った鈴音は、観念して「そりゃあ、まあ……」と、曖昧ながらも宣言した。

そして再び千冬が笑い出す。

「何か変なこと言いました!？」

「いや別に、本当に言うとは思ってなかったからな。ほら、ここがお前の部屋だ」

千冬の手の上で踊らされていた鈴音は、今自分が泊まる部屋に向かっていったことなどすっかり忘れていたようだ。

一瞬きよんとして、それから思い出したかのようにポケットから鍵を取り出す。

「それじゃあ、私はここで失礼させてもらう。まだ少し仕事が残っているのだな」

「はい、ありがとうございます……」

今の数秒の会話だけで、今日の疲れは一気に倍増した。そんなことを思いつつ、鈴音は右手の鍵を鍵穴に差し込んだ。

カチリと音が鳴り、扉が開く。

中には誰もいなかった。もしかしたら、転校生が正式な部屋割りに変わるまで、一時的にあてがわれる部屋なのかもしれない。

一日分の疲れが貯まり込んでいた鈴音は、シャワーで身体を流すこともせず、すぐにベッドに飛び込んだ。

「あつ、織斑くん！」

「ああ、おはよう」

朝。

一夏に対する大量の質問攻めは最近では確かに減ったとはいえ、それで一夏が唯一のIS学園男子生徒であるという事実は変わらない。

言い換えれば、入学当初と比べて、別に一夏の人気が下がったというわけではないということだ。むしろ、（本人は自覚していないが）見た目もよくて成績も悪くない——どころか学年首席レベル——ため、人気は順調な右肩上がりを見せていた。

自然、そういう人間の周囲には友好関係が広がっていく。そして入学当初に見られた生徒同士の抜け駆け禁止の雰囲気は既に消え去っている。結果として、

「おりむー、おはよー」

「のほほんさん、おはよ」

一夏へと向けられる挨拶の量は、日に日に増加していった。

そしてその現象は、もちろん自身のクラス内でも例外ではない。

一夏が席に着けば、周囲には箒とセシリアをはじめ、大勢のクラスメイトが集まって来る。

「おはよう！ 織斑くん、転入生の噂って知ってる？」

「おはよ、相川さん。ええっと……今まで空室だった寮の部屋のひとつが、昨晚使われていた形跡があった、だっけ？ まだ新学期から1ヶ月も経ってないってのに、珍しいよな」

「さすが、おりむーは情報が早いねー」

「あつ、それと確か、中国の代表候補生らしいよ」

代表候補生、という言葉にセシリアがぴくりと反応した。彼女自身、イギリス代表候補生である。

「代表候補生、ですか……専用機は持っているのかしら？」

「あ、それは俺も気になるな。専用機持ちで、なおかつ協力的な人間だったら非常にありがたい」

「何だ一夏、興味があるのか？」

「ん？ おう、すっげえ興味あるぜ。何せ、ISの戦闘データってのはないよりある方がIS完成は早くなる。熟練度が高い操縦者のデータならなおさらな。今のところセシリアさんの遠距離戦闘偏重のデータしか専用機の戦闘データは手元にないから、もし格闘戦が得意な専用機だったらデータが欲しい」

単純に「興味がある」と言われた時はどう叱ってやろうと考えた筈だったが、一夏の興味対象はあまりにもISに偏っていたので、そういえばこういうヤツだったと溜息を吐くだけに留まった。

「織斑くん、整備室通いもいいけど、対抗戦に向けての練習も欠かさないでね？」

「そうそう！ 何せ優勝クラスには、食堂デザートの半年間フリーパス！」

「私たちの舌のためにも、是非優勝を！」

女子たちが口々に言い立ててくるため、一夏は「ぜ、善処します……」と返事をするしかない。

一夏が毎日整備室に通い詰めているというのは、既に1組生徒としては周知の事実だった。しかし、その整備室で一体何をしているのかまでは、このクラスにおいては筈、セシリア、本音の3人を除きまだ誰にも知られていない。

これで、「他のクラスの代表候補生の専用機を作るのを手伝ってます」なんて言ったら、もしかすると大ブライニングが返ってくるかもしれない。一夏は肝に命じておいた。

「……あ」

「どうしたの、織斑くん？」

「いや、もし転入生が専用機持ちだったら、それだけクラス対抗戦は勝ちにくくなるんじゃないかな、って」

「大丈夫なんじゃない？ もう全部のクラスで代表は決定してるらしいし。転入生が自分からクラス代表の変更を頼みでもしない限り」

「そっか……一夏は、専用機持ちがクラス代表になると困るのね？」

「んー、まあ、クラスみんながフリーパスを狙ってるなら——」

そこまで言いかけて、一夏は今の誰かからの発言に疑問を覚えた。

「へえそっ。なるほど。これはいいこと聞いたわ」

聞き慣れているが、しかしクラスメイトの声ではない。そして、自分を一夏と呼び捨てにする学園生徒は、第1人しかいなかったはずだ。

一夏の首が、声の方向を機械的に振り向く。内心ではダラダラと汗を掻いていた。

いたのは、彼のちょうど背後であつた。小悪魔的な笑みを浮かべた小柄な少女。その微笑みのまま右手を振って「久しぶりー」と挨拶されて、ようやく一夏は彼女に返事をするに至つた。

「……鈴音？　もしかして、転入生って、お前？」

1 - 3 授業スルーは狩りの餌食

知り合いのような間柄に、箒とセシリアは緊張感を増幅させた。

「一夏さん、この方は……？」

「……こいつはホウ・スズノン。鳳凰の鳳の字が名字でホウ、鈴に音って書いてスズノンが名前」

「はいどうもスズノンです、よろしく！」

「スズノンさん……変わった名前ですね。よろしくお願いしますわ」

「そこら辺は親に聞いて——て違うでしょ！ 『普通その字ならスズネだろ！』とかそういうツツコミを入れなさいよ！ 何スズノンって！？ 駆け出しアイドルか！」

がーっと、肉食獣の雄叫びを連想するような声で鈴音が怒る。

「ふむ、ではスズネという名前なのか」

「そうそう、ホウ・スズネ……違うっ！ ホウ・スズネでもオオトリ・スズネでもない！ それと一夏、舌打ちするな！ 絶対オオトリ・スズネを言おうとしてたでしょ！？」

「あ、ばれた？」

「全部顔に書いてあつたわよ！」

「げっ！ 箒、もしかして油性ペンで俺の顔に落書きしたのか！？ やめてくれよ、石鹸使わないと落ちないだろ！」

「ほんっと、油性ペンはあたしも酷いと思うわーってそうじゃなくて！ あんたわざと話題を逸らしてるでしょ！」

「あ、ばれた？」

「それ二度目だから！」

目の前で繰り出される小規模なコントのような、もしくはオーバーな漫才のようなやりとりに、警戒の姿勢をとっていた箒・セシリアもついつい呆れた顔となる。

「んーっと、じゃあ……」と一夏が言えば「わざわざ別の呼び方を

考えんでいいっ」と鈴音が突っ込み、「おっ！ オオトリ・リンネはどうだ？」と問い掛けると「その名字はあたしが言ったやつでしようが！ 使いまわしするぐらいならちゃんと紹介しなさい、ってか『どうだ』ってもう言う前から捏造がバレバレじゃないの！」「あ、そうかしまった！」と返事がやり取りされる。

そんなこんなで一通りコントを終えた（既に、クラス中の女子が注目していた）後、ようやくと2人は真面目な顔に戻った。

「それで鈴。もう一度聞くけど、お前が転入生なのか？」

「この学園の制服を着てるんだから、当然でしょ」自分の服装を強調するかのように、腰に手を当てて鈴音が仁王立ちする。どちらかといえば、お嬢様然としたセシリアの方が似合いそうなボーシングだ。「もしかして、これが精巧なコスプレか何かに見えるとも？」「侵入して予備の制服を奪っていくぐらい、鈴ならやりかねないんじゃないか？」

真面目な顔に戻った。と周囲の生徒は思ったはずなのだが、それもほんの一瞬で、再び2人はコントの世界に入って行った。

「何でそんな泥棒みたいな真似せにやなんのよ！」

「小遣いを使用したくないがために泥棒ですかー、貴女って結構非道な人だったんですねー僕幻滅しちゃいますーあいたっ！？」

「次言ったら殴る！」「もう殴ってんだろ！」

周囲の女子が、「駄目だこりゃ」「やら」話は後で聞こつと「やら言いながら、続々と退散してゆく。

そんな中で残ったのは、もちろん箒とセシリアだった。

しかし、「おい、一夏……」と箒が声を掛けても「あの、ちよつと……」とセシリアが声を掛けても、2人は2人の世界に入りっぱなしだった。

仕方なく、2人の言葉の端々からおおまかな関係を予想する2人。「それにしても久しぶりだなー！」からやはり知り合いであること、「1年ぶりだっけ、元気してた？」からやはりのやはり知り合いであること、「そうだな、元気がどうかは俺自身は知らないけど、ま

あ楽しくはやってるよ。ってことは元気にやってるってことでいいんじゃないかな」「あはは、千冬さんと同じこと言ってるわね」から目の前の少女が千冬とも知り合いであること、「お、千冬姉さんとももう会ったんだ。そういえば鈴の方は元気にしてたのか?」から——「知り合いであることしか分からんではないか!」一向に話が進展を見せないため、とうとう篤が爆発した。

「ん、ああ。そういえば説明してなかったか。こいつは鳳鈴音。名前の読み方は結局、ファン・リンインが一番正しい」

周囲の女子のうち数名が、やっと名前が出てきてホッとした。考えてみれば、彼女は中国の代表候補生と噂が出ていたのだ。スズネだのリンネだのでは、日本人の名前になってしまふ。スズノンは——流石にその名前が正しいとは、誰も考えてはいないようだった。

「で、どこから説明しようか……とりあえず、俺の知り合いだ」ガタガタツ! と、つい先ほど安堵したばかりの生徒一同が、更に篤とセシリアがずっとこける。一夏の言葉足らず、そしてミスマツチな言葉選択は、本日もやはり健在のようだ。

「あれ、俺何か変なこと言ったか?」

「さあ……あいてっ!?!」

首を傾げていた鈴音が、いきなり頭を抱えてうずくまる。何事かと一夏が彼女の方を見ようとしたところで、「うあっ!」一夏の頭にも同じ衝撃が走った。

続けざまに、篤とセシリアも頭にダメージを喰らってふさぎ込む。

「ホームルームだ。席に着け、馬鹿者」

攻撃を繰り出したのは1組担任、千冬だった。一夏と周囲の女子3人のみでなく、ちょっと前まで立ち上がっていた生徒は皆一様に頭を抱えてうずくまっていた。心なしか、その頭から煙のようなものが立ち上っている幻覚が、座っていた生徒からは見えた。

慌てて一夏は時計を確認する。なんと、もうチャイムは数分前に鳴っていたようだ。話に夢中で完璧に聞き逃していたらしい。

「織斑先生、頭が痛いです」

「痛くしないと罰にならないだろうが」

続いて、鈴音が起き上が……って、脱兎の如く慌てて入口の方へ駆けていった。

（そういえば鈴、千冬姉さんによくビシバシしごかれてたからなあ）

「それじゃ、また後で！ 昼食は食堂よね？」

「ああ、そうだけど……」

「いつ頃来るの——ごめんなさい千冬さん！ 叩かないで！」

鈴音の願いも虚しく、千冬は再び鈴音の頭を叩くのだった。それも2回。

「学校では織斑先生だ。さっさと自分のクラスに行け」

（それにしても、まさか鈴の奴が入学してくるとはな）

今日も授業は上の空で、一夏は考え事に耽る。

唯一いつもと違うのは、ノートすら出さず頬杖をついていることだ。日和った老人のようにも見えるが、特に一夏は気にしなかった。（何でこのタイミングなのか——は、大体予想がつくからいいとして）

一応下旬と言って間違いない時期に入ったとはいえ、今はまだ4月。普通に入学するのならばおかしくないが、この時期に『転入』というのは少々おかしい。

しかし、それもあくまで一般論の話だ。『織斑一夏』という特異ケースが学園にいるのだから、同学年に自国の代表である人間を送り込みたいという思惑ぐらいは、一夏にだって理解できた。

ISは世界のパワーバランスを一瞬で崩した。それに男性が乗れる可能性が出てきたとなれば、再び世界情勢が変わる可能性だってある。

（ってことは、1学期の間にもう少し転入生が入ってくる可能性もあるってことだよな）

基本的に、代表候補生、そして専用機持ちの生徒はそこまで多くない。一夏が調べた限りでは、専用機持ちは2年生に2人、3年生に1人だけである。

だというのに、1年生には現時点でも専用機持ちが4人はいる（簪の未完成のものも含めるとして、だが）。

鈴の専用機が何かは知らないが、彼女が先程自分に突っ込みを入れた時見えたブレスレットがISの待機状態であることを、一夏は見抜いていた。

「あー、織斑。おい、聞いてるか？」

つかつかと、千冬が一夏へ近付く。

（各国からの介入はないなんて銘打っておきながら、早速介入してくる国があるってのはな。一番最初が知り合いなのは助かったと言えば助かった、のか……？）

もしかしたら、各国の自分と同じ年齢の代表候補生を調べておいてもらったほうがいいかもしれない。一応の結論に達したところで、すばーん。

考え事に熱中しすぎていたためだろう。自身に迫っていた千冬の出席簿に、一夏は気付いていないのだった。

（これは、やはりさっきの奴のことを考えているのか？）

一夏のすぐ近くの席で、簪は彼のことを注意深く観察していた。

ノートをとっているフリをしながら、横目で何もしていない一夏を見つめる。ちょうど、返事をしなかった一夏が千冬に叩かれたところだった。

「痛たたた……はい、何でしょう」

「何でしょうじゃないだろう。とうとう授業の完全放棄をしなくなっただか？」

「いや、そういうわけじゃないんですけど……すいません、ちょっと」

と考え事を」

考え事。この単語が聞こえて、箒は更に焦る。やはり先程の鳳という少女のことを考えているのではないだろうか？　そもそも、あの2人は知り合いだとして、詳しくはどういう間柄なのだろうか？（もしかして、かかか、彼女だったりするの？　まさかそんなことない、よな！？　けれど、話し方はやけに親密に見えたし……ああもう、誰なんだ！）

一夏に好意を寄せている箒からしてみれば、不安で仕方がない。横目で見ている一夏は、ノートを取り出して頬杖をやめた。多分、今からいつもの「形だけ受講」を始めるつもりなのだろう。

なら、観察をこれ以上続けても無駄かもしれない。横目で見るのはやめて、ノートと考え事の方に集中しようか——「篠ノ之」

「は、はいっ!？」

「何だ、それは」

いつの間にか目の前に立っていた千冬が、箒の机を指差す。

机の上に乗っているものといえば、カモフラージュで開いたノートとペンだ。それをそのまま、「え、の、ノートですけど……」と、箒は答えた。

「そうか、それがノートか。ちょっとそれ、読んでみる」

読んでみるとは、つまり……読むだけ、だよな？　箒はノートに目を写すと、自分の書いていたノートの一面を見て唖然とした。

黒鉛を擦り減らして書かれていたのは、絡まった毛糸のような幾何学模様だった。誰だ、こんなものを書いたのは。私以外ノートには触っていないのだから、私だ。

「あ、えっと、その、これはですね!」

「これは？」

箒の頭に、良い言い訳は思い浮かばなかった。良い言い訳が思い浮かばなかった頭に、ばしんと音を立てて出席簿が振り下ろされた。

（あの2人は、さつきから何度も何度も……）

セシリアの席は、一夏や箒と違って最前列ではない。よもや千冬からの指摘はここまでは回ってくるまいと、前2人と違って千冬を完璧に無視して考え事をしていた。

（とにかく、鈴音さんという方は、一夏さんと昼食の時に会う予定。これだけは、確かなわけですから、その時に2人の間柄を調べませんと）

そこまで考えて、セシリアはハッと気付く。なぜ、自分はこんなに2人の関係を調べることに躍起になっているのだろうか？

別に、一夏が誰とどんな友好関係を持っていようと、自分には関係ないではないか。それなら、別に調べようとしなくても、代表候補生同士でそれなりの関係を保っていればいいはずだ。

（クラス代表の方はわたくしの勝ちも完全な運だったので辞退しましたが、そういうえば代表決定戦が終わった以上、整備室に通う必要もないのでは……）

思えば、自分から一夏に関わろうとしすぎているような気もする。気もする以前に、明らかに他の生徒以上に関わっている。

なぜだろう——？　そこに明確な理由が見いだせず、セシリアは軽く混乱した。

「オルコット」千冬がセシリアを呼ぶ。まさか呼ばれることはないだろうと甘く見ていたセシリアだが、流石は複数のビットを同時に操ることができるセシリア。考え事をしていても、「はい？」とすぐに返答することができた。

しかし、だというのにセシリアの頭に出席簿は落ちてくる。

「あいたっ！　な、なぜですの!？」

「周りを見んか」

千冬に示唆されて、セシリアは周囲の生徒を見回す。別段、変化はないように見えるが——何があるのだろうか？

理解ができなかったセシリアに対し、千冬は付け足した。

「見るのは生徒ではない、机の上だ」

「机の上……あら？」

自分の机の上には、ノートと数学の教科書。そして他の生徒の机の上には、ノートと『IS理論』に関する教科書。

おかしい。その授業は、次の時間の――

ふと時計の短針が目に入り、セシリアは気付いた。気付かぬうちに、もう1時間が警経過していると。

「い、いつの間に……？」

「ほう。授業は聞いていなかったと認めるわけだな？」

「いえ、決してそんなことは……！」

セシリアが言い終わる前に、出席簿が頭に放たれた。

今日だけで10回以上は生徒の頭を攻撃していると言っのに、出席簿は壊そうな雰囲気は一切漂わせなかった。

1-4 サイドアッパーは即戦力

「……あら、一夏さんはどちらへ？」

午前日程終了後。

結局本日4回に渡り千冬に叩かれたセシリアは、考え事の主体であつた一夏に「お前のせいで叩かれた！」と（多少理不尽な）文句を言おうとしたのだが——チャームと同時にいざ行かんとセシリアが一夏の席へ直行したら、彼は既に姿を消していた。

授業終了はつい直前、そして起立した女子たちに阻まれて一夏の姿が見えなくなったのも一瞬。ならば、そこまで遠くには行っていないはずだ。

辺りをキョロキョロ見回すが、教室内に男子制服は見えない。ということは……

廊下の外を走る筈の姿が見えて、セシリアは確信した。

「終了と同時に、食堂へ行ったというわけですね……！」
場所を理解して、慌ててセシリアも教室を飛び出した。

チャームと同時に駆け出した一夏は、既に食堂で食券を買っていた。

彼は、昼食のウェイトを最も高くする人間である。今日は何にしようかと考え、ラーメンとチャーハンをそれぞれ1人前ずつ食べることにした。

食券を食堂のおばさん——おばちゃんと呼ぶと怒られるらしいので、できるだけ一夏はお姉さんと呼ぶようにしているが——に渡すと、背後から声が掛かった。

「遅かったじゃない」

振り返ると、そこには既にラーメンを持った鈴音がいた。

「いや、授業終了したらすぐ走ってきたんだけどな……」

「じゃあ走るのが遅いってことね」

「お前、実は3時間目終了時からずっとここにいたんじゃないかな？」

「あるわけないでしょ！」

そこで料理ができたぞと呼ばれ、一夏はラーメンとチャーハンがぎりぎり乗った盆を受け取る。受け取ったら、食堂の入口に息を切らせた箒が姿を見せた。

続けて、同じく息を切らせたセシリアがその後ろに到着する。

が、一夏はそれに気付かなかった。

「さて、席はどこが空いてるか——2人席はどこにもねーな」

「んじゃ、仕方ないから4人席にしましょ」

酸素を大きく吸い込みつつも、箒とセシリアは自分達の座る席がしつかり確保されていることに安堵した。

「……あ、簪さんと本音さん。今から飯なんだけど、4人席を2人で使うつてもつたないしさ、相席しない？」

がつくりした。

「うん、いいけど……」

自分達の苦労は一体……。がつくりから膝を付くポーズへ、入口の2人は変化した。食堂の入口を塞いでいて、邪魔だったのは言うまでもない。

結局、着席前に入口付近を見た本音が「あの2人はいいのー？」と尋ねたので、一同は6人席で食事をする事になった。

「……なんか、思った以上に大所帯になったな」

一夏が言つと、「お前のせいだ！」と言いながら箒が一夏の頭をわしづかむ。そのまま爪を食い込ませる箒、そして悲痛な叫びを掠れた声で叫ぶ一夏。彼にしてみれば不条理極まりないが、残念なことに誰も一夏を助けはしなかった。

「それで、貴女は？」

一夏の状況はまるまる無視して、セシリアが鈴音に聞く。
多少不機嫌そうな顔で「名前ならさつきも言っただじゃない」と鈴

音が答えると、今度は箒がクローを一夏にひっつけたまま「そういうことではない！」と返した。

「じゃあ一体、何が聞きたいってのよ」

「一夏とどういふ関係があるかに決まっているだろう。あれだけ最初に話しておいて、まさか初対面ということはないよな？」

「当たり前でしょ。それより、そろそろ一夏のこと離してあげなよ？ 流石に青い顔で倒れられちゃ、胃に悪いんじゃない？」

あつ、と声を出して箒が一夏の頭を手放す。授業中も頭を押さえた一夏だが、今度はてっぺんではなく側面側を押さえて涙目になっていた。

「ほら一夏、説明しなさい」

「うえっ！？ ここは痛みに悶えてる人間を慰める場面じゃないのかよ！」

「慰められる立場にいと本気で思ってるなら、もう一度喰らった方がいいかもね」

隣で箒が無言で腕を上げたため、慌てて一夏が「いやホント大丈夫ですなんかごめんなさい！」と取り繕う。

そして居住まいを正して、ようやっと説明を始めた。

「えっと、こいつは鳳——」

すぱーん。箒から飛んだ一撃は、一夏からすれば千冬と遜色なかった。

「名前はもう聞いたと言っているだろう！」

「紹介の時に名前言わないってなんか調子狂うじゃないか！」

「知らん！ そんなこだわり捨てろ！」

「全く……んじゃ説明するけど、鈴は俺の幼馴染だよ。箒は4年生の年度末に引っ越しただろ？ 鈴と会ったのはそのすぐ後、つまり5年生になりたての頃だ。えっと……確か、鈴と簪さんは一度だけ会ったことあるよな？」

こくりと2人が頷く。

「で、5年から中2の末まで4年間同じ学校だったんだ。ちなみに、

俺の小型ディスプレイのオンオフボタンを壊したのも鈴だ」

「まだ根に持ってる——っていうか、まだ使ってるの、あれ！？
確か使いはじめたのって、中学1年の時よね！？」

「それから俺の初代ノートPCを破壊したのも鈴だし、昔俺の携帯を手渡ししろって言ったのに投げ寄越して壊したのも鈴だ」

さりげなく、周囲の4人が鈴音から携帯を遠ざける。

「基本、それぐらいかな。質問はいいけど、その前に冷めちまうから飯にしようぜ」

「そうねー、あたしは伸びちゃうし。あ、言い忘れてたけどあたしの呼び方は鈴でいいわよ」

自分で言って、それから自分が1番早く箸に手を付ける一夏と鈴音。一夏のほうは2人前の食事を今から消費するのだし、鈴音は麺類だから、急ぎたいというのは当然と言えば当然かもしれないが。

周囲も、触発されて自身の食事へと箸を動かした。箸はきつねうどんを、セシリアは洋食セットを、簪はかき揚げうどんを。全員代わり映えしないなあ、と一夏はひっそり思った。

「それで、一夏は何でISなんか動かしたのよ？」

「なんでって言われても、なあ。倉持技研のバイトでISの整備をすることになって、人がいなくなつた時にちよつと寄り掛かったらいきなり動き出した」

「ちよつと、何よそれ！」鈴音が吹き出した。「ってことは、動かそうとして動かしたんじゃないく勝手に動いちゃつたのね？」

「そういうことになるな、多分。それより鈴音こそ、中国に帰つた後にまさか代表候補生になつてるとは思いもしなかつたぜ」

「まあね、色々あつたのよ。あ！せつかくだから今日の放課後とか、外で思い出話でもない？」

なにげない提案だったが、一夏はばつの悪そうな表情になつた。

「どーしたの、あからさまに無理ですって顔しちゃって」

「いや、そのだな……」

一夏が事情を説明する前に、「悪いが、一夏は放課後に用事があ

る」と箒が横から口を挟む。次いでセシリアが「それも、来月のクラス対抗戦まで」と付け足した。

「来月のクラス対抗戦までえ？　一夏、用事って何よ？」

「それは、」「織斑くん自身の訓練と、私の専用機作り……」今度は、箒が一夏の台詞を横取りした。

「箒の専用機作り？　何？　この時期からもうIS作りなんてしてんの！？」

一夏と予定が作れないことから残念そうな反応を見せるかと思いきや、鈴音はむしろ目を輝かせて4人に問い掛けた。

一夏に、ではなく4人に、である。

「実は、かくかくしかじかでだな」

「かくかくしかじかじゃ分かんないから、もう少し理由が分かるように説明しなさい」

「色々あつたんだ」

「その色々を説明しなさいって言ってんでしょーが！」

「色々。様々な、の類語で」「色々って単語の意味を説明しろなんて言ってない！」

観念して、一夏は現在の状況の説明を始めた。

自分の専用機の作成をするため、倉持技研が箒の専用機制作を後回しにしたこと。

完成が遅れるぐらいなら自分で作ると、箒がコアごとISを引き取ったこと。

どうにか制作を再開させられないかと画策し、自分も専用機を引き取ったこと。

自分が専用機を引き取ることは成功したが、費用の問題で結局箒の専用機制作は再開されなかったこと。

そして、同時進行でセシリアとのクラス代表決定戦が迫っていたため、自分の専用機制作を優先したこと。

結果として、今箒の専用機を作成しているのだ、ということ。

全で一夏が話した頃には、全員食事をほとんど終えていた。一夏

は食事の合間合間で話していたのでまだ残っていたが、それでも3分の2は胃袋に納めていた。

「はーん、なるほどねえ……ってことは、一夏の専用機はもう完成してるのね？」

「ああ、別のクラスの鈴に性能を教えることはできないけどな」

「え？ 別にいいじゃない。何で隠しておく必要があるのよ？」

心底、鈴は不思議そうな顔をする。

「だって、俺クラス代表なんだぜ？ 他のクラスに情報を流すわけにはいかんだろ」

「なるほど……」ああ、と鈴は納得したような顔になり、そして「つてええ！？ 一夏がクラス代表なの！？ つてことはその2人の試合は、一夏の勝ち？」と途端に驚きをあらわにした。

「そうですね」「いや違う」一夏とセシリアの返事が、全く正反対の結論を出しながら被さった。

「どっちよ」

「試合結果は俺の負けだけど、セシリアさんが辞退して俺が代表になった」と一夏。

「わたくしの負けで一夏さんが代表になった、そのまんまですわね」とセシリア。

「ああもう、結局どっちなの！ 見た人、教えなさいよ！」

「俺の負けだった！」「いや、わたくしの負けでしたわ！」「言い合いを始めた2人を無視して、鈴音が他3人に尋ねる。

溜息と共に答えたのは、簪だった。

「えっと、試合に勝ったのはセシリアさん……で、その勝ち方が『機能停止前にブレードがたまたま装甲に掠る』だったから、セシリアさんは納得してないの」

「ふーん、それでクラス代表ねえ。一夏、そういう仕事は面倒臭がりそうだし、さぞかしげんなりしてたでしょ。つて、いつまで謙遜の言い争いしてんのよその2人！」

2人を止めるために、鈴音が一夏の額にデコピンを放った。一夏

の額にのみである。流石に、今日が初対面（教室を合わせれば2回目だが）であるセシリアに攻撃をすることは憚られたようだ。

一夏からすれば、攻撃ばかりされて散々なのだが。今日だけで脳みその何パーセントが死滅したのか、分かったものではない。

「で、結局、本当は簪の専用機制作を優先するはずが、一夏の専用機制作を優先して作った——ってことね？ そのツケが今になって来ていると」

「そういうわけだな。とりあえず遊ぶ暇ができるとすれば、簪さんの専用機を作り終わってからになると思う」

「……大体の見通しは立ってるんでしょ？ いつ頃終わるの？」

痛いところを突かれて、一夏は黙り込んだ。鈴音の勘が昔からやけに冴えていることを、今更になって思い出した。

「……このままのペースでいくと、クラス対抗戦に間に合わない可能性がある」

初めてそのことを耳にして、いつも手伝っているメンバーの3人が驚きをあらわにした。てっきり、今のペースで間に合うものだと思ってたのだ。

いつものメンバーで唯一驚かなかったのは簪のみだった。

「やっぱり……織斑くんの見通しも、そのぐらいなんだ」

「ってことは、簪さんも大体そのぐらいの結果って出てる？」

「うん……マルチロックオンシステムがどれぐらいで完成するかにもよるけど、上手く進んだとしても、今の5人体制だと8割がいいところ、かな」

「ちょっとお待ち下さい！ それは、本当なのですか！？」

机を両手で叩き、勢いよく立ち上がりながら慌ててセシリアが聞くが、一夏と簪は互いに肯定した。

2人の共通認識ならば多分、間違いないのだろう。と、2人を信用していたセシリアは、信用していたがゆえにがつくりと席に座り込んだ。

「——ってことは、あたしも手伝ったほうがいいみたいね？」

全員の意気が消沈しかけたところで、鈴がそんな言葉を口にした。それと共に、一夏と簪がはっとした顔になる。その2人の表情の変化に気付かなかった箒は、すぐ鈴に食ってかかった。

「だから、他のクラスの生徒が手伝ったら情報が漏れてしまうと……！」

「だったら、一夏だってクラス代表じゃない」

「一夏の場合は、既に一方的にばれているのだから問題ないだろう！　一夏もなぜ反論しない……の、だ」

そこで、ようやく一夏の様子が先ほどまでと違うことに、箒は気付いた。どこに持っていたやら愛用のノートPCを出して、簪と共に画面を覗いていた。手は力チャ力チャと小気味よい音を立て、キーをタイピングしている。

「……そうだよ、すっかり忘れてた」その表情は、打って変わって明るくなっていた。

「決定ね。それじゃ、続きは放課後に話しましょ」

自分の食べ終わった盆を持って、鈴音は一人すたこらと席を去ってゆく。「おう」とてのひらを上げて一夏が返事をした時に、もう鈴音は食器を全て返した後だった。

時計を確認したら、もう後3分でチャイムが鳴ってしまう。急に明るくなった一夏に首を傾げながら、箒とセシリアもその場を後にした。

「かんちゃん、おりむー、授業始まっちゃうよ？」

唯一残った本音が2人に呼び掛けるが、肝心の2人は耳にすら入っていない。本音は少しむくれたが、「でも、こっちのほうが面白そうだしー」と自分までその場に残った。

「……8割7分」

一夏のタイピングが終わると、スクリーンには87パーセントと少し、という数字と記号が表示される。

もちろん、昨晚一夏のPCに表示されていた数字は、これと同じような算出方法で出てきた結果。すなわち、

「まだ100には届かないけど……」

「もしかしたら、間に合うかも！」

希望が、少しでも見えはじめたということだった。

チャイムが鳴って、一夏簪本音の3人は、千冬に思いっきり叩かれた。

2 - 1 彼女は然るべき道筋で

学生ノートとシャープペンシルが恋人の眼鏡小僧。それが、鳳鈴音が織斑一夏に持った、一番最初の印象であった。

「あたしは鳳鈴音、よろしく！」

小学生5年生の春、新学期。鳳鈴音は、日本のある学校へと転校してきた。

親は料理屋、親の仲はすこぶる良い。中国における一人っ子政策のあおりを受けてだろうか、兄弟姉妹は今のところいない。

当の本人はそこそこの自信家で、また澆刺として更に人懐こそうな雰囲気を出す少女だった。

その人懐こさ、可愛い部類に入ると断言して問題ないであろう容姿、それに珍しい外国人の転校生ということで、彼女の最初の自己紹介はそこそこの成功を収めた。

「それじゃあ、鳳さんは空いてる席で……あ、織斑くんか。あの眼鏡掛けた子の隣の席に座ってくださいね」

挨拶が終了したところで、教師に自分の席を告げられた鈴は、はいと元氣よく返事をして指差された席へ歩いていった。眼鏡を掛けた子の隣もなにも、教室の中に空いている席は1つしかなかったため、彼女は迷いもなかった。

しかし、席に座る前に、自分の席の隣に座っていた少年が、彼女には気になった。

さきほど教師が「織斑くんか」ともらしていたため、その眼鏡をかけた少年の名前か名字は「オリムラ」だというのは分かる。

ノートを広げてカリカリと、何やら珍妙な文字を書き連ねている。横目で軽く内容を確認しようとした鈴音は、その文章が知識レベルで理解できなかった。

そして、自分の分からないこと、即ち面白くないもの。多くの無

邪気な子供が持ちやすいそんな感情をやはり持った鈴音は、彼に会って初めての第一声を発した。

「あんたがオリムラっていうのね？ あたしは——さっきも自己紹介したからいいか。まっ、隣の席みたいだから、よろしくね！」

軽いウインクまで大サービスで付けて、一夏の反応を待つ。

そして10秒ほど経過して、……一夏は一切の返事をせず、それどころかノートから視線を外そうとすらしなかった。

あ、あら？ もしかして、耳が遠いの？ そう考えて、鈴は両手でメガホンの形を作り、もう一度先ほどと同じ台詞を言う。

そしてやはり、一夏から返事はなかった。

代わりに来たのは、別の席からの声だ。

「鳳さん、織斑くんはそのノート書いてる時は耳栓してるから、それを外さないと聞いてくれないよ！」

耳栓！？ と、鈴音は胡散臭そうな顔になる。小学生で耳栓をつけてまで必死にノートをとる人間なんて、今まで見たことがない。それとも、これはこの学校では結構普通のことなのだろうか。――

確認してみると、本当に一夏は耳栓を装着していた。

「ねえ、これって取っちゃってもいいのー？」

「うん、気にしないでいいよー！」

気にしないでいいよ、の『て』の時点で、既に鈴音は耳栓を外していた。案外あっさり耳栓は抜けるが、今はそんなことどうでもいい。

一夏にとつて、耳栓が抜けるというのは即ち誰かから何かを話されるということだったのだろう。ペンを置き、もう片方の耳栓も外しながら、先に抜けた耳栓の方向……つまり、鈴音の方向を向いた。そして眼鏡を外す。

何で眼鏡を外すんだ？ と一瞬だけ考える鈴音だったが、本当にそれは一瞬だけのことで、次の瞬間には別のことに頭がいつていた。――あれ、結構格好良いじゃん。

男前——というには、まだ少年っぽさが残るあどけない顔つき。

そちらの方に、意識が奪われたのだ。ついさっきまで俯いてノートとにらめっこだったので見えなかったが、彼は見た目からして鈴音の好みだった。

鈴音の方を向いて首を傾げる一夏。「ん、あ、ええと！ 隣の席みたいだから、よろしくね！」と鈴が言うも、一夏は首を傾げたままだった。

そして、うーんうーんと唸った後に、ぽんと手を叩く。

「そっか、僕、君の名前知らないんだ！ えっと、誰？」

反射的に、鈴は一夏の肩を掴み、思い切り揺すっていた。

「あ・ん・た・ねえ！ ついさっき自己紹介したでしょうがぁ！」

何を聞いてたんだ、どう聞いてたんだ、と問い詰めながら、肩をゆするのをやめない鈴音。「あうあう」と言うばかりで、一夏は返答できない。

「いい？ もう一度説明するわよ？ 分かったら首を縦に振りなさい！」

がくがくと身体ごと揺すられながら、一夏は首を前に曲げる。そこでようやく鈴音の揺さぶりは終了した。

「あたしは鳳鈴音、ホウオウの鳳の字に鈴の音。ホウオウの鳳の字、なんて分かんないだろうけど、とりあえずそう覚えといて」

「んーっと、ファン、鳳、ふぁん……そんな生徒、うちの学校にいたっけ？」

今度の一夏の発言に、鈴音は怒るを通り越して呆れた。

「あんだ、ホントに自己紹介一切聞いてなかったのね」

「いや、この学年にいる生徒の名前は全員覚えてたつもりだったから、自己紹介はスルーしてもよかったかなー、って思ってた。ごめんごめん、転校生が来るなんて、予想してなかったんだよ」

「そ。まあ、いいわ。それよりあんだの名前教えなさいよ」

「僕？ 僕の名前は織斑一夏。織姫の織に斑点の斑に一つの夏って漢字」

「織斑一夏ね、覚えてたわよ。今度こそよろしく！」

「うん、よろしく」

挨拶を終わらせ、ようやく鈴音は席についた。

早速話し掛けようと、隣を見る。

一夏がものの5秒で再び耳栓をつけてノートをとっていたため、鈴は危うくずっこけそうになった。

なぜだか一夏の動向が気になった鈴音は、それから数日間一夏の観察をすることにした。ちょうどいいことに、最初の週は身体測定や学年集会がほとんどで、得に観察が原因で勉強に遅れるということもなかったのだ。

流石に、重要な用件を教師が話しているだろうという時にまで一夏が耳栓をつけることはなかった。

そのことには奇妙な安堵を覚えつつ観察を続けていると、休憩時間の場合はほとんど耳栓をつけていた。クラスメイトもあまり近寄らず、もしかしてこいつは孤立しているんじゃないかとさえ鈴音は思った。

それから授業が始まると、鈴音は観察も難しくなった。

自分は授業を受けなければいけない——一応、小学校の内容は、書けば覚えられる簡単なものだったが——ので、一夏の観察に割く時間が減る。

それでもどうにか、鈴音は全ての教科で一夏が何をしているか調べた。……全て調べ終わって、彼女は少しだけ後悔した。

一緒なのだ。

流石に体育や図画工作、それに音楽などの身体を動かす教科は別だが、それ以外の座学——国語や、算数その他——の時間は全て、同じノートを開きずっと何かを書き連ねていた。

どの授業でも同じノートを開いている、となると、次に気になるのはもちろんそのノートの内容である。

初日から、使っているノートはおそらく変わっていない。初日に見た時にはわけの分からない内容しか書かれていなかったの、そ

れならば一夏に直接尋ねるしかない。

ある日、鈴音は一夏と二度目のコンタクトを図った。とはいっても、休憩時間に耳栓を外すだけという簡単なものだったが。

外すときに勢い余って、何かがパキリと折れる音がした。

しかし、一夏はそれに気付かなかったようだ。

「あ、鈴音さん。どうしたの？」

初日と変わらぬ様子で、一夏は首を傾げてそう聞いてきた。

「いや、ちよつと気になって……そのノート、何書いてるの？」

「んーっと、バラバラなんだけど……今書いてるのは、有機化合物の炭化水素とか、その辺りかな」

「ユウキカゴウブツ？ タンカスイソ？ 魔法の呪文が何か？」

全く意味が分からない鈴音は、ノートを凝視しながらそう更に尋ねた。

魔法の呪文という突拍子もない考えに、一夏は軽く吹き出す。

なるほど、確かにベンゼン環の六角形は奇妙な魔法陣に見えるかもしれないし、CだのHだのの大量の記号は呪文のように感じるかもしれない。

「ちよつと、何で笑うのよ！」

「いや、あまりにも的外れだったから。ごめん、そういうファンタジーチックなものじゃないよ。これは——うん、理科で水はエイチツーオーって言うとか、二酸化炭素はシーオーツーって言うとかあるでしょ？ そういうものの延長線上にある勉強」

へえ、と言いながらも、鈴音は頭の中では一切理解できていなかった。本当は「じゃあこの六角形とか、それとHとOとC以外にもたくさんある記号は何なんだ」と聞きたかったのだが、どうせそれを聞いたらまた別の疑問が出てくるんだろうと直感で理解して、聞くことはしなかった。

「で、そんな勉強して、何になるの？」

「勉強が趣味なんだ」

「勉強が趣味！？ はあん、あつきたー、そんなの書いててホン

トに楽しいの？」

鼻で笑われて、一夏はむっとなった。

「別に趣味なんだからいいじゃん、人の勝手だろー」

「だって、他の男子は休憩時間とか、皆校庭に出て遊んでるわよ？ あんた、そういうのは楽しいと思わないの？」

「つまんなくはないけど、こっちの方が面白い。自分が知らない何かを覚えるのって凄く楽しいんだ。スポーツでもそういうのはあるかもしれないけど、僕はこっちの方が肌に合ってるみたいで——昔剣道をやってたけど、それもやめちゃったし」

一夏に力説されるが、それでも鈴音は「ふうん、変なの」という感想しか出てこなかった。遊びたい盛りの鈴音に、一夏の考えは合わなさすぎたのだ。

「で、先生の話听不懂なのはどうして？ 勉強が好きなら、そっちの話もしつかり聞いていると思うんだけどさ」

「今習ってる授業は簡単すぎるもん」

「簡単すぎる？ ちょっと、あたしが馬鹿だったこと？」

「ううん」一夏は首を横に振る。「鈴音さんの頭がいいか悪いかは知らないけど、僕が年がら年中勉強ばっかりしてるから、今習ってる分はもう2年ぐらいい前には覚えちゃったんだよね」

今習っていることを、2年前にもう覚えてしまった。その言葉に鈴音は、『運命』の冒頭が大音量で頭の中で流れるような、そんなショックを受けた。

そして慌てて、それなら今ノートに書いているのはどれほどの内容なのかを聞いた。

「ええっと……千冬姉さんからは、高校2年生ぐらいの内容って聞いたよ」

はっ、と鈴音の口から声が出た。

再び鼻で笑われたのかと思って一夏は文句を言おうとしたが、それより先に、

「はぁ——っ!？」

という、鈴音の大声が教室に響き渡った。

ちなみに数分後、小型ディスプレイ内蔵メガネのボタンが外れていることに気付いた一夏が、彼女に負けない大声で「うわあ——

っ！！」と叫んだ。

以降の鈴音の変わりようは、親も教師も目を丸くするものだった。まず鈴音の親を驚かせたのは、何事もかなり大雑把なはずだった鈴音が、真剣な目で勉強用の教材を買ってくれと頼んできたこと。

どうせすぐサボるだろうと親は1冊のみテキストを買い与えたのだが、そのテキストはものの2週間で埋め尽くされて親の手に戻された。まだ4月も終わっていないのに、5年生1学期の算数の問題を、すぐに鈴音は終了させたのだ。

続けて国語、理解、社会と3教科のテキストを与えてみると、流石に今度は2週間目には何の反応も見せない。

なんだ、やっぱりサボったのか——。と、親が（本来悲しむべきであろう場面で）ホッとしていたら、買い与えた一ヶ月後、即ち5月下旬には全てのテキストが戻ってきた。

勉強熱も冷めたかと思いきや、むしろ前よりもスピードアップしたのだ。

学校では、教師に着々と『第二の一夏』というレッテルを貼られはじめた。授業中に一歩進んだ勉強をして、今の場所は理解しているのかと回答を任せればすらすと解く。

他に話してくる相手があまりいない一夏にも、鈴音はよく話しかけるようになった。主「自分の分からないところを教えてもらおう」ためにだが、勉強仲間が増えたと感じた一夏も満更ではなかったように、笑顔で鈴音に教鞭を振るった。

大雑把ではあるが負けず嫌いだった鈴音は、一夏の勉強のあまりの進み具合を見て、むしろそれに負けたくないと考えるようになったのだ。

かくして、一夏と鈴音はかなり親密な関係となった。

「毎回鈴音さん鈴音さんじゃまどろっこしいから次から省略して呼びなさいよ」と鈴音が言ったことで、一夏は彼女を「鈴」と呼ぶようになる。

鈴音の親が開いていた中華料理屋に、度々一夏が出向くようになる（もちろん、毎回のように、食後に2人はノートを開いていた）。三学期の頃には、周囲から『勉強夫婦』と茶化されるまでもなる——この呼ばれ方に心臓が高鳴った鈴音は、初めて自分が一夏を意識しているのだと気付いた。

ノートとシャープペンシルから自分の方に振り向かせてやろうと決心した鈴音だが、それから4年経っても、それは成就していない。

2 - 2 1割アップはあっけらん

放課後。一夏、簪、箒、セシリア、本音といういつものメンバーに加えて、今日は鈴音も共に整備室にいた。

昨日まではすぐにノートPCの電源をオンにしていた一夏だが、この日はまずISを鈴音に見せ、大体の完成具合を教えている。

「へえ、これが日本の第三世代ね。……って、一夏の機体も一応は日本の第三世代ってことになるのかしら？」

ぺたぺたと玩具を子供が触るような手つきで、鈴音は未完成のISに触れていく。未完成の無骨なISと鈴音が触れ合う姿は、周囲からは多少不釣り合いに見えた。

「日本の……じゃなく、束さんの第三世代って言った方が正しいか。それはともかく、現状どんな感じなのかは理解したのか？」

「あたしを誰だと思ってるの」

「んじゃ理解したってことで、作業に入るか」

一夏が、またお得意の揚げ足取りをした。周囲の人間はそう思った。「誰だと思ってるの」という曖昧な返事を、わざと自分に都合がいいように解釈したのだと。

しかし、返しの鈴音の反応は「ええ、そうね」であった。

一夏と鈴音以外の人間が、驚いた声を出す。

「……？ 何だよ皆、いきなり変な声上げて」

「当たり前だろうが！ お前達、今何分会話をしていたと思ってる！？ たった3分ぐらいだぞ！ それとちよつと触っただけで『理解した』というのはどういうことだ！ おまけにお前達、まだ今後の方針を相談することすらしていなかったではないか！」

真っ先に声を荒げて答えたのは箒だった。

新しいメンバーが入ったのならば、とりあえず現状を正確に理解させること。そして、元々のプランからどのように変化させていくか。役割分担のし直し。このぐらいは必須条件であることぐらい、

いくら技術畑の人間ではない筈だとしても分かる。

だが、一夏と鈴音の間で行われたやりとりは2人合わせて20にも満たない。そして、早速作業に入るかと一夏が言って、それに鈴音も同調する。初期段階から、それはおかしいのではないか。

しかし、一夏は軽く首を傾げるだけだった。「それがどうした」と言いたいのだと、声に出していないのに伝わってくる。

「一夏、あんた、休憩時間の間にあたしの仕事、説明してなかったでしょ」

「え？ …… あっ！」

「あっ、じゃない！ そういう言葉足らずが人に誤解を生じさせるんだって、何度も何度も言ったわよねえ！？」

「いや、気をつけてはいるんだ！ できるだけ目的語は省略しないように努めてるし、何かしら問題が生じたと思っただけで謝るように——」

「問題がッ！ 起きないようにしなさいッ！ どうせあんた、その言葉足らずでもう喧嘩のひとつでもしてるんじゃないの！？」

「そんなこと——」

ない、と言おうとして、一夏は筈から強烈な視線を感じた。

「おい一夏、ないとは言わせんぞ？」

「ごめんなさい」

あった。

ついこの間言葉の選択をミスしたせいで、目の前にいる筈と決闘騒ぎにまでなったことを、一夏は思い出した。騒ぎといっても、決闘当日より後日のホームルームの方が騒がれる割合は大きかったが、どうにか和解して、今は問題なく同室で生活しているが——「ホントに、喧嘩してたのね」——鈴には凶星を指されていたため、一夏は返す言葉もなかった。

「んまつ、どうせあんたのことだから、とつくに揉め事も解消してるんでしょ。話は切り上げて、とつとと説明に移りましょ」

喧嘩をしたことだけでなく、解決していることまで見抜かれた一

夏は、まさにぐうの音も出なかった。

「それじゃ説明させてもらうけど、あたしは一夏や簪みたいにキーボードを力チャ力チャやって設計をしたりはできないわ。そりゃ、ちよつとぐらい組み立てることはできるかもしれないけど……そこらへんは、全部2人に任せるしかないの」

「ということは、わたくしたちのようなサポートが仕事、でしょうか？」

「つていうのも違うわ、えーっと……セシリア、だっけ？」

頭に人差し指を当てて頭を動かす鈴音。考えるというより何かを思い出すような動作に近いが、「ごめん、フルネームはまだ聞いてないか」どうやら無駄だったらしい。

「なっ、わたくしのことをご存知ないんですの！？　そこにいらっしやる、コミュニケーション能力が少し欠けている一夏さんでさえ知っていたのに！？」

一夏が心臓を射抜かれたかのように胸を押さえるが、誰も気にしなかった。

「うん。あたし他国のこととか興味ないし。怒るなら後でいいけど、説明続けてもいい？　時間ないんでしょ」

「……はあ。わかりましたわ、この際気にしません。わたくしはセシリア・オルコットですわ」

「オーケーよ。で、セシリア。それと……ま、フルネームは今度聞くとして。箒に本音だったわね？　現時点で、サポートが3人。ちよつと少ないかもしれないけど、多分今まで3人で回してた仕事に急に4人になつても、すぐには対応できないでしょ。下手すりゃ同じ場所に2人で向かうなんてことも、起こっちゃうかもしれない。最初から4人体制なら問題なく回せたんでしょうけどね」

「では、結局何の作業をするのだ？」

とん、と鈴は、未完成のISに軽く手を置いた。

「こいつを調べ直すのよ」

「調べ直す？」箒とセシリアの声が重なった。

「稼働実験の手間を全部あたし1人で受け持つってこと。ISは何度もトライアルを繰り返すのが当然だってことぐらい、分かってるわよね？」

こくりとセシリアが頷く。箒はその現場を目の当たりにしたことがないのであまりピンと来なかったが、一人で『本当に正確な内容を覚えているか、定期試験前に小テストで何度も確認するようなものか』と勝手に納得した。

「でも、まあ見てのとおりこの整備室は、現在大部分が別の理由で使われちゃってる状態。廊下をISで動くんなんて許可されるわけないし、かといってトライアルのたびにISを担いで動かせることまで持つて行くわけにもいかないわよね」

ISを担いで持つて行く、の場面で、一夏が再び「ぐっ！」と胸を押さえる。ISを担ぐのも、ちよつと前にやっただけだ。もちろん、鈴音の話に耳を傾けている周囲は彼のことを気にしなかった。「さて問題。この機体を作っている最中、一体どこでトライアルを行っていた？」

「……」

「……………」

箒とセシリアは必死に考えるが、出てこない。この機体を動かせる場所は、思いつかなかった。

「正解は、一夏と簪の作り出した仮想空間の中よ」

「なっ……………!!」

セシリアが驚きをあらわにした。箒はこれはいまいち理解できなかったのだが、なんだか驚かないと話が進まないような気がして、目を見開いて唾を飲み込んでおいた。

「ま、データと実物が違うなんてことぐらい誰でも分かるわ。けど多分——ISの開発者だって、同じように作ってたはずよ？」

ISの開発者、というところで、箒は今度は本当に驚いた。何せ、ISの開発者といえば自分の姉、篠ノ之束である。その人物がいきなり出てくれば、感情を動かさないというのは不可能だろう。

「日本は武装に対する取り締まりがキツいから、ISが開発される前に思い切った実験を行うなんてそうできないもの。だからミリの狂いもなく、正確に、綿密に現物のコピーをデータで作り上げて、限りなく現物が動いた時に近いデータを出す。一般常識を持つた人に話せば頭がおかしいんじゃないかと思われるかもしれないけど、そういうことができたからこそ篠ノ之博士は天才って言われているんじゃない？」

「……いや、何でもない。続けてくれ」

「そ？　じゃあ続けるけど。というわけで、今まで一夏と簪の2人が行っていたシミュレーションを、全部あたし1人で受け持つ。それがあたしの仕事よ」

自身の姉のことへと頭の中が切り替わっている簪を置いて、セシリアは「一応、どういうことかは理解しましたわ」と返した。

「しかし、理解はしましたが納得はしていません。今作っているのは第三世代ですわ。まだ各国が開発に取り掛かりはじめたばかりのデータがほとんどないもの。本当にシミュレーションの結果が信用に足るものであるとはどうしても思えません」

言い終わったと同時に、鈴音が「そこよ！」と大声を出した。

「は、はい……？」あまりの勢いのよさにセシリアはたじろぐが、お構いなしに鈴音は続ける。

「あたしも同じこと考えてた、ってこと。シミュレーションをするのに、第三世代のデータはどう考えてもかなり必要なの。それなのに、第三世代のデータはほとんど出回っていない。あたしは政府から駄目出しを喰らってるし、セシリアだって無断開示なんかはもちろん禁止でしょ？」

「と、当然ですわ！」

「つまり、使えるのは国家に所属していない、俺のデータだけってことだ」

「第三世代はワンオフアビリティのダウングレード。つまり武装に関わってる所が多いから、基礎部分はどつとでもなるわ。それこ

そ第二世代のものを流用してもほとんど問題はない」

「しかし、第三世代として開発せねばならない以上、どうしても途中でシミュレーションはストップしてしまう……ということですね？」

「うん、セシリア、あたしあんたとは上手くやれそうよ」思った以上に飲み込みが早いセシリアを鈴音が褒める。「で、この問題だけど——一夏、もちろん解決方法ぐらい、用意してるんでしょよね？」

注目の視線が一夏に集まる。きつと、彼なら既に手を回しているだろう。そう信じていた鈴音だが——

「……用意、できてればよかったんだけどな」

申し訳なさそうに、一夏は返事をした。

「つて、ことは？」

「俺の方では、残念ながらツテがないんだ。簪さんは？」

「……私も……ない。」

「だよなあ。何の見返りもなしにタダで詳細なデータを渡してくれるだなんて、そんな虫の良い話があるわけない。そこさえ上手くクリアできれば、当日までの完成も夢じゃないんだけど……」

残念そうにそう言う一夏の横で、肩を竦め、はあ~~~~~と、大きく鈴音は溜息を吐いた。

「じゃあ、多分間に合わないわね」

しれつと言い放つ鈴音に対し、セシリアは若干の憤りを覚えた。しかし、周囲にいる一夏と簪は怒っていない。

それで分かった。一夏も簪も、弁えているのだと。

「そのぐらい、分かてるよ。鈴に手伝ってもらっただけじゃあ、間に合わない。それでも、こいつは間に合わせたい」

下唇を噛む一夏。危うく鈴音は一夏の表情に負けそうになったが、それでも代表候補生としての制約を破ることはできないと、どうに

か堪えた。

「……それじゃ、データに関しては後で考えましょ。何にもしないより、する方がいいに決まってるわ」

「ああ……頼む」

「任せなさい。あんたの期待以上の仕事をしてやるわ。一夏の方こそ、あたしが何もしないでブラブラするような状況にはしないでよ？」

「……分かった、任せろ！」

多少落ち込んだ一夏がどうにかやる気を取り戻したことに、鈴音は安堵した。

——本音が、仕事を始めるまでメモを取っていたことには、誰も気付かなかった。

「——なるほどね。今のところは、そういう状況なわけね」

「はい。専用機に関してのデータも入手しましたが、ご確認なさいますか？」

「ええ、置いといて頂戴」

女性2人がとある部屋で、1つの机を挟んで座っていた。

片方、眼鏡を掛けている方の女性は座りながらも両腕をせわしなく動かし、大量の書類を整理している。

そしてその女性の話す言葉を、もう片方の女性が1枚の書類を見つつ聞いている、という状態だった。

配置としては、ドア側に眼鏡の女性、奥側にもう片方の女性。

ふと、纏めていた書類のうち1枚が風に負けてひらりと舞う。そこに、『織斑一夏』と『更識簪』という名前が載っていた。

眼鏡を掛けたほうの女性が舞った紙を曲げないように空中で受け止めていると、もう片方の女性が口を開いた。

「鳳鈴音……この子が参加したおかげで、大幅に前進するにはしたけれど、それでも予定日には間に合わない——と」

「そういうことらしいです。本音からも報告を受けました」

「確か、稼動データさえあれば間に合うのよね？」

「はい。100パーセント、とはいかないようですが」

眼鏡の女性の言葉を受けて、奥側の女性が頷きながら立ち上がった。

「分かったわ、ありがと。——ちょっと早いけど、私も動いてみましょうかしらね。いや、むしろ関係としては遅すぎたかしら……？」

あなたは、続けて他の案件もお願ひ」

言われて、眼鏡の女性はかしこまりました、と返事をする。

王と従者のような、形式化されたようでそれでも優雅な雰囲気、その部屋には確かに漂っていた。

2 - 3 開いた扉はユー点エ又点

「だから、そこを何とか！ 千冬姉さんならきつとツテの1つぐらい持つてるだろ！？」

「仕事の間は織斑先生だと言っているだろうが——！！」

一夏の頭に、丸めた束のプリントが思い切り直撃する。紙の束で殴ったとは思えないほど強烈な音——防音はかなりしつかりしているはずなのに、紙の直撃音だけで女子たちが部屋のドアから顔を覗かせるほどに——が寮の廊下にこだまし、一夏は激痛と共に地面に叩き伏せられた。

「そもそも何だ、いきなり第三世代のデータをどうにか手に入れないかなどと！ ほとんどの国が条約の隙間をすり抜けてデータを隠匿するような代物だぞ、そんなものが簡単に手に入っていたら教師なんぞやっておらんわ！」

夜、食後。

整備室での仕事にひと区切りつけた一夏は、どうにか第三世代の稼動データが入手できないものかと東奔西走していた。外出許可はもらっていないので、狭い学園の数百メートル程度の範囲で、だが、どちらかといえば、東奔西走していたのは一夏の携帯電話の電波だ。

今まで知り合ったことのあるIS企業関係者に、一夏はまず片っ端から電話を掛けた。しかし、いくら何でも「稼動データ寄越せ！」というだけの主張が成り立つわけがない。大体の企業には「ふざけるな」と遠回しに言われ、断られた。

いくつかの連絡先は「ギブアンドテイクで」、つまり一夏に要求をしてきたのだが、そのうち全てが一夏の将来を確定させるもの、または男性IS操縦者としてのデータを見返りで寄越せというものだった。自分の置かれている状況を理解していた一夏は、惜しみな

がらも、それらを断らざるを得なかった。

真剣に交渉すべく文章を推敲すればまだ可能性は増えていたやもしれないが、今の一夏は焦っていたため言葉選びを失敗しすぎていた、というのも、つつけんどんな応対で断られた一因である。

次に、一夏はISの開発者にして師匠——篠ノ之束博士に、稼働データは入手できないだろうかと頼んでみた。

返ってきたのは、『えー。ハッキングなりなんなりすれば束さんにはちよちよいのチョリソーだけどー。面倒なんだよね』という返事だった。

曰く、一夏のIS研究に関してなら協力を惜しむつもりはないのだが、一夏のIS及び現在の研究に直接関わらないものに関しては手をだす気が起きない、ということ。

そういえば束は、興味対象外の人間にはとことん興味がない人間だった——と一夏は思い出した。

それと同時に『なぜ、データが欲しいと言っただけで、別の人間のIS制作に係る内容だと分かったんだ』という疑問が出てきた。一夏がそれを質問した所、数十秒の無言の後に電話は切れた。

一夏は隠しカメラを見つけ次第叩き壊すことを心に決めると同時に、束への協力依頼を諦めた。

そして、3つ目に彼が思いついた案こそ——今ちようど紙束攻撃と同時にあっさり断られてしまった、千冬への協力要請だった。

千冬は、一般人と比べ、IS関係者各位にかなり顔が広い。

第一回IS世界大会『モンド・グロツソ』総合優勝、第二回はある事情により決勝進出するも棄権。そして、これまたある事情により、ドイツ軍で一年間教鞭を振るっている。その後にもまたまたある事情により現在はIS学園教師。顔が広くないわけがなかった。

そんな彼女だからこそ、一夏も一縷の希望を賭けてみたのだが……残念なことに千冬は、一夏に背を向けて去ってしまっていた。

「……んー、やっぱり無理だよな、どう考えても」

千冬が去る背中を見つめながら、一夏が呟く。

元々、千冬相手の懇願は駄目元の策。成功すればしめたもの、程度にしか考えていなかったの、一夏はそれほど落胆はしなかった。もちろん、再びツテがなくなることに対し、一切の落胆を覚えなかったなどということはないが。

「さて、それじゃあ……とりあえず、今は案が思いつかないし、一旦整備室に戻るとするか。もう9時過ぎだけど、どうせまだ続けるんだろ」

数分後。

一夏が整備室のドアを開くと、彼の予想通りの人間がそこにはいた。

「どうでした、一夏さん」

最も入口に近い所に立っていたセシリアが、彼の入室と同時に尋ねる。

一夏が首を振ると、室内に落胆の色が広がった。

「こつちの方はどう、作業は順調？」

周囲の雰囲気を作り替えようと、一夏が言った言葉はそれだった。

「うん……鈴音さんが来て、大分スピードが上がったよ」

「……私としてはあまり変わったようには見えんのだが、気のせいだろうか？」

簪の言葉に疑問を持ったのか、簪がそう尋ねる。

「そりゃ、負担が減ったのは主にPC弄ってる2人のほうだし、雑用の方から見てもあんまり分かんないわよ」簪の問いに答えたのは、部屋の奥でIS本体の腕を上下に動かしていた鈴音だった。

「何ならこの際、箒とセシリアもこつちの基礎ぐらいは覚えたらどう？ 整備科は就職に強いし、機械いじりってすっごく楽しいわよ。お。一夏も、来年は整備科でしょ？」

「予定ではな」

2人の会話を聞いて、箒の食指が動いた。

なるほど、一夏は来年から整備科か。専門分野に関してそれほど詳しい知識が欲しいというわけではないが、一夏に近付くためであればナシではないかもしれない。何より、一夏の――「でも、セシリアさんはともかく、箒は整備科には向いてないんじゃないかな」――今いる地点に追いつけるやも、今一夏は何と言った？

皮算用をしていた箒が、一夏の言葉で急激に現実引き戻された。「何で？ 確かに運動が得意そうだけど、別に頭が悪いってこともないでしょ」

箒の感情否定のように聞こえたため、慌てて鈴音が擁護した。

一夏がいない間に鈴音は喧嘩の顛末を聞いていたため、また箒と一夏が食い違う可能性を潰しておきたかったのだ。

それゆえに、鈴音は、暗に視線で「下手なこと言ったら殺すぞ」という視線を一夏に向けていた。

「うん、少なくともIS学園の授業についていける時点で頭が悪いわけではないし、不器用ってわけでもない。だから、あくまで俺の勝手な推測だよ」

「へーえ。どうして？」

「どうしてって言われても、なあ……整備科が向いてないというより、ISを使うなら勝負事のほうに向いてると思うんだよ、箒は。本当に感情論なんだけど、研究所でカチャカチャ機械を弄ってるより、空を飛び回ってる方が箒らしい」

「だそうだから箒。気にせず整備科行っちゃっていいわよ」

「俺の意見は丸々無視かい！ いや、箒がどうしても整備科がいいって言うなら、俺はもちろん止めはしないけど」

あくまで一夏の発言は自分のイメージであり、そして自分が拒絶されたわけではない。それを聞いて、箒は一応安心した。

そして、それと同時に一夏も安心した。――どうやら、騙されてくれたようだ。

「さて、それじゃあもう夜も遅いわけだし、今日はこら辺で解散にしようぜ。寝坊して千冬姉さんにどやされたらたまったもんじゃない」

「ですわね。夜更かしは肌荒れの原因ですし、休まず動いてこの間の一夏さんのように倒れてしまつては元も子もありませんわ」

「さんせゝ。もうクタクタだよお」

特に一同異存はなく、この日は解散となった。

入口に近い方から順番に、扉を潜る。ただし、一夏はレディーファーストと言わんばかりに、扉を開けると女子を先に誘導した。

「そついえば一夏」

最後に出ることになった鈴音が、一夏に声をかける。

「どうしたんだ？」

「あんた、さっきのアレ嘘でしょ」

鈴音にそう言われて、一夏は一瞬で大量の汗を掻いたような錯覚に陥った。

さっきのアレ。さっきと言われるタイミングは、自分が戻って来てからの会話以外にはないはずだ。

「何でだ？」

「何で分かったか、かしら。それとも何でそう思ったか？」

「しらばつくれるつもりはないよ。何で分かったんだ？」

「あたしを誰だと思つてんの」

鈴音がふふんと威張る。そんな非科学的な理由で嘘がばれたかと思つと、一夏は驚きを通り越して呆然とするしかない。

「で——ほら、あんたの質問に答えたぶん、あたしも質問するわよ。何であの状況で、わざわざ嘘なんか吐いたのかしら？」

答えようか、答えまいか。鈴音が立ち止まっている先の廊下に顔を出してみると、他の女子4人はもう先を歩いていて、

簾に聞かれることはない。確認すると2人は廊下に出る。

一夏は観念して話し始めた。

「鈴。IS開発者は？」

「篠ノ之束博士。何よその質問、ふざけてるの？」

「ふざけてない。箒のフルネームは、篠ノ之箒って言うんだ」

「っ！……ってことは、身内？」

「妹。それで、2人の仲は険悪……まで行くかどうかは分からないけど、少なくとも箒は姉にマイナスの印象を持ってる」

「ふむふむ、それで？」

「……言えなかったんだよ。箒が整備科に向いてるなんて言ったら、暗に『お前は、自分で嫌ってる姉に似てるぞ』って言うてる、って受け止められそうな気がして」

「実際は、むしろ否定したせいで箒が落ち込みかけたけどな、と一夏は笑った。

その笑う顔に、突如として鈴音がデコピンを叩き込む。背伸びからデコピンまで1秒足らず、そして直後に「これだから背の高い男ってやつは！」と怒り出すという、何とも器用な動作だった。

一夏は額を抑え、惚けた顔になる。

「あのねえ一夏。整備科に進むことを薦めたあたしが言えることじゃないかもしれないけど、そんな心配する必要ないわよ。結局、どいう道に進むか決めるのは本人なんだから。むしろ2つの道の1つを否定しちゃう方が、視野って狭まると思わない？」

「……今まで一本道だったから、思ったこともなかったよ」

「はあ、そう言われればそうかもしれないと一夏は納得した。ずっと勉強勉強の積み重ねで進んできた自分は、確かにルートは単数だと錯覚していたかもしれない。

そう考えていた一夏の頭の中を見抜いて、鈴音ははあくつと首を横に振った。

「全く。初めて男性がISを動かしたーとかテレビで見た時は、一年間で随分と格好良くなったんじゃない？　って思ったのに、結局お子様のまんまね。一夏。身体が子供のお前に言われたくないって考えてたら抓るわよ」

「いや抓つてる、もう抓つてるから!」

「気のせい。ほら、立ち止まってないでさっさと進みなさい。——あ、あんた部屋どこなの? 今度遊びに行くから教えてよ」

「1025号室——あっ!!」

急に大声を出した一夏に、鈴音は驚いて抓っていた指を離してしまった。

大声により思わぬ恩恵を受けた一夏だが、しかし、それすら気にせず慌てて携帯を取り出した。

「ん? 誰かに連絡するの?」

「ああ、箒とシャワーの順番を相談しなくちゃ。いつも俺は最後まで整備室に残るから決まってたけど、今日は鉢合わせする可能性がある!」

「鉢合わせする? 何その、おかしな——」
状況。

言おうとして、鈴音は気付いた。

つい先ほど一夏がいない時、『一夏と箒は寮の部屋に関するゴタゴタで喧嘩した』と聞いた。シャワーの順番。鉢合わせ。緊急。——

「ねえ、一夏」

「なんだよ」携帯のボタンを操作しながら、一夏はぶっきらぼうに答えた。「ええっと箒の番号は、っと……」

「もしかしてアンタって……箒と同室?」

「そうだけど——おい鈴? そんな急いでどうした!」

一夏の返事と共に、鈴音は全速力で廊下を駆け出した。向かっている先は、変わらず寮なので問題はないだろうが。

——そう考えていた一夏。ところが、問題は、あった。

「だ・か・ら! 男と同室なんて嫌でしょ!? あたしが部屋、変わってあげるから!」

「勝手に部屋を変えるなぞ認められておらん! さっさと、自分の部屋へ、戻れ!」

「今からここがあたしの部屋よ！ 第一、自分は追い出し決闘なんかしといて、よくもぬけぬけと認められておらんなんて言えるわね！」

「くっ……とにかく、決定事項だ！ 部屋は変えん！」

1025号室前、寮廊下。

一夏が到着したそこで、箒と鈴音が大声で口喧嘩をしていたのである。

「あの、お二人さん？」

「ちよつと一夏っ！」「おい一夏！」箒と鈴音の声が重なる。あまりの大声に、一夏は耳がキーンと鳴るのを感じた。

「あたしと同室になる！ 夜遅くまでPC弄つても文句言わないし、シャワーも中で着替えるようにすれば、時間制限とか設けないから！」

「別に私と同室でいいと言ったよな、一夏！ このまま鈴を追い返すぞ！」

その喧嘩の原因がどうやら部屋割に関する問題であるということは、一夏にもすぐ理解できた。ああ、また部屋の問題かよ、と頭が痛くなりかけるのを、どうにか抑える。

「とにかく2人とも落ち着いて。これ以上騒ぐと千冬姉さんが来る」千冬。その名前は血の気の多い2人にとってもやはり恐怖の対象らしく、辺りへ撒き散らされていた不機嫌そうなオーラは、すると縮こまった。

この2人を第三者視点から止めるなら、千冬の名前が最も効果的。一夏はその事実をしっかり理解して、実践したわけだ。

しかし、2人の話を止めた今でも2人の少女は睨み合っている。見兼ねて、一夏は1つの妥協案を出すことにした。

「分かった。部屋の中で話そう。あちらとあちらとそちらに、気になってこちらをチラ見している方がおられるみたいだし」

一夏が指差す方向で、続々ボタンボタンと扉の閉まる音が聞こえた。周囲のことさえ目に入らないほどヒートアップしていたのか、

と女子2人は軽く反省した。

「んじゃ入るぞ、絶対暴力禁止で。異存はないな？」一夏が聞き、2人は頷く。

鍵を鍵穴に入れて、静かに一夏はドアを開いた。

2 - 4 貴方の目線は彼女が先を（前書き）

週間アクセス数は火曜日更新。

先週の火曜日から今週の月曜日までのユニーク合計は100000を突破したのに、アクセス数が4649って表示されるんです。

ヨロシクの呪いかなんかでしょうか？

2 - 4 貴方の目線は彼女が先を

部屋の中には電気が点いておらず、そして静まり返っていた。

一夏も箒も出払っていたのだから当然であるが、その暗がりのおかげで箒と鈴音の視線を一時的に感じるものがなくなったため、一夏は少しだけ状況に感謝した。

とはいえ、暗い中、相手の顔すら見ずに意見をぶつけ合うことなどどう考えても不可能。そうでなくとも明日の準備や今日の成果の整理など、明かりがないとできないことが一夏には大量に残っていた。

すぐに、点灯をすることになる。

再び感じるであろう威圧感に対応するべく軽く息を飲むと、一夏は点灯した。

部屋一面が明かりで照らされると、一夏の方を向いていた箒と鈴音の2人は、再び先ほどまで言い争っていた相手を睨みつけた。

「さて、2人とも。俺がいない間に一体どういう風に口論になったのか、教えてくれないか？」

何か言い出そうとした女子2人を抑えて、真っ先に発言したのは一夏である。そして部屋のドア側ベッドに座り込んだのも、やはり一夏であった。

「どっちをどう味方しようだなんて、話の全体が掴めないと判断のしようがない。適当にどっちかの味方をしたとしたら、2人とも不満だろ？」

肩を竦めて一夏が言う。しかしその顔はどうやら、既に大体の事情は察しているように見える。あくまで、これは形式的な質問なのだろう。

「分かったわよ」鈴音が答え、説明を始めた。

話は、別に複雑なものでなかった。

まず一夏が箒と同室であると知った鈴音が、部屋を変わらないかと箒に持ち掛け、それを箒が突っぱねる。

突っぱねた理由を鈴音が聞き、しつこいぞ、と箒が冷たく返す。その言い方に力チンときた鈴音がほんの少し不機嫌を表にしてい返す。

後は、気性の荒い2人のこと。当然のように、話し合いは喧嘩へと発展していった。

鈴音の、多少自分に優位がある話し方に箒が少しずつ訂正を入れてゆき、最終的に一夏に伝わったのは正確な状況とほとんど等しいものだった。

まだお互いに手は出していないな？ と一夏が尋ねると、箒も鈴音も「もちろん」と言いながら首を縦に振った。実際、目立った外傷はどこにもついていなかった。

「それじゃあ——鈴には悪いけど、部屋が変わるのは無理なんじゃないか？」

冷静な態度を崩さないまま、一夏が答える。すぐに、「どうしてよ!？」と鈴音から反論が出た。

「どうしてもこうしても、さっき箒が言ってた通り、勝手に部屋を変えるのは認められてない。変えたいとなれば、正当な理由を付けて学園側にその許可を貰わなきゃ駄目だろうな。鈴はちょっと前に部屋変え決闘をしたってのを持ち出してたけど、あれはそもそも俺が千冬姉さんの弱みを上手くつ、握れたからだ」

「っ?」

「噛んだ」

噛んだのではなく、一夏は「作れた」と危うく言いそうになり慌てて訂正したのだ。

「つ」の後「に」になる前に、一瞬だけ一夏の唇が「く」を言った
めの形になっていたことに、箒と鈴音は気付いていないらしい。

2人をごまかせたことにホッとしたようで、一夏は額の汗を服の
袖で軽く拭いた。一部の人間しか知り得ない情報を、バラす必要は、
どこにもない。

しかし、「弱みを握ったってことはつまり、千冬さんを脅迫して
どこか部屋を用意させたってこと？」一夏が回答をミスしているこ
とに変わりはない。

一介の生徒が、家族とはいえ学園で恐らく最も有名であろう教師
を脅迫したのだ。他の生徒からすれば、とても気になる情報である。
「んー、まあそんなとこ」

「あっきた！ 千冬さんを入学そうそう脅迫とか、普通はできた
もんじゃないわ」

「仕方ないだろ、他に頼れそうだった生徒の部屋は大体2人部屋な
んだから。とにかく、上手く特例を作らない限り個人での部屋の
移動は無理ってことだ」

「つまり、あたしが箒を説得した上で適当な理由を学園側にでっち
あげれば、部屋の変更も不可能ではないってことね？」

「おそらく、だけどな」

「ふむ、分かったわ」そして鈴音は、一夏から箒へと再び視線を戻
す。

「というわけで箒、部屋の交代を認め」

「断る！ さつきから何度も言っているだろう！」

「何でよ」

「一々お前に理由を説明する必要があるまい」

再び、箒と鈴音の間で議論が始まった。今日どうするかの問題は
解決された一夏だが、明日以降どうするかまでは手出しができない。
傍観するしかないようだ。

「……それじゃ、こっからは2人で纏めてくれい」

そう言って座っていたベッドから立ち上がり、風呂場へと歩き出

す一夏。

彼が足を浮かせた次の瞬間に、その右腕を鈴音が、首を箒が思い切り掴んだ。

「待て一夏。逃げるな」

「何でだよ、鈴が箒を説得する場面に、俺が参加する理由がないだろ！」

「あるわよ。結局あんた自身の意見を聞いてないわ」

もがく一夏を、少女2人はがっちり押さえ込む。先ほどまで言い争っていたというのに、彼を捕獲する瞬間に限り絶妙なコンビネーションを見せた。

「いや、それ関係ないだろ！」

床に押さえ付けられた一夏が、必死の形相で叫ぶ。IS学園の寮が防音をきっちり施しているからよかったものの、ふつつ夜中に出すには明らかに迷惑な声だった。

「関係あるわよ！同居人の意思は、きっちり抑えておくべき点でしょうが！」

「俺がどう言ったって2人とも退くような性格じゃないくせに、何言ってんだ！」

「退くようじゃなくても、意見としては重要なのだ！ほら、早くしろ一夏！別に私と同室だったとしても、不自由はなかったよな！？」

「そりゃあ、不自由はなかったけど——」箒が、にわかに顔を緩める。「でも箒、最初同室って決まったときそこまで嬉しそうにしてなかったんじゃないっけか」

一夏の言葉に、箒は言い返すことができなかった。

自分の鍵を受け取った箒が、その後長時間職員室の前で固まっていたことは、実は学園でも多少の噂になっていた。

「べつ、別に嫌な顔だっただけじゃないぞ！？ただ、一夏と同じ部屋と聞いてびっくりしたただけだな——」ゴホンゴホン、わざとらしく箒は咳をした。「ともかく、一夏は別に不自由などしていな

ったということでもいいんだな！」

「お、おう」

一夏の返答を聞いて、箒が勝ち誇った顔を鈴音に向ける。

「ふ、不自由ではないと自由であるはイコールじゃないわよ！ あくまで最低限ランクで『不自由じゃない』でしょ？ あたしと同室になれば、今より自由度が高くなるわよ！ 夜中に電気が点いてたつて気にしないし、食費がもつたいない時は簡単な料理ぐらい作るし！」

「まあ確かに、夜中に作業できないっていうのは、少し不自由に当てはまるかもな」

今度は、鈴音が箒に勝ち誇った顔を向け返した。

「けど料理ぐらいは自分で作れるし、鈴と同室になったとしても迷惑は掛けられないから、結局夜には作業しないと思うぜ」

「いーのよ！ 箒と違って部活もしてないから起きる時間遅くても大丈夫だし、そもそも明るくてもあたしは寝れるから！」

「布団を被れば、私だって問題はない！」

「それに、情報開示がある程度認められてるやつなら、バイトだって手伝えるし！」

「分かった、分かったから2人とも落ち着けて！ 上で言い争つてると、自然と腕にも力が入って俺が痛いつて気付け！」

片方が発言してしたり顔、もう片方が反論してしたり顔の議論を、一夏は無理矢理止めた。慌てて2人は手を離す。

「とにかく、話を戻すけど一夏はどっちがいいのよ」

拘束が解除された一夏が再び風呂場へと歩きださぬようにか、鈴音は一夏にまた問い掛けた。

「……既にずっと同室だから箒の方が慣れてるけど、色々するんだつたら鈴の方がいいんだよな」

一夏の言い方では、どちらにするのか定かではない。箒と鈴音が、軽く殺気を一夏に放つ。明らかに、自分の名前が呼ばれなかったら一夏を殴る心積もりでいることがバレバレであるが、うーんうーん

と唸る一夏は2人の姿勢をちゃんと見ていなかった。いや、ちゃんと見ていなかったからこそ、2人は臨戦体制に姿勢を変えたのだらう。

ぼん、と一夏が手を叩いた。「うん、これだろ!」という台詞に否応なしに緊張が高まっていた。

「さて、それじゃあ一夏の考えを教えてもらおうか?」
箒が、軽く腰を落とした。

「もちろんあたしよね? ほら、さっさと言いなさいよ!」

鈴音が、拳をきつくグーに握りしめた。一夏の口から箒の名前が出れば彼の腹に、自分の名前が出れば天井に思い切り移動させるつもりなのだらう、拳の向きは一夏の方を完璧には向いていなかった。

「ええつと、だな……」

箒と鈴音の喉が、微かに動く。ゴクリと唾を飲み込んだのだらう。
「……どっちでも大丈夫だ」

直後、一夏の腹に、2人分の拳が叩き込まれた。
崩れ落ちる一夏を助けようとは、2人ともしなかった。

「あんたがそう優柔不断だと話し合いが伸びるでしょうが! どっちかに決めなさい、どっちかに!」

「い、いや……今決めて、2人とも違った良さがあるのに……」

「計算は得意なのだらう! どちらのメリットが上か、さっさと考えろ!」

「いやそれ……今しがた殴った相手に言う言葉か?」

ふん、と、箒と鈴音は鼻を鳴らした。

確かに、どちらか片方のみを指定すれば、もう片方は明らかに落ち込むだらう。そういう考え方からすれば、一夏の「どちらにも魅力がある」という回答は、最も一夏と箒、また一夏と鈴音の間にヒビを入れない、最善の回答だったかもしれない。

しかし、今後のことを考えず今この瞬間だけの損害を考えるのであれば、一夏の回答は確実に最低だった。

「……で、どちらだ？」

「だから言っただろ、決められないって」

「決めなさい、って言ってるのよ。その意見でかなり状況は変わるんだから」

「暴力的じゃない人ゴツハ！」

「ゴツハとは誰だゴツハとは、ん？」

「いや、殴られたときの悲鳴……」

それから数分ほど、箒と鈴音の一夏への体罰は続いた。

体裁から考えてどちらか片方を指定するのは憚られる一夏と、自分の名前が聞こえることを望む箒に鈴音。一夏が「暴力的じゃない人」と言ったところで、ようやく攻撃は収まった。

ふう、と息をついて一夏は立ち上がる。

「そもそも、今箒と同室なのは、俺の保護とか言って寮に入る前の調整時間を学園に与えなかったからだぜ？ 今同室になったとしても、下手すりゃ数日でお別れだ。……あれ、そういえば鈴は、何で同室がいいんだ？」

一夏に聞かれて、鈴音は顔を横に向けた。「な、それはその、えつと……ホラ！ 色々知りたいことがあるのよ！」

「知りたいこと？ ……ここの勉強に関してなら、鈴は俺に最早聞くまでもないんじゃないのか？」

「いや、勉強じゃあなくて……うつ」

追求されると、鈴音はそっぽを向いた。彼女の心境を推し量りかねてか、一夏は首を傾げている。

「何なんだ？」

「えと、その、うんと……な、何でもいいじゃない！ 色々よ色々！」

再び尋ねられると、今度は顔を赤くした。「……おい、まさか箒が何が言いかけたのを、わーわー言いながら鈴音は慌てて遮った。」「とっ、とにかく！ 今決められないなら明日までに決めておいてよねー！」

どうにも恥ずかしくなったようで、鈴音は慌てて出入口の向こうへと去って行った。

「……箒、あれ、何なんだ？」

「本人に聞け。それより、風呂に入るんじゃないのか？」

「ああ、そういうばそうだっけ」箒に言われて、一夏は再び風呂場へと歩き出す。

だが——このまま睡眠ルートに入られるわけにはいかない。

言い争いが始まるようなので隠れたが、私は別に酔狂でクローゼットに入っていたわけではない。

あちらの用事が終われば、今度はこちらの番で問題ないはずだ。

私は、クローゼットの扉を思い切り開いた。

一夏は、突然の出来事に驚いていた。

風呂場に向かおうとしたら、自動ではないクローゼットの扉がいきなり開いたのだ。驚いて当然である。

同じく箒もわけが分からず驚いたが、こちらはすぐに身構えた。

勝手に開くわけがない。そして、一夏が開けたわけでもない——どういふことか程度は、すぐに箒でも分かる。

果たして、箒の予想通り、クローゼットからは1人の人間が出てきた。

そして、次に箒が驚いたのは、出てきた女性の容姿である。……

スタイルこそ差があり、髪の流れ方も少しばかり違うが、瞳、髪の色、ある程度の顔のつくり——それらが、簪にそっくりだったのだ。「もうっ、危うく放置プレイされる所だったわ」

女性がそう言つと、箒は自分の後ろで一夏が溜息を吐く音が聞こえた。

別に緊張はしていない。つまり、目の前の人物は一夏にとって、初見の人物ではないということ。

「一夏」

「何、箒」

「これは……誰だ？」

「おねーさんは」「楯無さんは黙っててください」「……むう」

楯無。女性の名前としては、少しばかり珍しいのではないだろうか？ 箒がそう考えていると、一夏が箒の前に出て、その楯無と並んだ。

「んつと、この人は更識楯無さん。簪さんの姉で——肩書きからすれば、この学園の生徒会長だよ」

2 - 4 貴方の目線は彼女が先を（後書き）

三人称の練習と言っておきながら、中間ずっと一人称で書いていました。そっちの方がインパクトあるかなあと思って思ったんですが、ごめんなさい。

3 - 1 姉姉姉の心は弟妹妹に（前書き）

コピーペーストミスで文章が一部消えてました。

編集で後半に文章を追加……というより復元する予定です。

1 / 1 3 1 4 : 0 5 復元完了しました。

3 - 1 姉姉姉の心は弟妹妹に

「みんな、朗報だ！ 第三世代の稼働データ、どうにかなったぞ！」
翌日の放課後。一夏の開口一番の台詞はそれだった。

喉から手が出るほど欲しかったモノ。それが手に入るとのことで、
周囲——ただし、一夏と箒を除く——は色めき立った。

「織斑くん……本、当に……？」

「本当だよ。わざわざここで嘘を言う必要なんてないだろう？」

「あつ……そ、そうだよね、本当、なんだ……」

それでも信じられないのか、箒は半ば放心状態となっていた。

自分の専用機に関することなのだ。箒自身が最も喜んでいるのは
当たり前である。

問題は、彼女が突然の出来事——良い物も悪い物も——に慣れて
いないため、すぐに行動を開始することができないことだろうか。

代わりに動き出したのは、他の面々だった。

「つーわけだ鈴！ 今からそっちにデータ送るぞ！」

「よしきた了解よ、送信先は1年前と変わってないからね！」

「あいよ！」

長くコンビを組んでいた仕事のパートナーのように——鈴音とし
ては、この『コンビを組んでいた仕事の』を『連れ添った』に変え
たいところではあったが——、非常に慣れた手つきで、一夏は自分
のPCのデータを鈴音に送信した。

そして、一夏の手により圧縮されたデータを、鈴音は送られたそ
ばからどんどん解凍してゆく。互いの動きはまさに阿吽の呼吸で
あった。

「ちよつと少ないかもしれないが、今回使うなら十分だろ？」

「ええ、問題ないわ。それじゃ今から急ピッチで進めましょ」

すぐに、鈴音は置かれたISの元へ向かう。一夏は未だに放心状
態だった箒の肩を揺すって、現実へと戻ってこさせた。

「それで……このデータ、どこで手に入れたの？」

「それは、言えないことになってるんだよな。一応変な筋からのものじゃないってのは、俺が保証するよ」

「えっ！？ あ、ううん、疑ってるんじゃないよ。ただ……本当に、びつくりしたから」

「んま、俺も予想してなかったとこだからな。さ、始めようぜ」
「う、うんっ！」

スマートに返事をするつもりが妙に上擦った声となってしまい、簪は軽く赤面した。

「それにしても、昨日の夜は手に入らないと言ってましたのに！
一体どこから手に入れたんでしょう？」

「さあね〜。けど、これでかんちゃんのエスを作るのも、捗るんじゃないかな〜」

「鈴さんも言っただけじゃなかったし、間違いなしですわ！ ……あら、
簪さん、どうかなさいましたの？」

一夏の活躍を大いに喜ぶセシリアと本音。だがしかしその隣で、
簪は何やら浮かない顔をしていた。

「その、ちよつとな……」

妙に歯切れの悪い簪。なぜだろうと少し考え、セシリアはとりあ
えず自分の推論で尋ねることにした。

「もしかして、気分が優れないのですか？ そうであれば、少し休
んでいても大丈夫ですよ？」

「い、いや。別に体調が悪いわけではない。ほんの少しだけ、考え
事をしていただけた。気にしないでくれ」

気にしないでくれ、とは言いが、彼女が持つ悩みがそこそ複雑
なものであることぐらい、セシリアにも分かった。

ここで、友人なのだからと言って深く突っ込むか。それとも、詮
索は野暮だと気にしないことにするか。

「では、わたくしからは聞かないことにいたしますわ。1人で解決

しなかった時は、相談してくださいね？」

「ああ、ありがとう……」

どちらが良いのか判断がつかなかったセシリアは、その中間辺りの返事で手を打つことにした。

しかし——箒はセシリアに悩みを伝えなかった。いや、正確には、伝えられなかった、の方が正しい。

なぜかといえば——今、箒が持っていた悩みを打ち明けると、約束を破ってしまいかねないからだ。

昨晚の約束を。

「更識楯無……これが、生徒会長？」

箒の目の前には、青い髪（簪と同じ色）を持つ女性。スタイルは抜群で大人らしさを感じるというのに、醸し出される雰囲気はどちらかといえば悪戯好きな子供——小悪魔、と表現すればもしかしたらこちらも大人っぽいの一種に入るかもしれない——のようである。「あらら、『これ』は酷いんじゃない？ おねーさん傷ついちゃうな」

「傷ついちゃう、じゃないですよ。人の部屋の中に入った挙げ句クローゼットに身を潜めてる人間が普通だと思うのは、よっぽど感覚がずれてる人間だけです！」

「えー、そこは私を援護してくれても良かったんじゃない？」

「誰が！」

ぱん！ と軽快な音を立てて、どこから取り出したのか楯無が扇子を開く。達筆で「一夏くん」と書かれていた。

「……なあ、一夏。本当に、これが」

「みなまで言うな。残念ながら事実だ」

一夏の言葉に、楯無は口を尖らせた。一夏はそれに関しては無視

して、彼女の機嫌とは関係のないところを質問することにした。

「それで、何でここに？」

「それはほら。普通に待ってても良かったんだけど、入口の辺りで2人が喧嘩を始めちゃったから」

「それ、わざと観点ずらしてます？」

「うん」

「アハッ、と笑いながら一夏の頬をつんつんと押す楯無。箒の目からは、一夏がどんどんげっそりして行っているように見えた。

「で、実際は？」

「もう、簪ちゃんには会いに行くのに、私だと自分から会いに来るのさえ駄目なの？ 一夏くん酷いなあ」

「普通に会えばいいでしょうが！ どこに不法侵入する必要があるやがりますか！」

「だって、面白そうだったんだもの」

一夏から生気がどんどん吸い取られて、楯無を活性化させて行っている。見えないはずの生気が、箒には見えた気がした。「これが本当に生徒会長なのか？」と三度問い掛けそうになるのを、どうにか押さえた。

「んじゃ、用事が済んだんなら自室に帰ってください」

楯無の後ろに回り込み、背中を押そうとする一夏。

次の瞬間、一夏は盛大にすっころんだ。

「……は？」

箒の口から、思わずそんな声が漏れる。

今、何が起きたのだろう？ 剣道全国大会中学生覇者の箒の目で以ってさえ、何が起きたのかは理解できなかった。

背中を押されていた楯無は次の瞬間一夏の背中を押していた。

「もう、ちよっとぐらいおねーさんと話しましょうよ」

「特に用事はないって言ってたじゃないですか！ 俺も用事はないんです！」

本日2度目となった、一夏の床とのご対面。楯無はそんな一夏を、

馬乗りになつて押さえ付けた。多少卑猥にも見える。

「私の用事がないだなんて、まだ言つてないんだけどなー」

「え？」

「会いに来ちゃ駄目なの？ っの言つたけど。会いに来るのが用事、とは言つてないじゃない？」

そうだったっけか……。考えてみれば確かに、用事が会いに来ることだけだとは、楯無の口からは出ていないような気がする、と一夏は思い出した。

それなら何の用事ですか？ ……聞く前に、ひとつ頼まねばならないことを一夏は悟つた。

「楯無さん」

「なあに？」

「立ち上がれないんで、どいてください」

「それで結局、何の用があつてこの部屋に潜んでたんですか」
服をぱんぱんと払いながら、一夏が楯無に尋ねる。

これ以上はそこまでふざける気はない——というか、そろそろ箒がドン引き最高潮に達しそうだったため、ふざけると生徒会長としてアウトだと感じた——ようで、楯無は先ほどまでとは全然違う、落ち着いた雰囲気を見せていた。

「一夏くんが、簪ちゃんの専用機作りを手伝つてるって聞いてね」

「あー……箒」

「何だ？」急に話を振られてびっくりと驚きに身体を震わせながら、箒は返事をした。

「長くなるかもしれないから、先にシャワー浴びててもらつていいよ」

「断る。専用機作りなら、私も多少は関係がある話だろう」

ただでさえ、技術関係の話題には一番付いていけないのだ。少しでも他が知り得ない情報を知っておきたい。そう考えた箒は、一夏の提案を軽々と蹴った。

そして、箒は一度言ったら人の意見をあまり受け付けない。懸念する出来事が起こらないように祈りながら、「……了解。それじゃ楯無さん、お願いします」楯無に話を話してもらおうよう促した。「うん。それで——今のままじゃ、完成には間に合わない。必要なのはあと少しの人員と、第三世代ISの稼動データ。間違いないわね？」

「間違いないですよ。一体いつから調べてたんですか……」

「んー。『セシリアさん、お願いがあるんだけど。ちょっと、付き合って欲しいんだ』辺りから、かしらねえ」

「入学当初からって……もういいです。続けてどうぞ」

「ここまで言えば、一夏くんなら理解してるんじゃない？」

正解だった。

多分どういう言葉が来るのか、一夏はおおよその検討がついていた。というより、姉が弟妹を大事にするものだという常識を知っている人間であれば——一夏でなくとも、大体は理解できただろう。

「楯無さん、手伝うつもりですか？——簪さんの専用機作り」

再び、楯無が軽い音と共に扇子を開く。いつ扇子を変えたのか、それには達筆で「正解」と書かれていた。

「……ちよつと待て」

「どうしたの、箒ちゃん」

一夏は、頭を抱えそうになった。懸念していた内容が、どうにも起きてしまいそうだったのだ。

「箒、分かんと思うけどこの人先輩な」

「あつ……つと。納得がいきません」

慌てて箒は口調を敬語に直す。しかし、言う内容はやはり反発だった。

「何が納得いかないのかしら？」

「全部です。何でもそこまで簪の専用機作りについて詳しく調べるのか、何で突然出てきて協力しようとするのか」

箒は、姉が嫌いである。

昔、束がISを開発した頃のこと。束の家族は政府からの保護対象となった。

束はある程度どの国に対しても敵対する立場を取っていなかった——単純に、興味がなかっただけかもしれないが——。日本政府としては、束の家族は即ち束を動かすファクターになりかねないと考え、重要人物と見なしたのだ。

その結果強制的に引越しをすることとなった箒は、好意を寄せていた相手と、それまでの友人と、別れることを余儀なくされた。当時、小学4年生の頃の話だった。

つまり——姉が弟妹を大事にするという常識を、箒は知らないのだ。

もしくは、知っていても信じられないのだ。自分が姉に与えられたのは、どちらかといえば苦痛のみだったために。

「あら、可愛い可愛い妹が何してるのか気になるのって、普通でしよう?」

「茶化さないでくださいっ!!」

「箒、声が大きい」

一夏に嗜められて、箒は今更のように今が夜も遅いのだと思いついた。慌てて口を塞いだが、だからといって一度口に出した言葉が戻って来るといふこともない。

「箒ちゃん」

「……何ですか?」

「私ね、簪ちゃんに今、凄く嫌われてるの」

「……そうなんですか」

「うん。どうもね、私に引け目を感じちゃってるみたいで。私としては仲良くしたいんだけど、どうもおねーさんって簪ちゃんの前だと口下手なのよね。どれだけ機会を作って話そうと思っても、話す内容を原稿に書いて覚えた時でさえ、目の前だと頭が真っ白になっ

て話せなくなっちゃうの。箒ちゃんもそういう人、いるんじゃない？」

この口の達者な人が、話せなくなる――？ 箒にとって、にわかには信じがたい話だった。

誰か、好きだから話せなくなる相手。……目の前に、つい辛辣に当たってしまう意中の相手がいる。これと同じか？ それとも、これとはまた別のものだろうか？

「けど、本当は好きで好きでたまらない人に拒絶されたまんまって、凄く悲しいでしょ」

「あ、は、はい」

初めて、楯無の話に箒は肯定の意を示した。

「だからさ、いきなりすぐには無理でも、ちよつとずつでいいから仲良くなっていきたいんだ。そんなおねーさんが簪ちゃんを見て、それで頑張ってることを応援して、変かな？」

「変……じゃ、ない、です」

「うん、ありがと」

箒が答えると、ニコリと楯無が笑った。どうやら、最悪レベルの言い争いは回避できたらしい。一夏はホッと胸を撫で下ろし、同時に楯無に少しばかり感謝をした。

「それじゃ、話を戻しますけど――手伝うって、具体的に何を手伝ってもらえるんですか？」

「ええっと、まず、第三世代の稼働データ。私の機体のデータは全部、使ってもらっていいよ。……あ、できれば、簪ちゃんには内緒にしておいてね」

「あー、……了解しました。楯無さんは、それでいいんですね？」

うん、と楯無が答える。その返答が少しの寂しさを含んでいるように思えたことは、とりあえず一夏は言及しないことにした。

「それと、今第二整備室のみんながやってる作業を、第一整備室にもいくらか回すようにするわ。ちよつとだけだけれど、クラス対抗戦より前に作業の全部が終わるよう分担してみる」

「そっちも、オフレコですか？」

「出来ればお願い。うーんと、2人とも、さつきまでずっと整備室にいたんだっけ。今日はもう帰るね、データは一夏くんのPCに送っておくわ」

「なっ……」

声を荒げて批判しようとして、箒は先ほどそれで一夏に注意されたことを思い出し、声を出すのを抑えた。そのかわり、楯無がドアのノブに手をかけたところでようやく、小さな声で反論した。「それじゃ、仲良くなるも何も、一方的な奉仕じゃ……！」

「あはは、やっぱりそう見えちゃうか。けど、出来れば、簪ちゃんの専用機が完成するまでは黙って欲しいかな。さつきも言ったけど簪ちゃんは今私を嫌ってるから、多分私の名前が出たら好意を受け取ってもらえないの」

「けど、けれど……」

それで本当に、報われるのか？

言葉にならないその質問に対し、楯無は今度は誇らしげな笑みを浮かべた。

「兄とか姉って、そういうものよ。多分、箒ちゃんのお姉さんも」
箒が更に問おうとした時、既に楯無はドアの向こうへと消えていた。

3・2 待ち兼ねたのは(?) 掃除回(前書き)

ひとつ前の話はコピペミスをしており、加筆がされています。

もしかしたらそこを読んでいないために話が繋がらない可能性があるあるので、一度ひとつ前のページを見てみてください。

それと、遅れましたが、日刊最高10位ありがとうございました。くらげより上なのかな? どちらも一桁に行けなかったのは、多少残念ではありますけど。

3 - 2 待ち兼ねたのは(?) 掃除回

——姉というのは、無条件で弟妹を好くもの。

それは本当なんだろうか。詳しく理由が言えないから、楯無は適当にごまかしただけなのではないだろうか。

箒は今日一日、ずっとそんなことを考えていた。

——自分を好いている？

自分の姉を思い出す。好かれているか嫌われているかと問われれば、「分からない」。人付き合いが嫌いな姉が積極的に話しかけてくるのだから、まあ、嫌われてはいないと思う。しかし——好いているなら、なぜ、私に嫌われるようなことをする？

多少、わがままでもあった。世界を根本からひっくり返しかねない、ISというモノ。そんなものをもし自分が開発してしまったのなら、同じように発表していたであろう。自分で制御できないものを、他人に言える筋合いはない。

しかし——しかし、である。

例え筋合いがないものであろうと、そのせいで自分があまり幸福とは言えない生活を過ごしてきたことは、覆しようのない事実なのだ。

逆に姉は自分のために何かしてくれたことがあったであろうか？ 箒は昔のことをあまり思い出せなかった。いじめられそうだった自分を助けてくれた一夏——その後、代わりに自分がボコボコにされていたが——の記憶やら、この髪型になった理由やら、強く印象に残ったものは思い出せなくもないが、それすら美化補正が掛かっているような気がする。

保護プログラムが理由で国に保護されるようになってからIS学園入学までの記憶は、思い出せないのではなく思い出したくなかつ

た。楽しくもない転校生活、友人ができたと思ったら保護プログラムの影響で再び転校、そして――

いけない、と篤は感じた。何やら、姉のことから陰鬱な思い出へと、考え事が勝手にシフトしてしまっていたことに気付いたためだ。慌てて、再び姉のことを回想する。

そうしていくつかの記憶をどうにか探ってみたところ、残念ながら姉が自分に何かしてくれたという記憶は、ほぼ見つからなかった。小さい頃、たまに宿題を教えてもらっていた――ような、気がする程度。

もしかすると、楯無のように『見えない場所で尽力』してくれているのかもしれない。けれど、もし自分に不幸が降り懸かるとすれば、それは高確率でIS――及び、篠ノ之束絡み。不幸を作った根本原因になっておいてそれを排除する、どうしようもないマッチポンプのように思える。

結局、姉が自分を好いているという明確な証拠は見つからなかった。篤は大きく1回まばたきをして――目の前には、一夏がいた。

「ひゃっ!？」

「ひゃっ、て何だよ。せつかく今から夕食だからこつちの世界に戻してやったのに」

「こつちの世界……?」

どういうことか。いやそれより、夕食。夕食? 一夏が楯無の専用機データを持って整備室に来た時は、まだ4時頃だったはず。今は、何時だろうか?

「ずっと考え事してたんだろ? 篤が立ってた場所の近くにあるパーツを頼んだ時も代わりにセシリアが取りに行ってたし、名指ししても目をつむったまま返事がないし」

「え、えと……私は、そんなに長く考え事をしていた、ということか?」

一夏が「気付いてなかったのかよ!」と漏らしながら、ポケットから携帯を取り出した。画面の時計には、19時03分と表示されていた。

3時間。何がまばたきだ、と箒は笑った。まさか、嫌っているはずの姉のことをちよつと指摘された程度でこれほど時間を使うなどとは、考えていなかった。

きゆるるー、と、身体の一部から虫が悲痛な叫びを上げた。頭では長時間の出来事だと認識していなくても、身体のはうはしっかり反応するらしい。

「考え事は後にして、とにかく飯行こうぜ。先に行った4人に食べ終わられちゃうぞ」

「むっ? もうあいつらは先に行ったのか」

「それすら気付いて……ま、いつか。そんだけ考え事に集中してたんだな。悩み事だったらいつでも聞け? おおかた、昨晚の楯無さんとの話で、束さんのことでも考えてたんだろ?」

「うっ」

わずかに、箒の首より上の体温が上昇した。どうしてこう、こいつは心の機微に聡いのだろうか。恋愛面では、てんで駄目なくせに。「ん……おい、箒!」

ぴとり。一夏の身体はいつの間にか、箒と密着していた。もちろんそう促したのは一夏ではなく、箒だった。

「何だ、お前は女性の1人もエスコートできないのか」

「い、いや、そういう話じゃなくて……」

「ほら、私は悩み事で忙しいんだ。食堂まで、しっかり連れていてくれよ?」

一夏からすれば、女性に密着されるというのはそこそこ珍しい体験だった。

別に、彼の容姿や性格が悪くて恋人ができなかったのではない。事実、過去に一夏は何度か告白されたことがあった。そのことごとくを「聞き間違える」「意味を履き違える」「何かしらの罰ゲーム

と間違える」で撃沈してきたため、結果として彼女が一度も出来なかったというだけだ。

ともあれ、女性慣れしていないという事実は確かなものだった。必然、くっついていいる箒の身体を、嫌でも意識してしまうことになる。

少し強引に引き離そうとしてみたが、残念なことに、一夏のフイジカルは箒のそれ未満だった。

仕方なく、心を無にして一夏は食堂へと歩きだした。

「その……当たってるんだけど」とうつかり口にしてしまって、道中一夏は箒に静かに脇腹を抓られた。

「むっ……」

「くっ……」

一夏と箒が食堂に到着すると共に、簪と鈴音の2人が一夏を睨んだ。

その視線自体に一夏は気付かなかったが、背筋に走った微弱な電流が、なんとなく、自分が何やら変な地雷を踏んでしまったということを教えていた。

とはいえ待たせるのも悪いので、一夏はすぐに食券を買う。

「箒、そろそろ離れてくれないと、両手が使えないんだけど」

「ん？ ……あっ！ そ、そうだったな！」

一夏に言われて、慌てて離れる箒。そんなに慌てるなら最初からくっつかなければいいのに、と一夏は考えたが、どうやら彼女は特に不満を持っていないようなので、その点だけは安心した。

——代わりに、この日は簪と鈴音から徹底的に無視され続けたのだが、それがなぜなのかを一夏は理解できなかった。

その日の夜。

昨日の言い合いの続きを果たさんと、鈴音は再び一夏の部屋に向かっていた。

本当は部屋まで一夏と一緒に行く予定だったのだが、彼を無視しているうちに帰られてしまったのだ。結果、遅れて1人で行くこととなった。

「あいつ、何よ、箒とテレテレしてくれちゃって……」

思い出すのは、食堂での一夏だ。

箒に身体を密着させて（正確にはさせられてだが）、鼻の下を伸ばして（これも、鼻の下を伸ばすというより意識しないように必死だったのだが）、確かに、自分のスタイルと比べれば、箒はちょっとばかりか魅力的かもしれないが――。

だからと言って、これみよがしに見せ付けてくるのはいかなものか。その代わり、同室は箒から奪ってやる。一夏に恋い焦がれるこの女子の腹の中は、多少、黒い。

「1025号室、1025号室……」

昨日の行動のおかげもあり、部屋の場所は既に把握していた。

扉をコンコンとノックする。返事がない。

まさか、いないのだろうか。いやそんなはずはない。確かに、彼は先に帰ったはずなのだ。

確認のため、ドアに耳を当てる。すると、

「一夏を放さんかあ——っ!!」

いきなり、箒の声が聞こえた。やけに大きな怒鳴り声。

そこで、鈴音はあることに気付いた。

部屋の中にいるはずの人物は2人。片方が一夏で、もう片方は箒。そして、箒は一夏を放せと言った。即ち……一夏と箒以外に、もう1人誰がいる。

咄嗟に、鈴音はドアノブを捻っていた。条件反射みたいなものだろうか、自分でさえどのタイミングで扉を開けたのか認知できなかった。

ドアを開いた鈴音が見た光景は——木刀を持つ箒、その木刀で思い切り叩かれる一夏、そして、見たこともない女子生徒だった。

「……つまり、部屋に侵入していた楯無さんが一夏を妙に誘惑したってんで、頭に血が上って攻撃したら見事に回避された、と。その攻撃を振り切っちゃって出来たのが、今そこでのびてる一夏ね」

鈴音の確認に、箒は申し訳なさそうに「そうだ」と答えた。

第三者である楯無に説明されて、鈴音はわけのわからなかった光景をようやくと理解したのだ。一夏を放せと言いながら一夏に攻撃を当てるというちぐはぐな行為は、見たところで理解できるものではない。

「で、この人は簪の姉の楯無さん、と」

今まで箒に向けていた湿気を孕んだ眼を、鈴音は今度は楯無に向ける。しかし、そのプレッシャーなどどこ吹く風と、楯無は悪戯っぽい笑みを浮かべるばかりだった。

「それにしても、本当にこの人って、あのおとなしい簪のお姉さんなの？ 外見以外全然別物じゃない」

外見も、スタイルという面では別物（主に胸だとかバストだとかそんな辺りが一番目を引く）だが——それを言ってしまったら何かに負けるような気がしたので、鈴音はこの感想を胸の中に留めておくことにした。小さかった。畜生、と鈴音は言おうとして、この言葉と怒りも留めておこうと決めた。溜めて溜めてやれば、きっと大きくなる。

「鈴音ちゃんって、結構えっちなんだ」

「えっ!？」

自分の胸元を両腕で抑えながら、楯無が恥じらうように紅潮しながら言う。

「だって胸ばかり凝視してくるし。あ、もしかしてそういう趣味？ 悪いけどおねーさんは——」

「ちっ、違います違います決してそんなんじゃないありませんからっ!」

「うん、知ってる。あれでしょ？　鈴音ちゃんが好きなのはいち——」

「はわわああああっ！」

慌てて口を塞ぐと、鈴音はかなりのスピードで飛び掛かる。——しかし、相手の顔を捉えていたはずの手はいつの間にも方向転換して、隣で気絶していた一夏の腹を思い切り攻撃した。

楯無と鈴音の顔の色が、今の一瞬で逆転した。

一切デフォルメチックな要素がない、とてもリアルな「うげっ」という小さなうめき声が、一夏の半開きの口から飛び出した。

「……ほう？」　箒が、これみよがしに眉を吊り上げた。

「いつ、いや、今のはおかしいって！　いきなり進行方向変えられるとかありえな——ちよつと一夏！？　なんか冷たくなってきてるじゃない！」

鈴音が一夏の胸に手を当てた。鼓動がない。いや鼓動はある。息をしていない。いや息している。頭の中がこんがらがっていた鈴音は、あああわと一夏の状態を確認するばかりだった。

「さっ、バランスも取れたところで話の続きといきましょうか」

「バランス……？」

箒がオウムのように聞き返す。はて、バランス？

「これで2人とも一夏くんを攻撃したんだから、ちよつどいいじゃない」

「わざわざ一夏を攻撃させる意味は……？」

沈黙。

鈴音が一夏を揺する音以外が一切聞こえない時間がおよそ4秒ほど経ち、それから、

「……だって、一夏くんばかり簪ちゃんとベツタリで、ずるいんだもん」

少し拗ねた表情の後、舌をピースサインを伴い、「だから、私の鬱憤ともバランスを取らせちゃいました、えへっ」

追加オプシオンで茶目っ気たっぷりのウインクまで付けられて、

箒は改めて彼女を刀で狙うべきか真剣に考えた。

最も、その前に――隣でとうとう人口呼吸を始めようとしていた鈴音をたたきのめす仕事の方が、優先順位は高そうだったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357z/>

IS 勤勉パラメータ極振りで

2012年1月15日01時51分発行